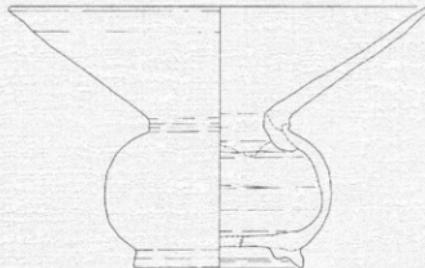


史跡 斎宮跡

平成 7 年度発掘調査概報



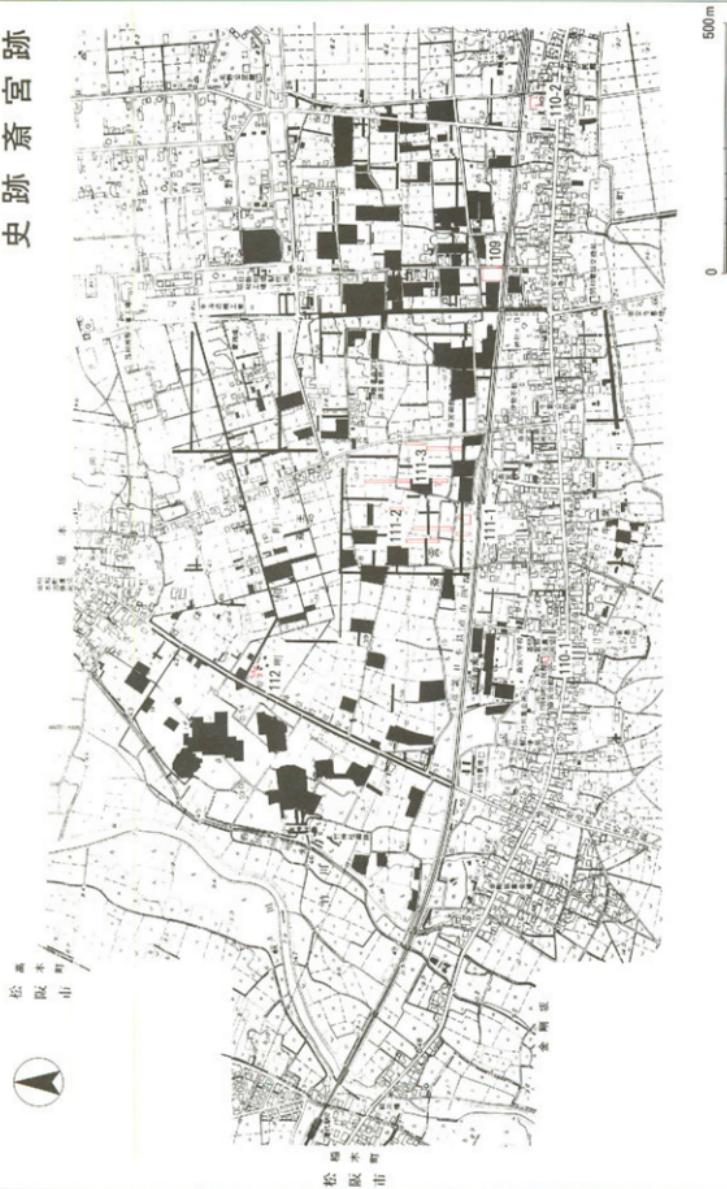
1996

斎宮歴史博物館



第109次調査区遠景（南から）

史跡 斎宮跡



第1図 平成7年度発掘調査位置図（1：10,000）

はじめに

三重県下で一万二千か所にも及ぶ埋蔵文化財の中でもその歴史を代表する遺跡であり、面積や規模の上でも全国有数である「斎宮跡」の調査・研究や史跡整備並びに公開・展示施設である斎宮歴史博物館の設置等については、地元明和町のみに止まらず県としても最大限の努力を続けてまいっております。

そのような中で、明和町はじめ多方面からのご要望の強い史跡整備・活用について「整備基本構想」に基づき、事業の具体化に向けての計画策定や当該地区的遺構の状況把握のための発掘調査に明け暮れる平成7年度であったと申せましょう。

特に、平安時代初め頃と言われる方格地割の中枢部と考えられている一画では今後これほどまとまった面積の調査は少ないのでないかと言われる第109次調査では当該地を囲む柵列が二重であることや、平面は勿論深さにおいても斎宮跡では最大規模を示す柱壠形の掘立柱建物が検出されるなど斎宮内院を想起させる貴重な成果を得ることができました。

一方、整備・活用の面では近鉄斎宮駅北側地区の史跡整備についてその事業化に向けて多方面からのご助力も得て「整備基本計画」の策定を進めてまいりました。整備の実現までに解決しなければならない問題は山積していますが、地元の皆様をはじめ多方面からのご意見も伺い、ご理解・ご協力を得て進めてまいりたいと存じております。

このたび刊行させていただく本概報は平成7年度中に実施いたしました斎宮跡の計画的発掘調査の成果の概要をまとめたものでありますが、これまでの膨大な調査成果の蓄積と相まって斎宮跡の実態解明にとって貴重な資料となるものと信じております。

このような斎宮跡の保存と調査・研究にあたっては文化庁をはじめ斎宮跡調査研究指導委員の先生方のご指導や地元関係諸機関・各位のご協力の賜物と感謝申し上げます。

なお文末ではございますが、当斎宮跡の史跡指定以前から今日までの永きにわたり斎宮跡調査指導委員として建築史の立場はもとより多方面から幾多のご指導・ご助言を賜りました福山敏男先生にはさる5月ご逝去なさいました。これまでのひとかたならぬご指導に厚く感謝するとともに、ご冥福をお祈りいたしまして本概報の刊行にあたってのご挨拶とさせていただきます。

平成8年3月

斎宮歴史博物館

館長 川村政敬

例　　言

- 1 本書は、国庫補助金の交付を受けて斎宮歴史博物館が平成7年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要をまとめたものである。
- 2 明和町教育委員会が、国庫補助金の交付を受け調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の報告書は別途、明和町教育委員会が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては国土調査法による第VI座標系を基準とし、方位は座標北を用いた。
- 4 遺構の時期区分は、「斎宮の土師器（三重県斎宮跡調査事務所年報1984）」による。
- 5 遺構表示記号は次の通りである。

S B ; 建物 S K ; 土坑 S D ; 溝 S E ; 井戸 S A ; 構列 S F ; 道路 S S ; 足場 S X ; その他
- 6 第112次調査における第23図は、三重県埋蔵文化財センターが実施した平成7年度三重県埋蔵文化財技術者研修事業の一環として、同センター管理指導課主事森川常厚の指導のもとに研修生袖岡直樹、西澤裕幸、松葉和也により測量した塚山3号墳周辺現況測量図を基に斎宮歴史博物館の調査研究課で追加・修正して掲載した。
- 7 方格地割における各区画の名称は第27図に示した。
- 8 特に標示がない限り遺物実測図は実物の4分の1、遺物写真図版は3分の1である。
- 9 斎宮跡の調査全般については、次の先生方の指導を得た。

京都橘女子大学学長	門脇 穎二
千葉大学教授	北原 理雄
聖心女子大学助教授	佐々木恵介
前奈良国立文化財研究所所長	鈴木 嘉吉
(財)大阪文化財調査研究センター理事長	坪井 清足
聖徳学園女子短期大学教授	所 京子
名古屋学院大学教授	檍崎 彰一
三重大学教授	八賀 晋
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	福山 敏男
皇學館大学教授	渡辺 寛
- 10 現地での発掘調査及び本概報の編集・執筆は斎宮歴史博物館調査研究課の吉水康夫、野原宏司、大川勝宏、赤岩 操があたり、田端由佳、田所美里がこれを補佐した。
また、遺物整理には島村紀久子、角谷和代、奥田康子、鈴木美智子の協力を得た。
その他、調査には鵜山まり（天理大学々生）、川合正宏（立命館大学々生）、熊崎 司（京都府立大学々生）の参加を得た。

目 次

I 調査の経過と概要	1
II 第109次調査	3
III 第111次調査	30
IV 第112次調査	52
発掘調査報告抄録	74

表・挿図目次

[表] 1 平成7年度発掘調査一覧	2
2 第109次調査時期別遺構分類表	4
3 第111-1次調査時期別遺構分類表	31
4 第111-2次調査時期別遺構分類表	36
5 第111-3次調査時期別遺構分類表	40
6 第112次調査時期別遺構分類表	55
7 掘立柱建物・柵列一覧表	59
8 壑穴住居一覧表	59
9 遺物(土器)観察表	60
10 斎宮跡発掘調査次数一覧表	68

[図] 1 平成7年度発掘調査位置図(1:10,000)	i
2 第109次調査 調査区位置図(1:2,000)	3
3 タ 遺構実測図(1:200)	5
4 タ 遺物実測図(SK7430)	13
5 タ 遺物実測図(SK7425, SK7424, 包含層)	14
6 タ 遺物実測図(特殊遺物)	17
7 タ 遺構変遷図I-①期(1:1,500)	19
8 タ 柵列I期の10尺方眼による建物配置図(1:1,000)	21
9 タ 遺構変遷図I-②期(1:1,500)	23
10 タ 遺構変遷図II-①期(1:1,500)	25
11 タ 遺構変遷図II-②期(1:1,500)	27
12 タ 遺構変遷図II-③・④期(1:1,500)	29
13 第111次調査 調査区位置図(1:2,000)	31
14 第111-1次調査 遺構実測図(1:200)	33
15 第111次調査 S B 7440・7445・7465遺構実測図(1:80)	34
16 第111-2次調査 遺構実測図(1:200)	37
17 第111-3次調査 遺構実測図(1:200)	41
18 第111次調査 遺物実測図(SB 7445・7440, SK 7450)	45
19 タ 遺物実測図(SK7467他)	48
20 宮ノ前・上塗地区周辺微地形図(1:2,000)	50
21 タ 遺構分布状況図(1:2,000)	51
22 第112次調査 調査区位置図(1:2,000)	52
23 タ 遺構実測図(1:200)	53
24 タ 遺物実測図	56
25 タ 塚山古墳群分布図(1:2,500)	57
26 斎宮跡地区表示	72
27 斎宮跡方格地割区画名称	73

写 真 図 版

- 卷 頭 第109次調査区遠景（南から）
- P L 1 第109次調査区全景（真上から）
- P L 2 上：調査区全景（南から）
- P L 3 上：S A 2705・S B 7375・7385（西から）
- P L 4 上：S B 7385・7395（西から）
- P L 5 上：S B 7375（北から）
- P L 6 上：S B 1430（南から）
- P L 7 上：S A 6780（西から）
- P L 8 上：S B 7390（南から）
- P L 9 上：S B 7380（北から）
- P L 10 上：S B 7410（北から）
- P L 11 上：S B 7405（東から）
- P L 12 上：S B 1431（南から）
- P L 13 上：S K 7430（東から）
- P L 14 上：S K 7420（東から）
- P L 15 上：第111次調査 Aトレンチ全景（北から）
- P L 16 上：Bトレンチ全景（東から）
- P L 17 上：S B 7440（北から）
- P L 18 上：Dトレンチ全景（北から）
- P L 19 上：Eトレンチ全景（北から）
- P L 20 上：Fトレンチ北半（北から）
- P L 21 上：Gトレンチ全景（北から）
- P L 22 上：S D 7478（南から）
- P L 23 上：Iトレンチ全景（南から）
- P L 24 上：第112次調査区全景（北から）
左下：Bトレンチ（北東から）
- P L 25 第109次調査出土遺物
- P L 26 第109次調査出土遺物
- P L 27 第109次調査出土遺物
- P L 28 第111次調査出土遺物
- P L 29 第111次調査出土遺物
- P L 30 第112次調査出土遺物
- P L 31 第112次調査出土遺物
- 下：調査区全景（東から）
- 下：S B 7385（北から）
- 下：S B 7415（西から）
- 下：S B 7375（東から）
- 下：S B 1430（西から）
- 下：S A 7400・7170（北から）
- 下：S B 7390（西から）
- 下：S B 7380（東から）
- 下：S B 7410（東から）
- 下：S B 2700（東から）
- 下：S B 1431（西から）
- 下：S K 7430（南から）
- 下：S K 7432（南から）
- 下：S B 7435・7437（南から）
- 下：S B 7445（北から）
- 下：Cトレンチ全景（北から）
- 下：S B 7465（東から）
- 下：S D 7470（西から）
- 下：Fトレンチ南半（南から）
- 下：Hトレンチ全景（北から）
- 下：S D 7479・7480（東から）
- 下：Jトレンチ全景（北から）
- 右下：Iトレンチ（南東から）

I. 調査の経過と概要

第109次調査

古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に始まる斎宮跡の発掘調査も昨年度で四半世紀が経過し、新たな一步とも言える26年目に当たる平成7年度の調査は第109次調査として平成7年4月6日から鍛冶山地区で開始した。

調査場所は、これまでの発掘調査成果の蓄積から平安時代初期を中心に展開を想定している方格地割において、広範囲をめぐる柵列や祭祀を想起させる土坑の所在、大型掘立柱建物の集中等から一時期の斎宮跡にとって中枢的役割を担っていたことが考えられている鍛冶山西プロックに位置し、当該地の構造解明にとって極めて重要な位置を占めている。

調査の結果は、従来から知られている柵列の内側に更に内郭とも言うべき範囲を形成する新たな柵列の所在や、これまでの調査でも最大規模の柱堀方を持つ掘立柱建物群の検出等、当初の期待に違わず多大な成果を得ることができた。6月4日には「斎王まつり」に協賛するため、中間的な報告にとどまつたが、現地説明会を開催した。

現地説明会

当日は朝からあいにくの雨で、連絡の不行き届きから開催予定時刻には土砂降りのなか、参加された延べ83名のうち最後まで説明を聞いていただいた熱心な参加者とともにテントの下で関係者一同ドロドロになっての現地説明会となった。また、貴重な成果を地元の皆様に知っていただくため、7月16日には地元の皆様を対象として改めて説明会を開催し、43名の方々にお集まりいただき、斎宮跡の重要性や調査・保存へのご理解を深める一助となったものと確信している。写真撮影や遺構実測等を経て9月25日に至りようやく埋め戻しを含め調査の全作業を完了することができた。

斎宮駅北側地区

続く第111-1次調査の対象である近鉄斎宮駅北側の一帯は、史跡の保存管理計画における土地利用区分で第一種地区に位置づけられ、昭和54年度以降、管理団体である明和町が主体となって土地公有化を進めてきたところである。このため、その進展に伴い史跡整備の促進を求める地元の声は強く、行政内部でも史跡の活用や地域の活性化の観点から史跡整備事業の方向を模索していた。そこで、事業の具体化に先立ち当該地域の遺構の様子を把握するためトレンチ調査を実施したものである。

この地域は、斎宮字内山、上園及び宮ノ前の三か所の小字にまたがっているため、便宜的にそれぞれを第111-1~3次に区分して7月14日から現地調査を実施した。

第111-1次調査

第111-1次調査の内山地区は斎宮駅を含む近鉄線沿いの現況畠地で、範囲確認調査の際の第8-8次調査をはじめ数次にわたる調査が行われているため、8月23日から25日まで普及・啓蒙事業の一環として夏休みに実施している体験発掘教室では当調査区で竪穴住居や掘立柱建物の柱穴、土坑、溝等の遺構を掘り下げる発掘作業を実際に体験してもらったほか、博物館内での斎宮の発掘についての話、土器の水洗・接合等、職員や作業員の指導のもとで子供たちには貴重な経験をしてもらうことができた。

第111-2次調査

第111-2次調査は上園地区で從来水田及び畠地であったところに3本の南北トレンチを設定して実施したもので、当初は既に遺構面が削平されていることも想定されていた。しかしながら、調査の結果大半の地点で黒褐色土（通称：黒ボク）の地山が確認され、希薄ながら竪穴住居等の遺構も検出された。このことから、当該地の微地形

は元来ゆるやかな谷を形成しており、建物等の配置には不適切であるためか、この点では「斎宮の時代」には土地利用の頻度が低かったものと言えよう。

第111-3次調査

一方、第111-3次調査は宇宮ノ前に属するものの、第111-2次調査と同様に6本の南北トレチを設定して調査を実施した。この周辺はかつて瓦用の粘土採取が行われたと言われており、近年まで水田として利用されていたことも相まってここでも遺構面は既に削平されているものと想定していた。調査の結果、当初の予想どおり粘土採掘の跡が確認され、検出できた遺構は方格地割における「斎王の森」から南に延びる区画道路の側溝とも考えられる溝や井戸等があげられるのみであった。

平坦な台地に立地する斎宮跡でも遺構検出面（地山）の微地形にはゆるやかな凹地が点在し、大半の地点で黄褐色土が地山であるのに対し、凹地部分では黒褐色土（黒ボク）が地山で、その下層に黄灰色粘土の存することが知られている。今回の第111-2・3次調査地域も例外ではなく、過去の土地所有状況の影響も有ろうが、瓦製造用粘土の存する地質から「斎宮の時代」における遺構の状況や土地利用の様相を考察するうえで貴重な知見となった。また、『斎宮跡整備基本構想』において「遺構の活用演出的整備ゾーン」と位置づけ、遺跡のエントランスとして集客効果の期待できる史跡整備を近い将来に具体化するうえでも重要な成果と言えよう。

第112次調査

さらに、第112次調査は本年度の史跡整備で斎宮歴史博物館の東側に位置する山林で古墳及び所謂鎌倉時代大溝を表示することとしたため、急速その形状及び規模を知るために平成8年12月8日から翌年1月31日まで発掘調査を行い、その後この成果をもとに年度内に整備工事を実施した。

現状変更調査

その他、史跡現状変更に伴い管理団体である地元明和町教育委員会が調査主体となり、斎宮歴史博物館が担当して実施している事前の発掘調査は、本年度は第110-1次及び第110-2次調査の2件に止まり、発掘調査を前提としつつも工事立会いの過程で遺構に重大な影響を及ぼすことが少ないと想われるため本格的な調査はに至らなかつた町道側溝新設も含め、5件について実施した。

第110-1次調査は、旧参宮街道沿いの町有地で実施し、史跡西部に多く知られる古墳時代終末期の円形及び方形の周溝各1基を検出した。

第110-2次調査は史跡東限のエンマ川に接し、近鉄線の南に位置する水田で実施し方格地割における南から2本目の東西道路の側溝と考えられる溝の検出や、斎宮跡で3例目の猿面鏡の出土等貴重な成果を得た。

（吉水康夫）

調査次数	地区名	調査面積m ²	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	区分
109	6 AFL-D.E	1,070	H. 7. 4. 6~H. 7. 9.25	明和町斎宮字鍛冶山2763-1他	本山 宏	計画発掘調査	2
110-1	6 ACM-J	110	H. 7. 8. 8~H. 7. 8.21	明和町竹川字東裏262-3	明和町	事務所の新築	4
110-2	6 AGR-O	480	H. 7.10.11~H. 7.11.30	明和町斎宮字笛川2345-3	竹内喜三雄	盛 土	3
111-1	6 ADM	335	H. 7. 7.14~H. 7.12.12	明和町斎宮字内山地内	明和町	計画発掘調査	1
111-2	6 ADK	505	H. 7. 7. 7~H. 8. 2.29	明和町斎宮字上園地内	明和町	計画発掘調査	1
111-3	6 ADL他	895	H. 7.12.13~H. 8. 2.29	明和町斎宮字宮の前地内	明和町	計画発掘調査	1
112	6 ACB-B	25	H. 7.12.12~H. 8. 1.31	明和町斎宮字塚山3276-15他	明和町	計画発掘調査	3
合 計		3,420	内訳：計画発掘調査	2,830m ² 、	史跡現状変更に伴う事前調査	590m ²	

第1表 平成7年度発掘調査一覧

II 第109次調査

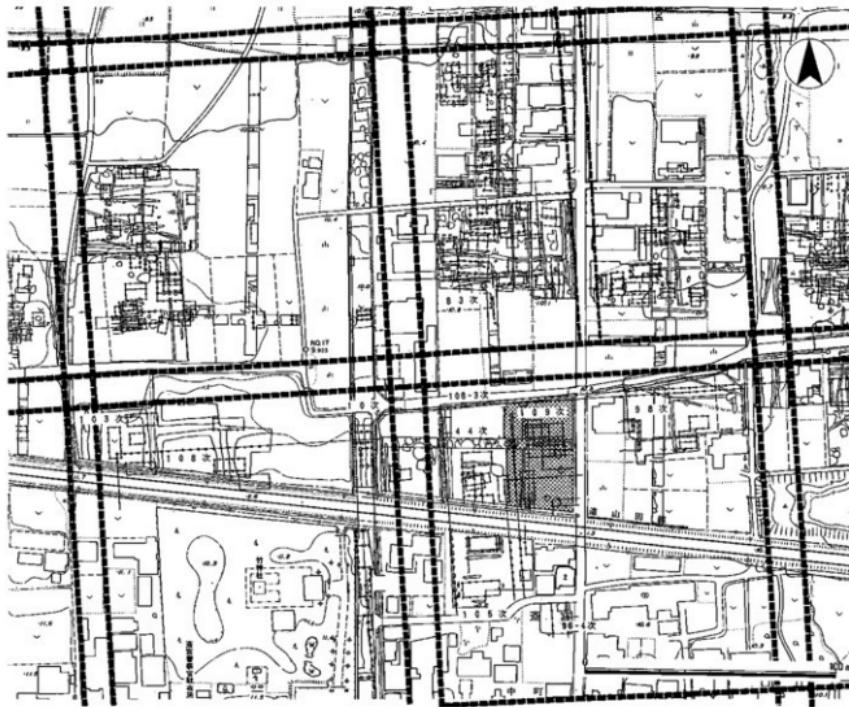
(6 AFL-D・E 鍛冶山地区)

1 はじめに

経過

平成7年度第1回目の計画調査は、昨年度近鉄山田線を挟んだ南側で実施した第105次調査の成果を受けて、竹神社の北東70mの地点に調査区を設定した。史跡東半に一辺約120mを基調とする方形区画が東西7列×南北4列並んだ、方格地割が平安時代前半期を中心として構成していたことが想定される。その中で平成4年度以来方格地割の中核部とみられる鍛冶山西ブロックでは、西加座北・西加座南ブロックにおいて区画中央を幅約10mの区画内道路が通るため、他の区画よりも東西幅が130mと広くなっている。この区画内が平安時代初期前後には東西約165m×南北推定規模約117mに及ぶ大規模な柵列（板塀か？）によって区画され、区画内には規格的に配置された大型の掘立柱建物が立ち並ぶことがこれまでの調査によってわかっている。

一方、同じく昨年度の第108次調査でこの西に隣接する牛葉東ブロックでも、鍛冶山西ブロックに次ぐ規模の大型柵列による区画（東西約107m×南北約95m）が現在の竹神社を取り囲むように巡り、区画内に規格的に掘立柱建物が建つことがわかった。



第2図 調査区位置図 (1:2,000)

目的

これらの調査成果をふまえて、鍛冶山西ブロックの中心部分にあたる当調査区内で掘立柱建物あるいは欄列がどのように展開するのかを確認し、また周辺調査区の遺構とどの様に対応してこのブロックを構成していたかを解明することを調査目的として、平成7年4月6日から9月25日にかけて面積約1,070m²を対象に調査を実施した。

現況

調査区の現況は標高約10.1mの畠地で、灰褐色土の耕作土厚約15~20cm、暗灰褐色土の包含層厚約15cmを除去した後の黄橙色粘質土の面（地山）を遺構面として捉え、検出を行った。ただし調査区北辺から約6m南までの間は当調査区以北でみられる、所謂黒ボク土の堆積があり、この1.1m下が黄橙粘土層となるため黒ボク土面で検出を行った。遺構面の平均標高は約9.8mで、全体的にやや南上がりである。

2 遺構

(1) 奈良時代後期～平安時代初期の遺構

S K 7391～7394
7396～7398

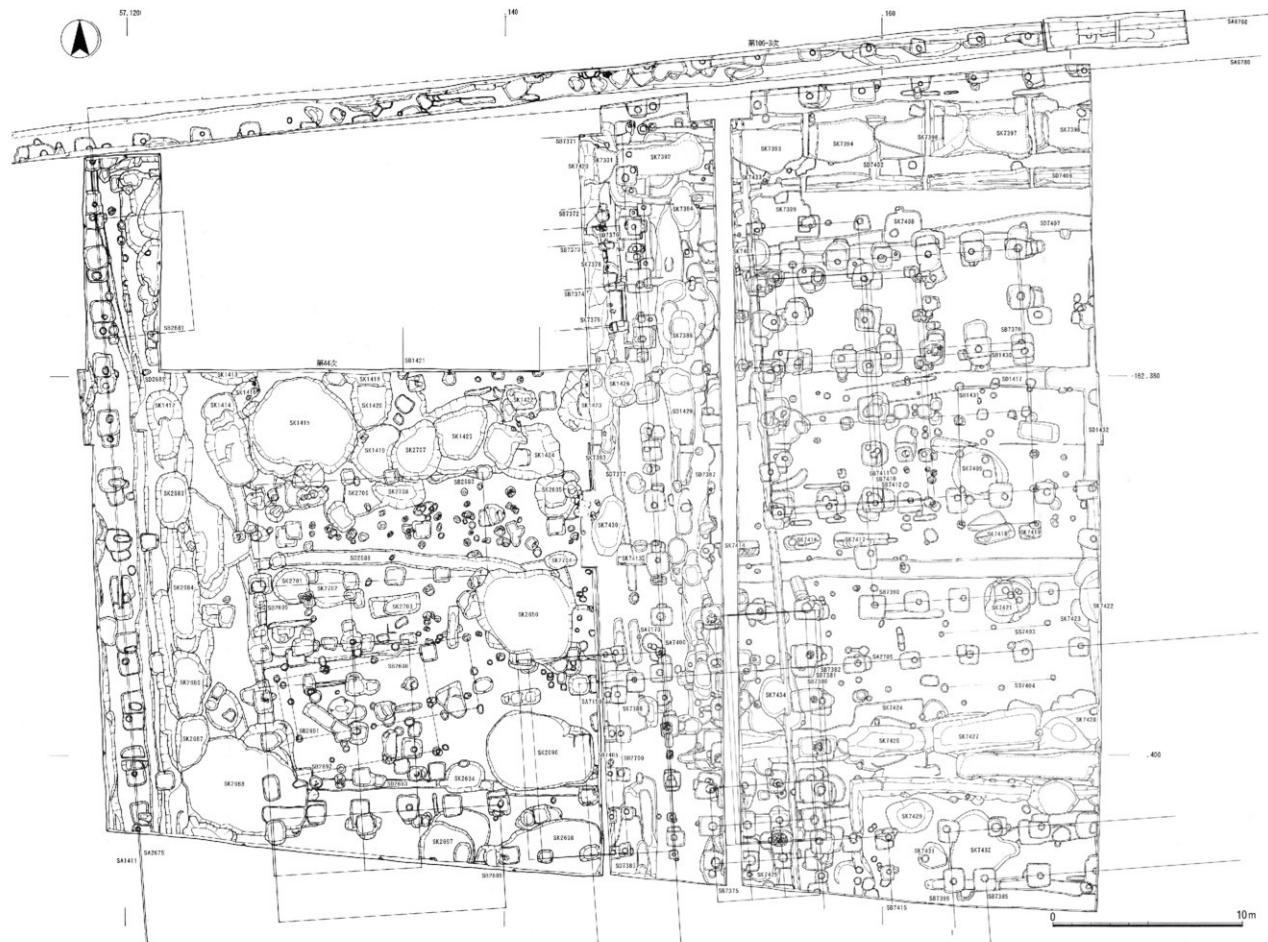
調査区北端で検出した連続する土坑群である。形状は長楕円形で長径約4.5m、短径が1.5m~2.0m、黒色の埋土中には奈良時代後期の土師器杯・椀等がみられる。後出の外郭北辺欄列S A 6780に併走して東西に延びるが、約20m隔てた第98次調査区ではその延長が認められない。若干時期が異なるが、西隣の第44次調査区内では南北に連続する土坑群S K 1412・2683・2684・2686・2687が外郭西欄列に併走しており、共に区画施設の一部を果たしたものかと思われる。さらにこの土坑群の上層では平安時代後～末期の溝が重複していた点も大変よく似ている。

S K 7386

調査区西北部で検出した長径約2.5m、短径約1.3mの楕円形の土坑で、黒色土の埋土中から奈良時代後期の土師器杯・杯蓋・瓶、須恵器杯を出土している。先の連続する土坑群S K 7392から約9mほど南のところにあり、形状・性格を違える土坑である。

		遺構の種別						
		S K		S A	S B	S D	S S	
		外郭	内郭					
奈良	後期	7386 7391 7392 7393 7394 7396 7397 7398						
				2705				
	初期	1423			7375 7385			7403 7404
平	前Ⅰ期	7378 7383 7401 7413 7414 7416 7417 7418 7419 7420 7424 7433		7400	1430 7370 7380 7381 7382 7390			
	前Ⅱ期	1426 7388 7409 7422 7423 7425 7426 7427 7428 7430		6780	7170	2700 7405 7410 7411 7412 7415 7395	1429 7387	
安	前期	7384 7434			7373	7377 7402 7406		
	中期	7431 7432 7408			7372 7374	1417 1432 7376 7389		
	後期	7421 7429			1431			
時期不明		7379 7399			7371	7407		

第2表 第109次調査 時期別遺構分類表



第3図 第109次調査 遺構実測図（1:200）

- S A 2705 調査区中央よりやや南寄りの所を東西に横切る大型の掘立柱による横列である。柵列の方向はE 4° Nを示し、柱間は2.96m(10尺)等間で8間分(23.7m)を検出した。柱掘形は一辺約1.0m~1.2mの方形で深さは約0.8m~1.0m、直径約30cmの柱痕跡がある。埋土は黒褐色土で、建て替えはみられない。S A 2705は鍛治山西ブロックの区画全体を囲む先行する外郭柵列(北辺S A 6760・東辺S A 6770・西辺S A 1411)によって画される内部において、外郭柵列と同等の規模・方向で囲みを構成する内郭柵列の北辺に相当するものである。昨年度の第105次調査で、南北柵列S A 7150の延長が近鉄線路北側の第44次調査S B 2705につながる可能性が指摘されていたが、S B 2705の柱穴以北に該当柱穴が認められずS B 2705の北端の柱穴の東延長に当調査区の東西柵列が延びることから、S A 7150は第44次調査のS B 2705の柱穴まで延び、当調査区で検出した東西柵列とS B 2705の北端の柱穴で接して内郭を構成することがわかった。この東西柵列を先のS B 2705を改めS A 2705とする。
- S B 7375 調査区南端で検出した桁行3間以上×梁行3間の南北棟の総柱建物である。柱間は桁行2.0m等間、梁行1.8m等間で柱掘形は1.0m~1.2mの方形で柱痕跡は直径50cmと竈宮跡でも最大である。この建物は先の内郭柵列S A 2705に東側桁行筋を、また北側梁行筋をS A 7150に揃えて建つもので、内郭柵列の内にあり、内郭柵列から約20尺ずつ隔てた位置に規格的に配置された建物と考えられる。
- S B 7385 調査区東南の隅でわずか2間分を検出したもので、柱間は3.0mで柱掘形は一辺1.2m~1.3mの方形である。これも先行する内郭柵列の内側に柱筋を揃え、西辺のS A 7150から70尺、北辺のS A 2705から40尺を隔てて建ち、先のS B 7175の南側妻柱筋の延長に柱筋を揃えるものである。東・南へその延長が想定されるが、建物であれば内郭でも中心的位置を占める建物であることが考えられ、また南へ延長した場合第96-4次調査で検出したS B 6841へつながり柵列となる可能性もある。
- S S 7403・7404 S A 2705の東から3間分に伴ってその北側と南側とで検出したもので、柱穴の直径は30cm~50cmと小規模で柱穴が比較的浅いにも関わらず約3.0m等間で並ぶ。柱設立時の足場穴であろうか。
- S K 1423 調査区中央西辺で第29次・第44次調査時に西半を検出した土坑の東半を当調査区で検出したものである。規模は3.0m×3.5mの不整円形を呈するものと想定され、土師器杯・皿を多く出土する。遺構面からの深さは約70cmである。
- (2) 平安時代前I期の遺構
- S A 6780 調査区北端で、後出の外郭北辺柵列の8間分(一部想定)を検出した。第98次調査で検出した北東角から第44次調査・第106-3次調査で検出した北西角までの、総長約117.6m=400尺の大規模な外郭柵列が想定されるが、今回はその中间地点において柵列が続いていることが確認できた。
- また当調査区東端の柱穴から東へ2間目の柱が区画のセンターラインにあたるため、この中軸線に入口施設を設けたとすればその控柱は調査区内で検出することが想定できるが、その様子は窺われない。
- S A 6780はこの時期に構築されて、以降平安時代前期まで建物に規制を与えていたことが大型掘立柱建物の配置から考えられるため、平安時代前期まで存続した外郭柵列と考えている。

- S A 7400** 調査区西辺の近くで検出した柵列で、先の S A 6780を外郭柵列とする時期に、後述の S A 7170に先行して設けられる内郭南北柵列である。柱掘形は一辺約60cmと方形ではあるが S A 7170に比べ小規模で、柱間は3.0m等間、方向は N 3° Wと外郭柵列とはやや向きを違えるものの、東西の柱筋は概ね外郭南北柵列に揃えているため S A 6780・2675を外郭柵列とする時期の内郭柵列であろうと考えられる。しかし第105次調査では S A 7170に重複しておらず、また外郭北辺柵列の柱穴に向かって北進はするが北辺の2間手前で柱穴が止まるため外郭柵列へ接続はしないものと考えられる。したがって先行時期の内郭柵列のように一定空間を画する柵列から間仕切り的な役割を果たす柵列へと内郭区画施設が移行したものと思われる。
- S B 7370・1430** 調査区中央やや北よりに位置する大型の掘立柱建物である。S B 7370の規模は 5間 × 2間の身舎に西面庇をもつ。棟方向は E 4° Nで柱掘形は一辺1.1m～1.3mの方形で遺構検出面からの柱穴の深さはこれまでの調査の中で最も深い1.3m（標高8.4m前後）である。柱痕跡は直径40cm前後で、この柱掘形の埋土中には S B 7380～7382のように多くの石が入っており、S B 7380ほど形状を保ってはいないものの、堅固に建てるためにこれらの根固めの石、掘削の深さを必要としたものかと考えられる。建て替えは1回で身舎の規模は同規模であるが、後出の S B 1430には西面庇に加えてさらに南面庇も付加される。ただしこれらの庇は「L」字に巡るものではなくそれの方に独立した庇である。この2棟は北側桁行筋を S A 7400の柱穴に揃えて建ち、当該時期の外郭柵列 S A 6780から約9.0m（30尺）を隔てて南側に建つ。
- S K 7413・7414
7416～7419** 調査区中央を東西に横切り断続的に続く土坑群である。形状は長さ1.3m～2.8m、幅約0.8mの略長方形で、埋土は黒色を呈し、遺構面からの深さは55cm～60cmである。遺物は極わずかに土師器片等がみられるのみであるが、S B 7370・1430、S A 2705双方から約6mの中間位置にあり、S B 7370・1430の正面を開ける形で方向も揃えていることから、これらの施設と併存したものと思われるが具体的な性格は不明である。
- S B 7380～7382** 調査区の中央から南半に建つ 5間×2間の大型掘立柱建物である。S B 7380～7382は2回の建て替えを行った南北棟建物で、棟方向はいずれも N 4° Wである。柱間は2.4m等間、柱掘形は1.0m～1.2mの方形で直径35cm～40cmの柱痕跡を検出した。灰褐色を呈する埋土中に30cm前後の石を多く含む。これは切り合いの新しい方の柱穴で顯著にみられたが、柱の据わる位置に円形に敷設しており、柱の根腐れ・沈下を防ぐための根固めのものと思われる。それが2回の同位置での建て替えにより柱掘形埋土中に混入したものと考えられる。
- S B 7390** S B 7390は桁行2.4m等間×梁行2.7m等間の柱間で、S B 7380～7382の北東隅の柱から北側妻柱筋の延長約2.9m～3.7mの位置に南西隅の柱を置き、南側桁行筋を S A 7400・7170の柱穴に揃えて逆「L」字形に並んで建つ。しかし3棟の建て替え建物の内、最も古い時期の S B 7382と S B 7390とでは軒を接すると考えられるため同時に併存するとは想定しにくい。
- S K 7378** 上層を平安時代中期の溝に切られる長さ7.6m、検出幅2.0m、長楕円形の土坑で、遺構面からの深さは約0.9mである。土師器杯・皿を出土した。
- S K 7383** 調査区西端で検出した、長さ4.0m、幅1.6mの溝状の浅い土坑である。土師器の杯・皿が出土しており、皿が二枚口縁を合わせる状態で出土している。

- S K 7420・7433 いずれも上層を平安時代後～末期の溝に切られ、下層の S K 7391・7393を切る土坑である。S K 7420は調査区西辺の壁で半裁する状態で検出した。表土下約50cm～80cmがこの土坑の土器層で隙間なく土器が堆積している(PL14参照)。検出できたのは東半分のみで西側の未調査地に西半分が続いているものである。出土遺物はその大半が土師器杯・皿である。
- S K 7424 調査区南方にある一辺約1.7mの方形土坑で、南半分を S K 7426に切られている。遺物も比較的少なく、須恵器の盤(107)を出土している。
- (3) 平安時代前II期の遺構
- S A 7170 S A 7400の後を踏襲し、これに重複して建てられる内郭の南北柵列である。柱間は2.94m等間で当調査区内で11間、第105次調査からの総長23間(67.6m)を検出した。柱掘形は1.0m～1.2mの方形で埋土は暗灰褐色を呈する。先の S A 7400よりやや向きを西に振るが、外郭柵列のN 4°Wに近いもののわずかに及ばないため、この柵列も S A 7400同様、外郭北辺柵列 S A 6780に取りつかず、2間手前で止まるものとみられる。先述の外郭柵列 S A 6780・6790・2675の時期の内郭柵列は S A 7400で間仕切り的な区画施設に変わって以降はその形を踏襲して建て替えが行われたものとみることができる。
- S B 2700・7405 調査区南西隅で検出した南北棟建物で、これは西に隣接して調査を行った第44次調査で検出していた建物の東側桁行筋を検出したもので、第44次調査では先後関係で新しい方の柱穴を S B 2700としていたが、この S B 2700に先行する建物を S B 7405とし、さらに S B 7405には東面に庇をもつことがわかった。規模は5間×2間で、桁行柱間2.1m等間×梁行柱間2.3m等間、先行する S B 7405の東庇出は2.7mである。この2棟の柱掘形はいずれも平安時代前期新段階の土坑 S K 7388の底で検出したもので、また S B 7405は東面庇の柱穴が S A 7400の柱穴を切っていることから、S A 7400から S A 7170へ建て替えられるわずかな間に建てられたものと考えられる。一方、後出の S B 2700は東面には庇をもたないことから、S A 7170と併存した可能性は考えられるが、S A 7170の柱穴は北妻・南妻いずれの柱筋も揃えない。
- S B 7410～7412 調査区中央やや北寄り、先の S B 7370・1430に重複する南北棟大型掘立柱建物である。規模はいずれも5間×2間の身舎に、東面庇がつく S B 7412、同規模の身舎に北面庇がつく S B 7411、さらに同規模の身舎に再び東面庇を伴う S B 7410の順に建て替えられるものである。この3棟の柱掘形も一辺1.2m～1.3mの方形で、柱穴の遺構検出面からの深さは約1.1m～1.2mであり、S B 7370・1430同様しっかりと建てられた様子が窺われる建物である。西側桁行筋を当該時期の外郭北辺柵列 S A 6780の柱穴に揃え、東面庇の柱筋を同じく S A 6780の柱穴に概ね揃えて建つもので、S A 6780から約10mを隔てた南に位置する。
- S B 7395 調査区東南隅で検出した掘立柱建物で、桁行3間×梁行1間を検出した。柱間は桁行2.4m等間×梁行2.7m、柱掘形は1.0m～1.3mの方形で、直径約40cmの柱痕跡を持ち、埋土は灰褐色土である。柱間は S B 7390と類似しており、5間×2間の規模が想定できる。S A 7170の柱穴の延長にある S B 7380の南妻に北側桁行筋を揃え、また西妻の延長線上に S B 7410・7412の東面庇の柱筋を揃えた、内郭において S B 7410・7412と「L」字形の配置をとる建物である。

- S B 7415 調査区南端で検出した桁行1間以上×梁行2間の南北棟建物である。柱間は桁行・梁行とも1.8m等間で、柱掘形は一辺0.8m～1.0mと方形であるが、この時期の建物の中では規模が小さいものである。しかし北妻の柱筋はS B 7395の北側桁行筋と同じく内郭南北櫛列S A 7170の柱穴に揃えるもので、S B 7395と逆「L」字形に直交する形に配置され併存した可能性が考えられる。
- S K 7430 調査区西端で検出した長梢円形を呈する土坑で、灰褐色の埋土中に多量の遺物を包含するものである。中でも土師器杯・皿・碗が大半を占め、極僅かに土師器鍋・甕、須恵器杯や灰釉陶器も出土している。その他残存状況の良好な綠釉陶器椀が数点出土した。この土坑の土器出土状況は第98次調査のS K 6743に似ていて、法量の似通った皿あるいは杯が重なったままの状態で検出されており、その遺物の間、周辺に多量の炭化物を挟むものである。第98次調査のS K 6743と同じく特定の目的に使用された土器の廃棄場所と考えられるが、比較的上層において綠釉陶器椀やミニチュア土器などを包含している点において土師器中心のS K 6743とは様相が異なる。
- S K 7425 S B 7375の南半の柱掘形全てをこの土坑の下より検出した。4.0m×2.8mの略円形で、構造検出面からの深さは約50cmである。土師器杯・皿の他に綠釉陶器唾壺・椀、黒色土器鉢・硯、漆付着土器、青磁碗等を出土している。
- その他の土坑 S K 1426は第29次調査で南半分を検出した土坑で、2.0m×1.6mの略円形を呈する。構造面からの深さは約1.0m、土師器の杯・皿が出土する。
- S K 7388はS B 7405・2700の東側桁の柱掘形を切るもので、3.4m×2.0mの方形で西壁は調査区外のため検出してはいないが、西隣の第44次調査には延びていないことから、当調査区とのわずかな間に納まるものと考えられる。
- S K 7409は調査区中央で検出した3.0m×2.8mの略円形の土坑である。S B 7390の北側桁の柱掘形を切り、その後S B 1431柱掘形に切られる。土師器杯・皿の他に朱付着土器や綠釉陶器椀、鉄釘片が出土している。
- S K 7422も同じくS B 7390の南東隅の柱掘形を切る土坑で南北2.6m、幅1.0mで東半分は調査区外に延びるため未検出である。土師器杯・皿、黑色土器、綠釉陶器片を出土する。
- S K 7426～7428は調査区南東部で断続的に続く長さ4.2m～5.6m、幅1.6mの土坑で、上面の平安時代後～末期の溝下から検出した。土師器杯・皿を出土した。
- S D 1429・7387 調査区西半で、S A 7400・7170の東側を南北に併走する幅2.4m前後、溝底のレベルが一定しない連続する土坑状の溝である。埋土は灰褐色土で陰刻花文綠釉陶器や黒色土器、黒色ミニチュア土器が出土した。第44次調査で検出した、S A 2675に伴う連続土坑群S K 1412・2683・2684・2686・2687に相当するものかと考えられる。調査区南辺より北へ約8.5mの所で止まるもので、S B 7380の柱掘形はこの溝の底で検出した。
- (4) 平安時代中期の構造
- S B 7372・7374 いずれも調査区北西端で検出した掘立柱建物でさらに西側へ延びるため全容は不明であるが、S B 7372は桁行2.1m(7尺)等間の南北棟、S B 7374は柱間が桁行1.6m×梁行2.0mで東西棟、棟方向はいずれもN 5°W、E 5°Nと方格地割縦軸に対しやや西及び北に振る建物である。またS B 7374はS B 1431と南側桁行筋を揃えるが、柱間が異なるので別建物と考えられる。

- S K 7432 調査区南端で検出した3.0m×3.3mの不整円形を呈する土坑である。埋土は明灰褐色で、S B 7395・7385の柱掘形はこの土壇の底で検出した。土師器の杯・皿を中心に綠釉陶器、かな墨書土器、黒色土器、ミニチュア土器、朱付着土器、転用硯、青磁等の特殊遺物を多く出土したものである。
- その他の土坑 S K 7431は1.6m×1.4mの不整円形の土坑である。S K 7432のすぐ西隣に位置し、土師器杯・台付杯を多く出土した。
- S K 7408は調査区北部でS B 7370・1430の柱掘形を切る土坑で平安時代中期以降の溝S D 7407に切られるものである。1.9m×1.6mの略方形を呈する。
- その他の溝 S D 1417は調査区中央部を東西に、またS D 1432は調査区東端を南北に走る溝で、いずれも第29次調査で検出したものである。平安時代前期の建物の柱掘形を切り、平安時代後期の掘立柱建物S B 1431の柱掘形に切られている。
- S D 7376は調査区北西隅で検出した南北溝で約1.8m、長さ12.0mである。西側へ展開すると思われるS B 7371～7374の柱掘形はこの溝の下から検出したものである。
- S D 7389は調査区南西隅にある溝で、幅2.4m、長さ4.8mで途切れるものである。第105次調査で検出したS D 7154とその南北に連続して続く土坑状の溝の延長かと思われる。溝底のレベルは北半は平坦であるが、調査区南壁際では標高約9.5mとやや深くなる。この溝からは黒色土器・綠釉陶器椀・綠釉緑彩陶器の椀などが出土した。
- (5) 平安時代後期の遺構
- S B 1431 調査区中央やや東よりで検出した4間×2間の南北棟建物である。柱間は桁行1.85m×梁行1.9m等間である。北妻の2間を第29次調査時に検出したもので、柱穴は40cm～50cmの略方形の柱掘形内に直径約20cmの柱痕跡を伴うものである。柱掘形は平安時代前Ⅰ期の連続する土坑群S K 7419、平安時代前Ⅱ期の土坑S K 7409、平安時代中期の溝S D 1417を切るものである。
- S K 7421 調査区中央やや南側で、S B 7390の南側桁の柱掘形を切る土坑であるが底のレベルが不均一であるが、土師器台付皿等を出土している2.4m×2.2mの略円形を呈する。
- S K 7429 調査区南辺中央近くにある2.4m×1.8mの略円形を呈する土坑である。遺物は土師器杯・皿・ロクロ土師器の破片などが出土した。
- (6) 時期不明の遺構
- S B 7371 調査区北西端にあり、一辺1.2mの柱掘形をもつ大型掘立柱建物となるであろうと考えられるが、棟方向がE 2° Nと当調査区内では他に例をみない方向を示すもので平安時代前期のS A 7170の柱掘形に切られるものである。すぐ東に隣接するS A 7400(N 3° W)とは直交に近い棟方向を示すものの1.0mしか距離を隔てていないため同時期に併存した可能性は考えにくい。
- S K 7379 調査区北西端に位置する平安時代前期の土坑S K 7378を切る土坑である。遺構検出面からの深さ約45cmで底に達し、この底でS K 7378を検出した。出土遺物は土師器の破片を出土するのみである。
- S K 7399 調査区北方中央にあるS B 7411の北面庇を切る土坑で4.4m×3.0mの不整形を呈する。遺構検出面からの深さは約10cmの極めて浅い土坑であるが、土師器の碎片ばかりを出土するものである。

3 遺物

今回の調査では、土坑から出土した平安時代の土師器を中心とする遺物が、遺物整理箱で約250箱分ある。その中で、特殊な遺物が比較的多く出土した S K 7425 と S K 7430、並びに特殊な遺物について概述する。

(1) 平安時代前 II 期の遺物

S K 7430

平安時代前期の S K 7430 の出土遺物は、出土量の大半を土師器皿が占めるもので、土師器杯・椀がそれに続く。土師器甕・鍋及び須恵器・灰釉陶器の出土は極数点に限られる。また極わずかではあるが残存状況の良好な綠釉陶器椀、土師器ミニチュア土器が出土した。

土 器

土師器杯（1～13）は外反する口縁をもち、口縁端部のみやや内弯気味にする杯 A である。口径は 13.6cm～16.1cm、器高は 2.5cm～3.8cm とあるが小型のタイプ（1・2）は特に少ない。また杯 A 中で口縁端部の内弯がなくなり、より外傾するものも若干みられる。手法は口縁部をヨコナデ、底部をオサエの後ナデとする e 手法である。土師器杯（14～35）は比較的小さい底部に長めの口縁部が外方へまっすぐのびる杯 B である。口径が 14.0cm 前後のものと、16.0cm のものとに分かれ、器高は 3.0cm～3.5cm である。手法は同じく e 手法である。杯 A・B とも黄橙色から淡橙色を呈し、胎土も概ね精緻である。土師器皿は、口縁部の外反する皿 A（37～43）の中に口径 16.0cm 前後のものと口径 20.0cm を測る大型のものが若干含まれる。器高は 2.5cm 以下で、調整は同じく e 手法によるものである。黄橙色～橙色を呈し、胎土も精緻である。口縁端部上方に面をもつ皿 B がこの土坑出土遺物の大半を占める。口径 15.0cm 前後、器高は 2.3cm 以下で器面の調整は e 手法である。また土師器鍋・甕の破片がわずかに出土しており、鍋（76）は推定口径 39.6cm、器高 20.7cm である。口縁部のみヨコナデ、体部外面を 1.6cmあたり 5 本単位のタテハケ、下半は横方向のケズリ、底部に同単位の不定方向のハケを施す。内面は横方向の板ナデを丁寧に施すものである。須恵器・灰釉陶器も極めて出土量が少なく（77～81）の他は、須恵器蓋・甕の破片が散見されるのみである。

特殊遺物

また後述の綠釉陶器椀（134～136）とミニチュア土器の土師器長胴甕（132）もこの土坑から出土している。

S K 7425

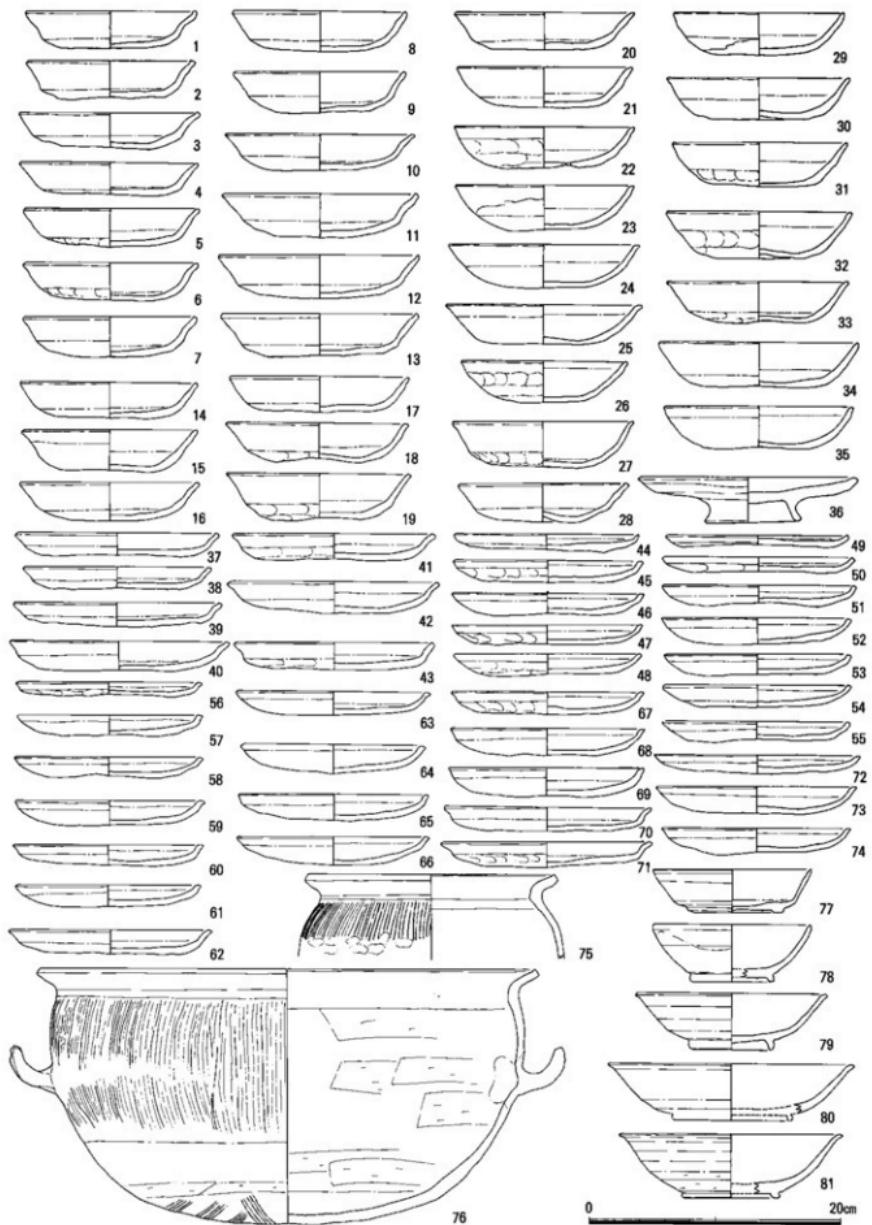
平安時代前期の S K 7425 では土師器杯の他、綠釉陶器椀・唾壺、黒色土器鉢・風字硯、漆付着土器、青磁碗が出土した。

土 器

土師器には杯 A と杯 B があり、口縁部が外反する杯 A（82～89）では、口径 12.6cm～14.9cm、器高 2.2cm～2.7cm のものがある。また比較的小さい底部に大きく外反する口縁をもつ杯 B（90～96）には、口径が 13.0cm～15.7cm 前後、器高 2.7cm～3.7cm のものがある。浅黄色～橙色を呈し、胎土は精緻であるが器形がやや歪むものがみられる。器面の手法は杯 A・杯 B いずれも e 手法である。土師器皿は破片が出土したのみで S K 7430 のように完形のものはみられない。

黒色土器

黒色土器風字硯（100）は 6.6cm × 4.8cm の小片であるが、第44次 S K 2650 出土 78^回 と酷似しており、接点はないものの同一個体かと思われる。硯面・背面ともに細かいミガキが丁寧に入っている、硯面には墨を摺った痕跡がみられる。脚は折れて欠損しているが、6 面の面取りがなされていることがわかる。推定される硯の大きさは、長さ 16.0cm、幅 12.2cm、高さ 3.6cm である。



第4図 第109次調査 遺物実測図 S K7430

綠釉陶器 緑釉陶器は椀（101・103・104）、棱椀と判別できる口縁部破片（102）、唾壺（105）があり、釉薬はいずれも淡緑黄色である。唾壺（105）は体部約3分の1、口縁部分が約2分の1ほど残存するもので、第105次調査S D7154出土の体部破片と接点はないものの特徴的な高台の形状、胎土・釉薬の色調などから同一個体と考えられる。猿投産のものとみられる。

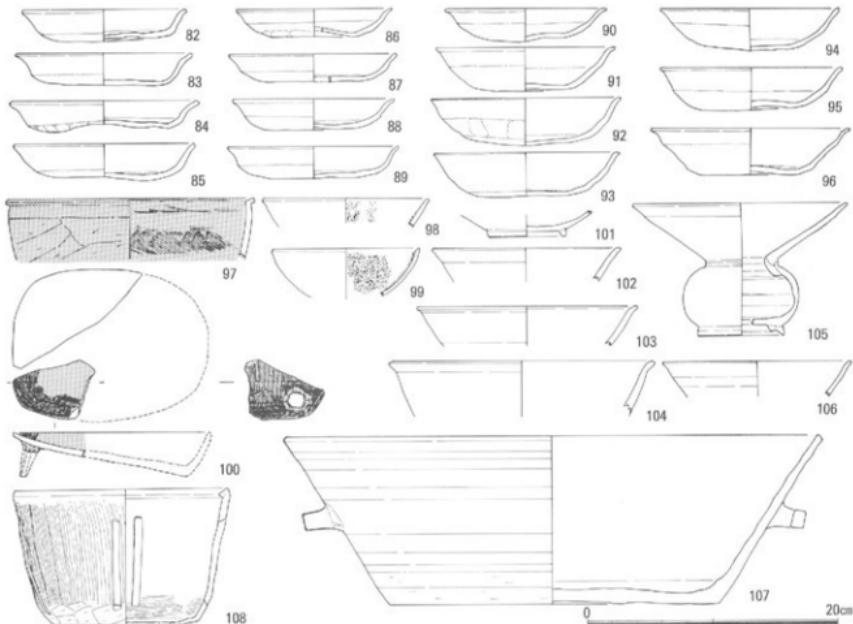
漆付着土器 漆付着土器2点（98・99）が当調査区内ではこの土塙のみから出土している。西隣の牛葉東ブロックでは32点出土の例がある他、東隣の鍛冶山西ブロックでも2点はあるが出土しており、鍛冶山西ブロックでは今回が初例である。漆・器壁とも残存状況が悪く、漆が内面に部分的に付着するのみである。

青磁 青磁が1点（106）出土している。推定口径15.1cm、残存高2.8cmで、内外面に均質な施釉がみられ、越州窯系の碗と思われる。

(2) 特殊遺物

特殊遺物あるいは特筆すべき遺物としては、かな墨書き土器、朱付着土器、転用硯、円面硯、黒色土器、ミニチュア土器、緑釉陶器、青磁、製塩土器、鉄製鋤、鉄釘等があげられる。

風炉 （108）は土師器の用途不明品であるが、口径17.1cm、器高11.1cm、底径11.5cmのやや寸胴な器形で、体部に幅7mm、長さ7cmの方形透かしが2本1組で4か所に入る。透かしは外面をみて右側の透かしがやや長く、左側が短い。底部には径8mmの穿孔が推



第5図 第109次調査 遺物実測図 S K7425:82~106, S K7424:107, 包含層:108

定7か所『脊』状に配置されているものと思われる。(108)以外にも同じ器種になると思われる破片が2片出土しており、風炉の一種であろうかと考える。

墨書き土器

(109~115)は墨書き土器で、(109・111)を除いた他はかな墨書き土器である。(109)は土師器杯外面底部に書かれたもので、「脊」かと思われる漢字の他筆揃えの痕跡がみられる。(110)は包含層からの出土ではあるが同じく土師器杯外面底部に、ひら仮名と思われる墨書きが底部円周に沿って書かれている。(111)は土師器杯内面底部に、筆で螺旋を多く描くもので、筆揃えあるいは筆慣しの痕跡かと考えられる。(112~115)はいずれも平安時代中期の土塙S K7432から出土したもので、ここに掲載してはいいないが土師器小片に書かれたひら仮名墨書き土器が5点出土しており、この土塙の特徴を示すものである。(112・113)には文字の他筆揃えの痕跡も多くみられ、文字として判読はしづらい。(114)は土師器口縁部の内・外面両方にひら仮名を書くもので、内面は「□ら□とま」の文字が底部から口縁端部に向かって書かれる。外面には「□ふ□」と読み、口縁部側面に書いたものである。

朱付着土器

(116~120)は朱付着土器で、いずれも転用硯として使用された摺痕を残すものである。(116)は推定口径14.8cm、残存高1.8cmの須恵器蓋でS K7434から出土した。内面に朱の付着が認められる。(117)はS K7396出土の灰釉陶器椀の内面底部に朱が付着する。(118)は灰釉陶器椀の高台部分であるが、内面見込み部分に朱の付着した痕跡が認められ、高台内面を転用硯として使用した墨痕(黒色)、高台外側に筆揃えの痕跡がみられる。内外面使用の先行関係は破片が小片であるため不明である。(118・119)はS K7409から出土したもので山茶椀内面見込み部分に朱の付着痕跡がみられる。この他実測図にはないが、土師器杯内面に朱の付着痕跡があるものが1点ある。これは転用硯ではなく、摺った後の朱墨を入れ筆記等に使用したものかと考えられる。

黒色土器

(121~129)までは黒色土器である。(121)は黒色土器杯でS D7387から出土した。推定口径14.0cm、器高2.6cm、内外面全面に幅1.5mmのミガキが丁寧に施され、内外面とも黒化処理したB類である。(122・123)は平安時代中期のS D7389から出土したもので、(122)は黒色土器椀口縁である。推定口径17.8cm、残存高3.6cm、内面を黒化処理したA類で、口縁外面上半に幅1mmのミガキを施すが内面は残存状況が悪く不明瞭である。口縁外面上半は淡橙色を呈する。(123)は黒色土器A類椀の底部と思われるが、推定底径が12.6cmと大きいため鉢かとも考えられる。口縁立ち上がりの部分に幅1.5mmの横方向のミガキ、底部には螺旋の暗文を施す。外面は淡橙色を呈する。(124)は黒色土器A類椀の口縁である。推定口径14.8cm、残存高4.2cmで器壁は薄手のものである。内面から口縁外面上半にかけて黒色で内面には幅1mmの細かいミガキを施す。外面にも口縁端部にミガキがみられるが大変粗い。外面はにぶい黄橙色で口縁外面上半にはケズリを施す。(126)はS B1431出土の黒色土器A類椀の高台である。残存状況が悪く、ミガキも不明瞭で外面は橙色を呈す。(127)は平安時代前Ⅱ期の土坑S K7422から出土した黒色土器A類壺である。口径10.2cm、残存高5.3cm、口縁外面上半までが黒色で幅1mmのミガキを施す。口縁外面上半は浅黄橙色を呈する。(128)は黒色土器B類壺である。推定口径13.6cm、残存高3.8cm、外面には煤が付着する。(129)は(121)と同じく平安時代前Ⅱ期のS D7387から出土した黒色・ミニチュア土器A類壺である。口径8.8cm、残存高3.6cm、推定器高は約5.0cmである。

ミニチュア土器 (131~133) は土師器ミニチュアである。(131) は平安時代中期の S K7432から出土した土師器ミニチュア甕である。残存高わずか3.7cmを残すのみであるが、推定器高は7.4cmほどである。(132) は平安時代前期の S K7430から出土した土師器ミニチュア長胴甕である。底部を欠損し、推定口径6.2cm、推定器高約6.0cmである。(133) は平安時代初期の S K1423から出土した土師器ミニチュア鍋である。推定口径9.0cm、残存高4.1cm、推定器高5.2cmである。体部外面には1.0cmあたり4本のハケメを施す。

緑釉陶器 (134~136) までは平安時代前期の S K7430から出土した緑釉陶器である。(134) は口径18.4cm、器高5.9cmで全面に丁寧なミガキを施した上に暗黄緑色の釉薬をかける。

輪花椀 (135) は口径19.8cm、器高5.4cm、(134) と同じく全面にミガキをした上に暗黄緑色の施釉を施す。(136) は体部内外面に輪花の表現がある。口径20.8cm、推定器高5.4cmで、^(注1) 第44次調査 S K1424から出土の95と酷似しており同一個体の可能性がある。(138) は

香炉 香炉と思われる。脚部は痕跡を残すのみで欠損する。推定口径は10.4cm、残存高3.6cmである。全面に明緑色の施釉がされており、二次的な加熱のためか体部外面の一部に釉薬の変色した箇所が認められる。(139) はやや浅い椀で全面にミガキを施した後施釉する。内面見込みに幅3.5mmの沈線が一本巡り、沈線内に三叉トチン痕が、外面底部にも三叉トチン痕がみられる。(140) は段皿で、推定口径13.0cm、器高2.7cmである。

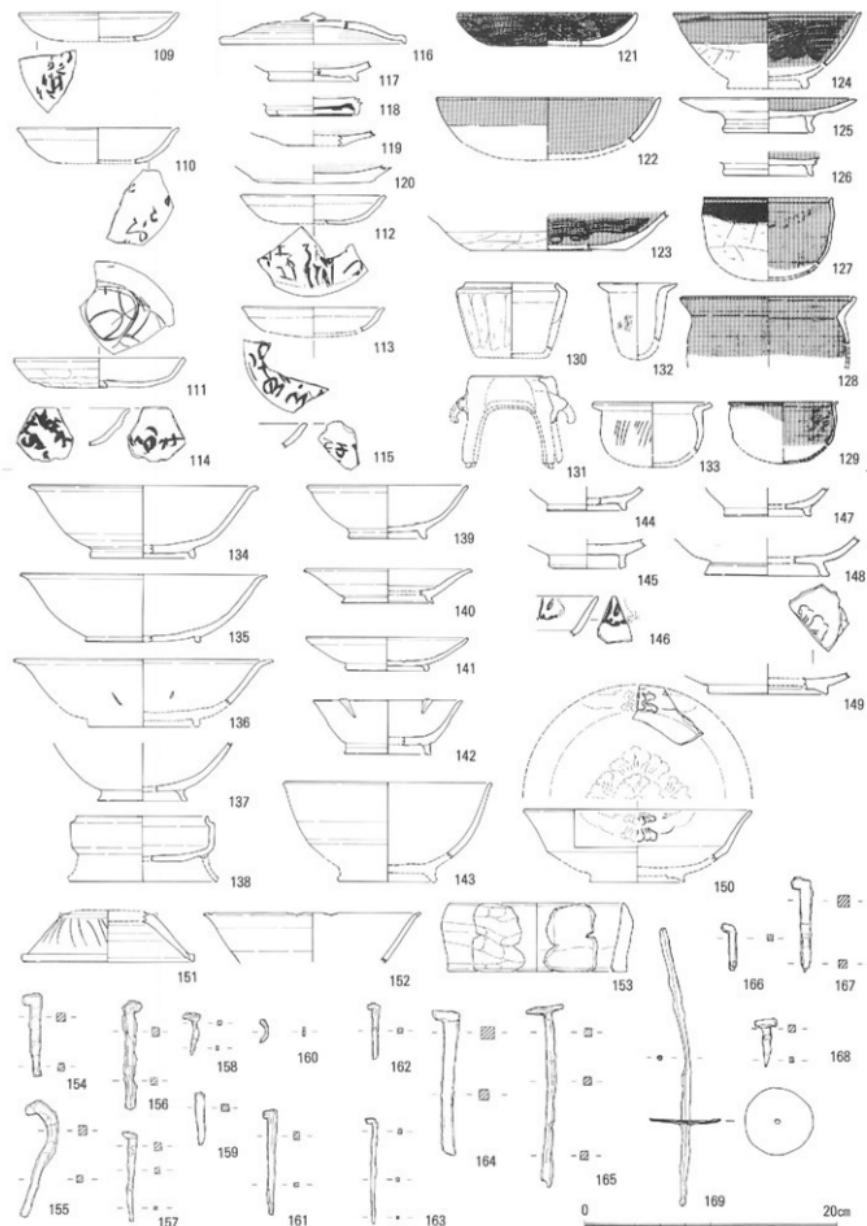
包含層から出土し、全面に濃い黄緑色の釉薬がかかる。(141~143) は平安時代中期の S K77432からの出土である。(141) は皿で推定口径13.0cmで器高は2.7cm、全面に施釉がなされており、内面見込みに(139) と同じ沈線(幅3.0mm)が一本巡る。(142)

輪花椀 は輪花椀で、口縁端部に輪花の表現がみられる。口径12.0cm、器高4.3cmで深緑色の施釉がなされており、東濃産かと思われる。(143) は深めの椀で、推定口径16.8cm、残存高6.1cmで推定器高8.0cmほどになると思われる。釉薬は深緑色で、(142) と同じく東濃産とみられる。(146) は2.7cm×3.7cmの口縁部の破片であるが、緑釉緑彩の稜椀である。黄緑色の釉薬による下地の上に明緑色の釉薬による花文(149) は椀の底部であり、(150) と同一個体の可能性も考えられるが、接点がないため不明である。

(150) は推定口径18.2cm、推定器高5.8cmで第44次調査 S K2650出土の43に法量・花文の陰刻が似ており、猿投産のものかと思われる。

その他特殊遺物 (151) は須恵器円面鏡である。推定鏡面径7.2cm、器高4.0cm、推定脚部径13.6cmの小型のものである。脚部はロクロナデをしており、鏡面には墨痕が残る。S K7433の出土である。(152) は先の S K7432から出土した青磁輪花碗口縁である。推定口径17.4cm、残存高4.0cmである。口縁全面に薄く施釉するもので、越州窯系のものと思われる。(153) は製塙土器である。推定口径13.8cm、器高5.5cm、底部は全く欠損しており、橙色を呈する。先の円面鏡と同じ S K7433の出土である。このほか実測図にはないが土錐が6点、土師器三足盤の脚部が3点出土する。三足盤脚部はいずれも盤の部分を欠いており、うち2点は S B7410の柱掘形から出土し、同一個体の脚部である可能性がある。

鉄釘 (154) 以降は鉄製品で、(154~159・161~168) は鉄釘である。鉄釘は釘頭が逆「L」字形に曲がり先細りする平折れ釘と平頭角釘(165・頭径3.0cm、長さ14.5cm以上)が1点だけある。平折れ釘は長さ9.0cm~10.0cm、断面0.5cm程度の略方形の細タイプ(154~157、161~163、166) と長さ12.0cm以上、断面1.1cm×1.2cm角の太タイプ(164~167)



第6図 第109次調査 遺物実測図 墨書き土器:109~115,朱付着土器:116~120,黒色土器:121~129

ミニチュア土器:131~133,緑釉陶器:134~150,その他の特殊遺物:151~153,鉄製品:154~169

のものとに分かれる。また円形平頭をもつ角鉄が2点あり、平頭鉄(158・168)は頭径1.5cm~1.8cm、長さ3.5cm~4.5cmのものである。平折れ釘細タイプでは約4.0cm厚、太タイプで約6.0cm厚の下地材が想定され、建築用釘であることが考えられる。また鉄はその長さからみて下地材厚が1.4cm~1.8cmと想定され、調度品用の留め金具などに使用されたのではなかろうか。

鉄製紡錘車

(169)は鉄製の鉢(紡錘車)で平安時代前期のS B 7410の柱掘形から出土している。輪径5.4cm、茎長22.6cm、茎にやや歪みを生じているものの、完形である。輪は厚さが2.0mm~2.5mmで鋸歯が目立つ。茎は輪への取り付け部で断面を見ると厚さ0.8mm、中空で径3.0mmである。斎宮跡ではこれまで鉄製紡錘車は第19次調査、第71次調査S K 4746(飛鳥時代)、第75次調査S K 5072(奈良時代前期)の3例が出土している。中でも第71次調査のものは輪のみで茎は木製のものを用いたのか、孔をあけた輪だけのものである。ほか2点はそれぞれ方格地割の東加座北ブロック(第75次調査)と御館ブロック(第19次調査)から出土したことになる。

鉢は伊勢・皇大神宮神宝中でも古くからの伝承をもつ紡織関係の御料の中に含まれ、「皇大神宮儀式帳」や「延喜大神宮式」にも記載されるものである。現在皇大神宮に神宝として伝世している鉢の法量(金胸御鉢茎長29.7cm、輪径5.5cm、銀胸御鉢茎長30.3cm、輪径6.1cm)と比べてみても今回出土の鉢と近い数値を示すものである。

4 まとめ

今回の調査で、方格地割の鍛冶山西ブロック内における内郭区画施設(柵列)、また区画内の大型掘立柱建物を検出し、これらによってこの区画の様相がかなり明らかになったことは大きな成果である。この成果をこれまでの周辺調査の成果と併せ、試案ではあるが、方格地割に棟方向を描えて建つ建物を中心に、建物の該当時期における配置の対応関係を柵列I-①・②期、柵列II-①~④期として検討をしていきたい。

(1) 柵列I-①期

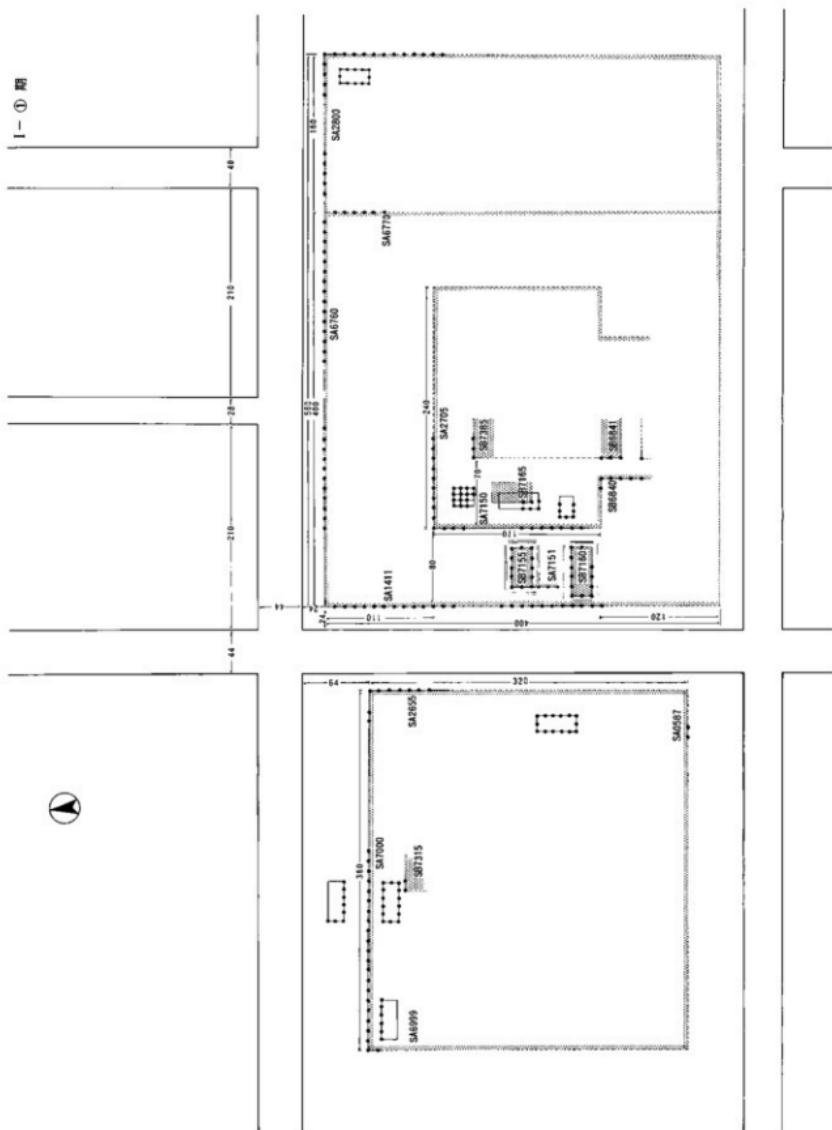
外郭柵列

奈良時代後期~平安時代初期に展開される構成のうち、先行してとられる配置であると推定するものである。まず鍛冶山西ブロックと称する方形区画であるが、この時期には当区画における方格地割の東辺区画道路が形成される以前に、外郭柵列(東西総長117.6m=400尺、北辺S A 6760・東辺S A 6770・西辺S A 1411・南辺未検出)の東側にさらに約47.5m(160尺)の外郭張出(北辺・東辺S A 2800)を取りつくし、変則的な平面構造の区画施設が想定される。外郭柵列の東西総長は約165mとなり区画東西幅を超える。当該時期の区画道路東辺は外郭張出区画より約45m以東に想定しなくてはならない。この東西560尺×南北推定400尺の規模をもつ区画のうち、外郭区画柵列の北辺・西辺は区画道路側溝から約24尺(約7.0m)ずつ均等に距離を隔てて建てられる。また外郭柵列東辺S A 6770も後出の区画道路東辺から同距離をおいている。北側あるいは南側の方形区画では区画道路東辺がこの時期に成立しており、その延長線を意識して設けられた柵列と考えることができる。

外郭柵列張出

柵列の規模

区画を構成する柵列はこの時期のみに限らず、また後述の他の2つの方形区画内の柵列も同じく柱間は10尺等間で構成される。ただし大規模な柵列となるので、辺によつて若干構成尺が異なっており、29.4cm~30.0cm/1尺と、ややばらつきがみられるものである。



第7図 橋列I-①期の配置 (1:1,500)

内郭柵列

一方、この時期の外郭柵列に柱筋を併せ内郭を構成した柵列として、北辺S A2705・西辺S A7150があげられる。内郭の規模は南北推定170尺（約50.5m）×東西推定240尺（約71.0m）を想定している。内郭東西辺は外郭柵列センター・ラインで折り返して想定した数値で、東西に長い内郭が想定できるが、さらに南北を170尺と想定した場合にS A7150を17間目で東進すると考えると、第96-4次調査で検出した掘立柱建物S B6840につながり、西辺が鍵の手状に曲がる可能性も考えられる。ただし第96-4次調査以南の調査成果がないため明確することができない。内郭北辺S A2705は外郭北辺S A6760から110尺、内郭西辺S A7150は外郭西辺S A1411から80尺を隔て、いずれも柱筋を外郭柵列柱穴に揃えている。

大型掘立柱建物

区画内の配置

この区画施設の中で当該時期に配置されていたと思われる大型掘立柱建物は、S B7155・7160・7165・7385・6841が考えられる。これらはいずれも外郭・内郭柵列を構成した10尺を基本単位とする方眼のラインに柱筋を揃えて建てている大型掘立柱建物で、掘立柱建物の柱間も10尺等間で建てられるものである。

外郭柵列内にあって内郭柵列外に位置する建物としてS B7155・7160がある。S B7155とS B7160は昨年の第105次調査で検出したもので、S B7155は桁行4間×梁行2間の東西棟大型掘立柱建物である。西妻柱筋の延長にS A7151が取りつく。外郭南北柵列を東西と同じ400尺と想定した場合、センターラインがこのS B7155の妻柱筋にあたる。さらにS B7155南側桁から40尺を隔ててS B7160が桁行5間×梁行2間の規模で東妻柱筋を通して建つ。この2棟の四周には隅を接しない幅約70cm、深さ40cm前後の溝が巡る。軒出を想定した場合にやや遠いことと、四隅がつながらない点で兩落溝として機能し難いということから、建物の性格に特殊性を与える区画施設としての溝と考えることができる。

内郭柵列内建物としてはS B7165・7385・6841の3棟があり、S B7385を建物とすればS B7165と直交して逆「L」字状に並ぶ配置をとる建物となる。またS B7385西妻柱筋の延長はS B6841の西妻柱筋にあたるもので、柵列として内郭内側にさらに区画施設を構成する可能性をもつものである。この場合の南北柵列規模は、150尺・約44.4mが想定される。

牛葉東ブロックの

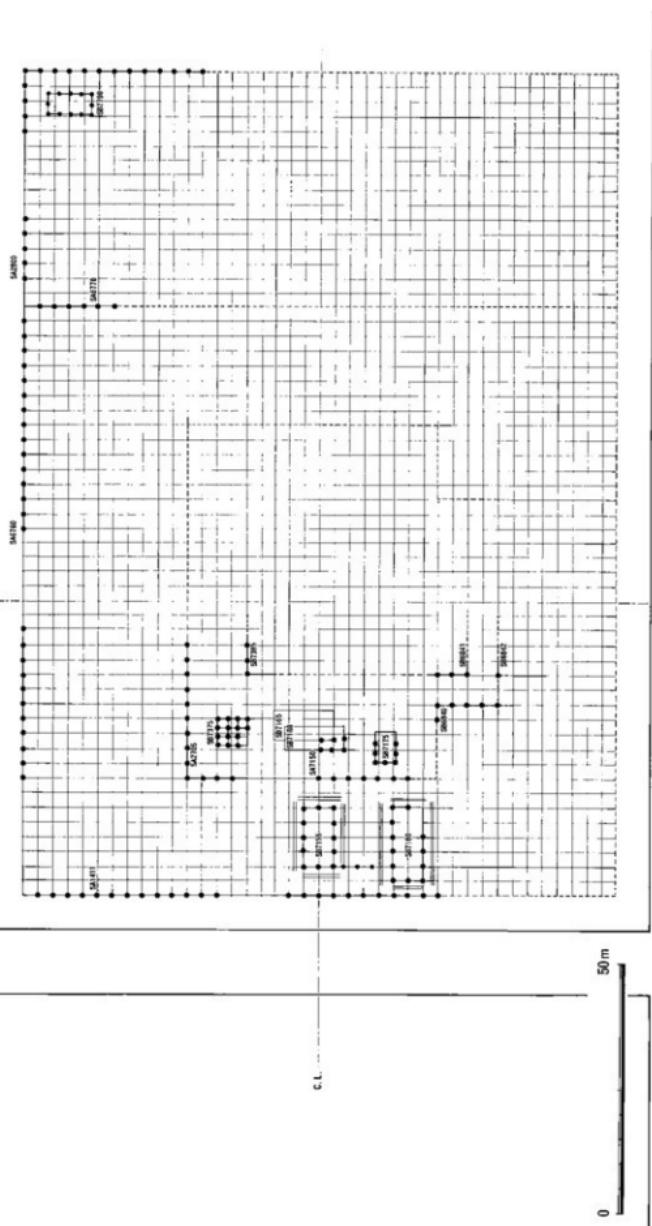
柵列区画

一方、西隣の牛葉東ブロックでも、区画全体を囲む柵列が建てられていたものと考えられ、その規模は東西360尺（約107m）×南北320尺（約95m）と、鍛冶山西ブロックよりやや規模が小さいが、区画全体を意識した囲みであると考えられる。区画北辺柵列は第103次・第108次調査検出のS A7000、東辺は44次調査のS A2655、南辺は第10次調査のS A0587（S Bとして検出されたもの）、西辺は第103次調査のS A6999で四辺が構成される。区画内の建物としては東西辺中央に位置する、S B7315が1棟だけあげられる。わずか1間分を検出したにとどまり、鍛冶山西ブロックのS B7385・6841のように柵列を構成する可能性も残すものである。

(2) 柵列I-②期

外郭柵列

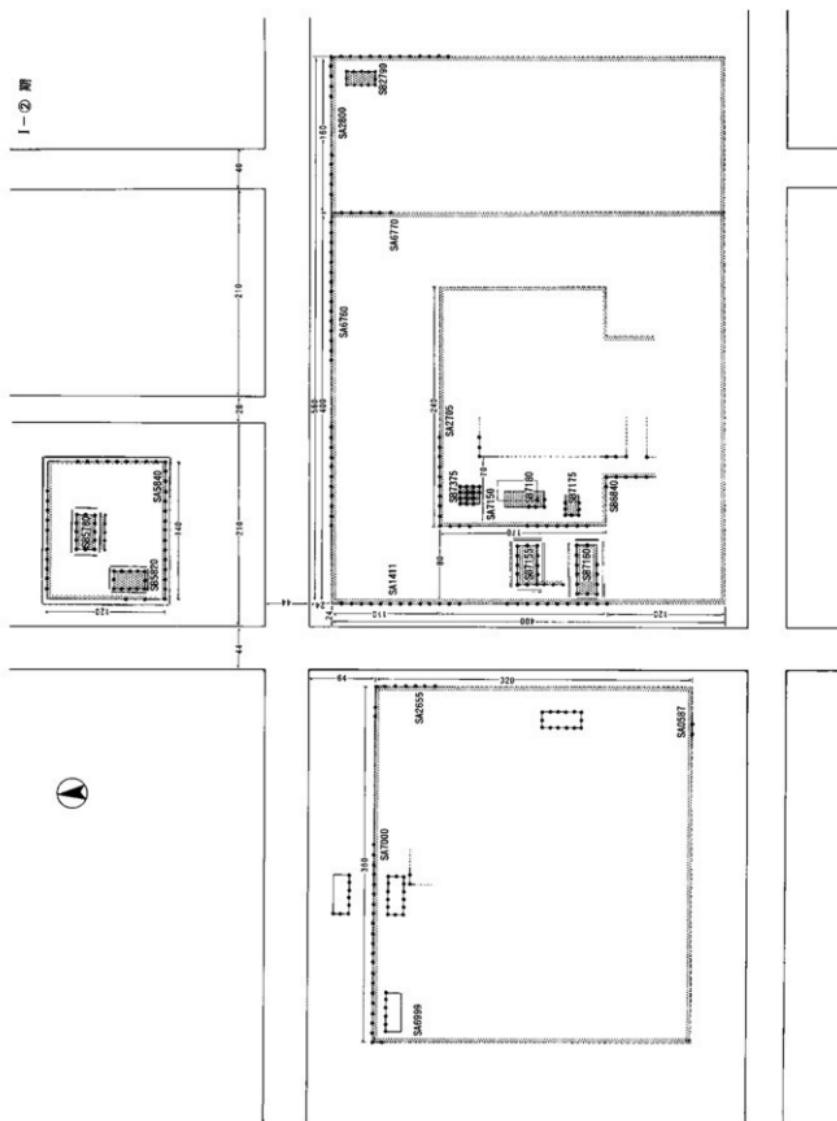
奈良時代後期～平安時代初期に展開する構成のうち後出となる配置をとるものである。この時期においては外郭柵列・外郭張出・内郭柵列いずれも①期の柵列と同じ構成で成り立っているものと考える。すなわち外郭柵列北辺S A6760・東辺S A6770・南辺未検出・西辺S A1411と、外郭張出柵列北辺・東辺S A2800で構成する東西総長



第8図 桁列Ⅰ期の10尺方競による建物配置 (1:1,000)

	560尺（約165m）×南北推定400尺（約117.6m）の区画である。
内郭柵列	また内郭柵列でも同じく、北辺S A2705、西辺S A7150・6840で区画される、東西240尺（約70m）×南北170尺（約51m）の区画となる。
大型掘立柱建物 区画内の配置	この中に配置されたと考えられる建物は、外郭柵列より内側、内郭柵列との間に建つものとして、①期のS B7155・7160は、その他の建物の配置に何らかの規制を与えていること、また四周に区画の溝を伴って建つという特殊性から、柵列同様②期まで存続したものと考えられる。また外郭張出にはS A2800の北辺・東辺から約15尺ずつ隔てた内側にS B2790が建ち、柱間は7尺（2.1m）等間を測る、南北棟建物である。
	内郭内側にはS B7375・7180・7175が建つものと考えられる。S B7375は今回の調査で検出した建物で、桁行3間以上×梁行3間の総柱建物である。内郭S A2705・7150からぞれぞれ20尺ずつ隔てて建てられる。また①期のS B7385北側桁行筋にS B7375の南妻柱筋を揃えているので桁行も3間と考えられる。S B7180は第105次調査で検出した8尺等間（2.4m）の掘立柱建物で、5間×2間の南北棟建物が想定される。2棟は内郭西辺柵列S A7150を挟み、S A7150から等距離をおいて直交する形で建てられる。その南側に同じく第105次調査で検出したS B7175がS B7160の北側桁行筋に柱通りを揃えて、S A7150から東へ約3.0m隔てた所に建つ。これらは①期の10尺等間で構成された建物とは異なり、6尺～8尺までのやや規模を縮小した柱間で構成されるが、その柱間に比べて柱痕跡の直径はかなりの大きさを測るものであるという特徴がみられる。そしてこの内郭内側に位置する3棟は、内郭が第96-4次調査S B6840につながり鍵の手状の囲みを構成したと考える時に、想定の規模を含んで考えてもS B6840以西の張出におさまる建物であることが考えられる。
西加座南ブロックの柵列区画	当該区画北隣の西加座南ブロックには東西140尺×南北120尺の柵列による囲みが第83次・第84次で検出されている。この柵列も10尺等間で構成されており、四周に隅のつながらない溝が巡っていることがわかっている。鍛冶山西・牛葉東のブロックでみられるような大規模な柵列による区画ではないものの、区画内部には四周に隅の途切れる溝を伴うS B5780が、S B5820と逆「L」字形を呈し配置される。これらの建物は鍛冶山西ブロックのS B7155・7160に共通する特殊性をもつが、柱間を10尺で構成していない点から、柱間が縮小するこの時期に該当する構成と考えたものである。ただし、この囲みでは柵列の外周をも溝で囲っており、囲みそのものが特殊な存在であったものと考えられる。 ^(注2)
牛葉東ブロックの柵列区画	さらに西隣の牛葉東ブロックでも①期と同規模の柵列による囲みが存続していると考えられるが、第103次・第108次調査区内ではこの時期に該当すると思われる建物を検出していないので、区画内建物の配置は不明である。
	(3) 柵列II—①期
外郭柵列	平安時代前Ⅰ期～Ⅱ期初頭に相当する時期にとられた区画構成を考えるものである。この時期になって外郭柵列の外観に変動がみられる。まず外郭柵列東側の張出が、この時期には切り離され、鍛冶山西ブロックの北二ブロックの東辺区画溝が南へ延長され鍛冶山西ブロックも同じく東西約130mで構成される区画となる。そして、先行時期の外郭柵列東辺以西に延びない独立した外郭柵列となる。また外郭北辺柵列が、先行時期では区画溝から24尺（約7.0m）南に位置していたものが、先行時期の外郭

I - ② 期



第9図 橋列I-②期の配置 (1:1,500)

北辺柵列 S A 6760の柱筋から約2.0m南へ平行移動した形で S A 6780が建て替えられている。北辺区画溝からの距離、27尺（約9.0m）を測ることになる。北辺柵列の2.0m南への建て替えによって、東辺・西辺の外郭柵列もそれぞれ先行時期の外郭東辺柵列 S A 6770から S A 6790へ、外郭西辺柵列 S A 1411から S A 2675へと建て替えられる。外郭柵列は、北辺 S A 6780、東辺 S A 6790、南辺未検出、西辺 S A 2675で構成される、10尺等間（2.96m平均）の柵列である。外郭の規模は、東西は400尺（約117.6m）と、先行時期の外郭柵列と同規模であるが、南北については、北辺柵列が2.0m南下しているため、仮に東西と同規模（400尺）とすると、想定南辺区画溝との距離は16尺（約4.75m）しかとれず、区画内での位置がやや南寄りになり、先行時期の24尺等間でとられた空閑地が北辺と南辺で不均等となる。

内郭柵列

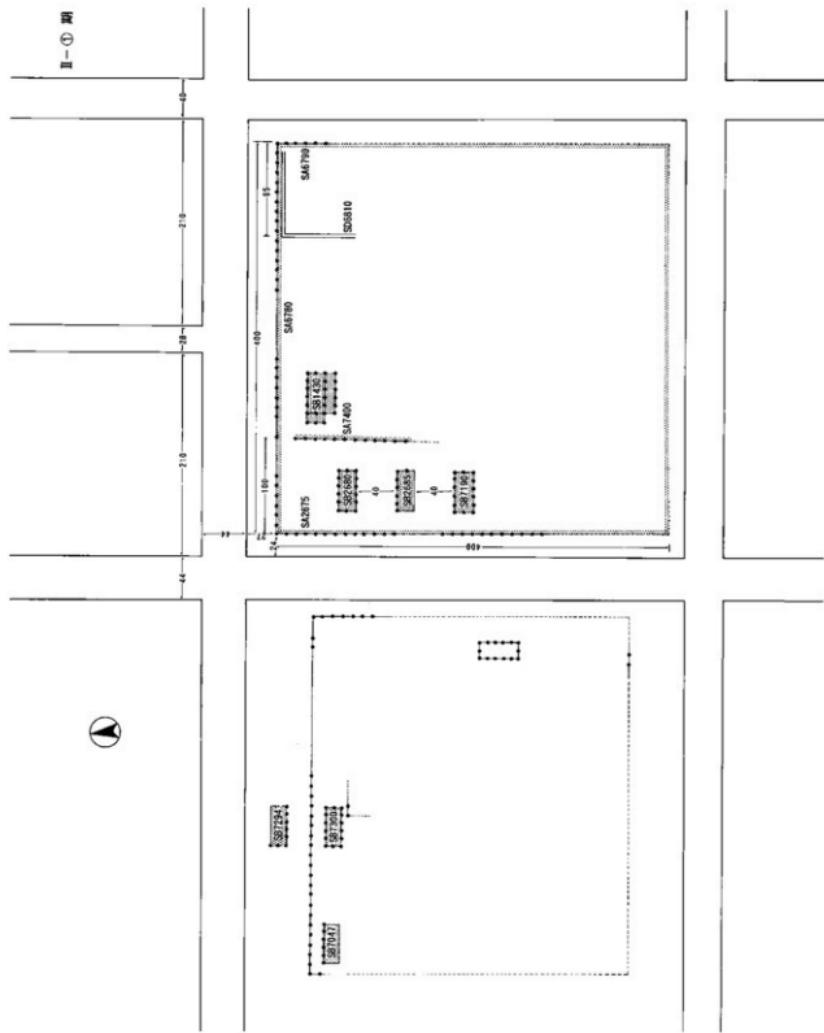
外郭柵列の変更に伴い、内郭柵列の区画構造も大きく変容する。まず、先行時期の内郭柵列による囲みの構造から、外郭南北柵列にほぼ平行する形の内郭南北柵列に姿を変える。しかし外郭北辺柵列 S A 6780へはとりつかず、約2間手前で止まり、南へも第105次調査区内では確認されておらず、また第44次調査区内にも西進する様子を見せていないことから第109次調査から第105次調査区までのわずか14mの間で止まるものかと考えられる。先行時期の外郭柵列張出のように空間を完全に区切るためのものではなく、一定空間を間仕切りするための役割をもったものではないかと考えられる。この内郭柵列 S A 7400は当調査区で初めて検出したもので、昨年の調査で確認していた内郭南北柵列に先行する内郭柵列が存在することが今回明らかとなった。外郭西辺柵列 S A 2675から東へ100尺隔てた所に S A 7400は位置するものである。また、柵列ではないが、外郭東辺柵列 S A 6790から約95尺の位置に逆「L」字状に曲がる溝 S D 6810があり、内郭南北柵列 S A 7400にはほぼ対応する位置に設けられるものである。空間を画する役割をもつと考えられるが、囲まれた内部にこの時期に相当する建物を検出していない。

大型掘立建物区画内の配置

この時期に配置された大型掘立柱建物として第44次調査 S B 2680・2685、第105次調査 S B 7190、第109次調査 S B 1430とその建て替えである S B 7370があげられる。S B 2680・2685・7190はいずれも内郭南北柵列 S A 7400の西に位置する5間×2間の東西棟建物で、3棟とも桁行8尺×梁行9尺で建てられる。外郭北辺柵列から60尺を隔てて S B 2680が、その南に40尺ずつの間隔をあけて S B 2685・7190の3棟が等間隔に並び、西外郭（約100尺）の中軸線上に3棟は位置する。内郭に建つ大型掘立柱建物は今回の第109次調査で1棟のみ確認をした。S B 1430は東西棟建物で桁行8尺×梁行9尺で構成される身舎に西面庇・南面庇を伴う。内郭北辺部に位置する中心的建物と考えられ、S A 7400に北側桁行筋を揃えて建つものである。

牛糞東ブロックの柵列区画

先行時期の柵列による区画は当該時期に姿を消した可能性が考えられる。しかし、その柱位置は踏襲されるる時期にこれらの建物が建て替えられたことが、第103次調査 S B 7047、第108次調査 S B 7294・7300の配置から窺われる。いずれも5間×2間の東西棟と想定され、S B 7047と S B 7300は80尺を隔て、東西に北側桁行筋を揃えて並び、S B 7300と S B 7294は先行時期の S A 7000を挟む形で40尺を隔て、南北に西妻柱筋で揃えて並ぶものである。



第10図 横列II-①期の配置 (1 : 1,500)

(4) 柵列II-②期

平安時代前II期の間に以下II-②～④期の三期の変遷が今のところ考えられ、そのうちの第一期となる区画構成と考えられるものである。

外郭柵列 この時期の外郭柵列はII-①期と四辺とも同じ構成で踏襲されるものと考えられる。北辺S A6780・東辺S A6790・南辺未検出・西辺S A2675で構成される。以後、II-③～④期までこの構成は変えずに踏襲されるとみられる。

内郭柵列 このII-②期になって内郭の先行南北柵列S A7400は同位置でS A7170に建て替えられる。柵列の延長方向も外郭北辺柵列の柱穴をやや外すが、外郭西辺柵列に平行するようにN3°WからN4°Wへと改変されている。しかし先行のS A7400と同じく外郭北辺柵列から2間手前で止まり、間仕切りとしての役割は踏襲されているとみることができる。さらに、このS A7170は第105次調査で確認したものと合わせた総長が23間(67.6m)に及び、先行柵列S A7400より規模は拡大されたものと思われる。また柵列の方向がやや西へ改変されたことで外郭西辺柵列からの距離が95尺となり、先述のS D6810と外郭東辺柵列との距離に等しくなる。この両脇95尺ずつの外郭を除いた210尺という空間は、北隣の西加座南・北ブロックの区画溝から中間道路側溝までの2分の1区画分の空間210尺に等しくなることも注目される点である。

大型掘立建物画内の配置 当該時期に区画内に配置される大型掘立柱建物には、第44次調査S B2690、第105次調査S B7191・7196、第109次調査S B7380・7390の5棟があげられる。

まず、西外郭のS B2690であるが8尺等間で5間×2間と想定される南北棟の身舎に10尺の庇出をもつ東面庇がつく。この東面庇の柱筋を外郭北辺柵列の柱穴に、北妻柱筋を外郭西辺柵列の柱穴にはね合わせて建つものである。またS B7191は5間×2間の東西棟建物で、先行するS B7155・7190の建て替えと考えられる。柱間は先行するS B7190と同じく桁行8尺×梁行9尺で構成される。S B2690と同じく西外郭にあって、S B2690の西側桁行筋とS B7191の西妻柱筋を揃えて建つ。

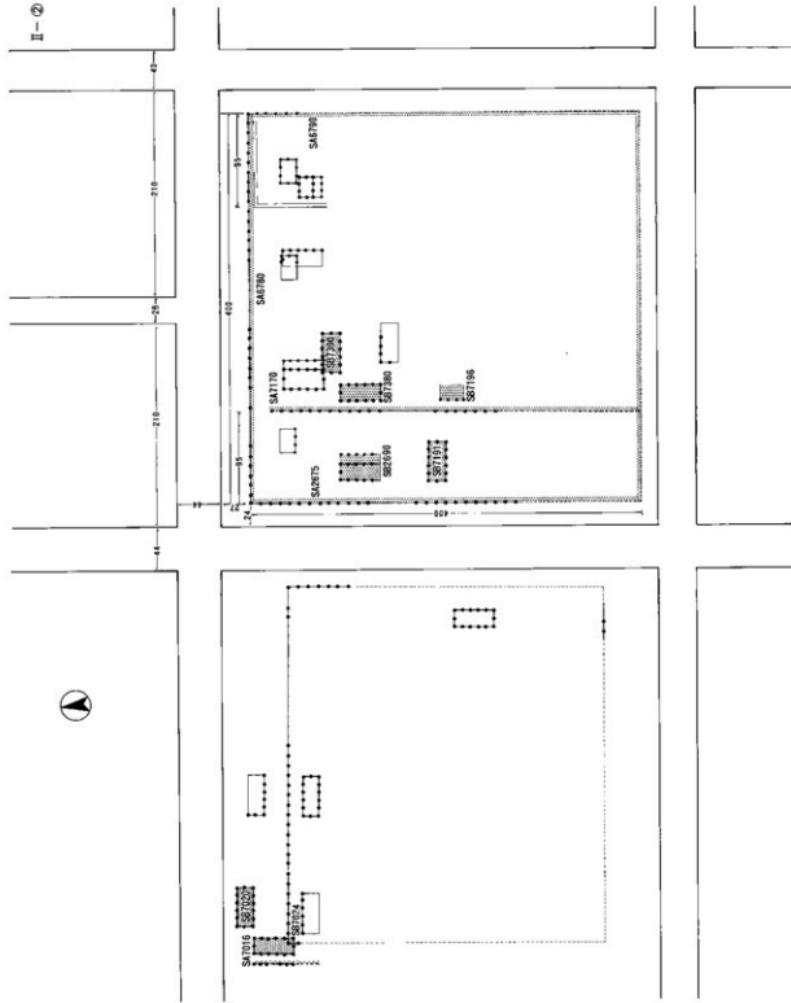
これに対応するS D6810で区画されると考えられる東外郭には、これまでの調査では配置されたと考えられる建物を検出していなかったため不明である。

一方内郭の建物配置であるが、今回の調査で確認したS B7380・7390がこの時期に配置されたと考えられる。この2棟は逆「L」字状に南側桁行筋と北妻柱筋とを内郭南北柵列S A7170の柱穴に揃えて建つものである。この2棟が柱筋を通すラインは、外郭北辺柵列から約90尺を測り、先述のS B2690もこのラインに揃えて建てられたものと考えられ、内郭南北柵列を挟んで規格的な配置であることが窺われる。

また規模のやや小さい建物であるが、S B7196もS B7380の西側桁行筋に揃えて建てられたものであろう。3間×2間の南北棟建物が想定され、柱間は8尺等間と考えられる。

牛葉東ブロックの建物配置 上記の内郭南北柵列S A7170とS B7380・7390の配置に似た構成が、このブロックのS A7016とS B7024・7020との配置にみられる。ただこのブロック内においてはかなり区画北西隅に近い位置での配置であり、一概に共通性を求めるべきではないと思われるが注目される構成であるといえよう。この時期以降は方形区画の規制にとわれた建物がいくつか出現するがまとまって配置をとる様子は窺えなくなる。さらに平安時代後期には浅い幅広の溝がコの字状に巡る小区画が構成され、この区画に規制され

二〇期



第11図 横列II-②期の配置 (1:1,500)

た建物配置をとるようになることがわかっている。

(5) 檻列Ⅱ-③期

平安時代前Ⅱ期の間の第二期にとる区画構成と考えられるものである。

外郭柵列

この時期も先行時期に同じく外郭北辺 S A 6780・東辺 S A 6790・南辺（未検出）・西辺 S A 2675の構成で外郭が踏襲されるものと考えられる。

内郭柵列

内郭柵列も外郭と同じく、先行時期の柵列をそのまま踏襲すると考えられるもので S A 7170と S D 6810で内郭を画していくと想定するものである。したがって、柵列の規模・配置に変更はみられない。まず内郭の内に配置された建物として、第109次調査 S B 7410・7395、第98次調査 S B 6720・6730の4棟があげられる。S B 7410は5間×2間の南北棟に東面庇をつけたもので、北妻柱筋を S A 7170に、西側桁行筋を外郭北辺柵列の柱穴に揃えて建つもので、外郭北辺柵列から約30尺を隔てて建つものである。この東面庇の柱筋に揃えて想定規模5間×2間のS B 7395は建てられたものとみられる。S B 7410とは約60尺を隔てて南に建つ。また区画のセンターを挟んでほぼ対称の位置に北妻柱筋を揃えて S B 7410と S B 6720は約29.0m の間隔をあけて建つ。

大型掘立建物区画内の配置

S B 6720は5間×2間の南北棟で8尺等間で建てられると想定されるものである。このS B 6720の南妻柱筋を揃えて、東外郭に S B 6730が建つ。S B 6730は3間×2間で7尺等間、9尺の庇出を測る南面庇を伴う建物である。

(6) 檻列Ⅱ-④期

平安時代前Ⅱ期の中で最終期にとられる区画構成と考えられるものである。

外郭柵列

この時期も先行時期に同じく外郭・内郭とも同じ柵列で構成されるものと考えられる。外郭柵列は北辺 S A 6780・東辺 S A 6790・南辺未検出・西辺 S A 2675、内郭柵列は S A 7170と S D 6810で構成される。

掘立柱建物区画内の配置

西外郭北辺・東外郭北辺に第44次調査 S B 1421と第98次調査 S B 6735が相対する位置に配置されるものと考えられる。S B 1421と S B 6735は3間×2間の東西棟建物で、8尺等間で建てられる。この2棟は内郭柵列・内郭区画溝から約18尺（約5.5m）ずつ隔てて、ほぼ対称の位置に建つものである。また内郭には、同規模の3間×2間の東西棟建物 S B 6725が S B 1421と S B 6735に柱筋を揃えて建つが、内郭中軸からやや東に位置に建つことから内郭には2棟は並列しない。

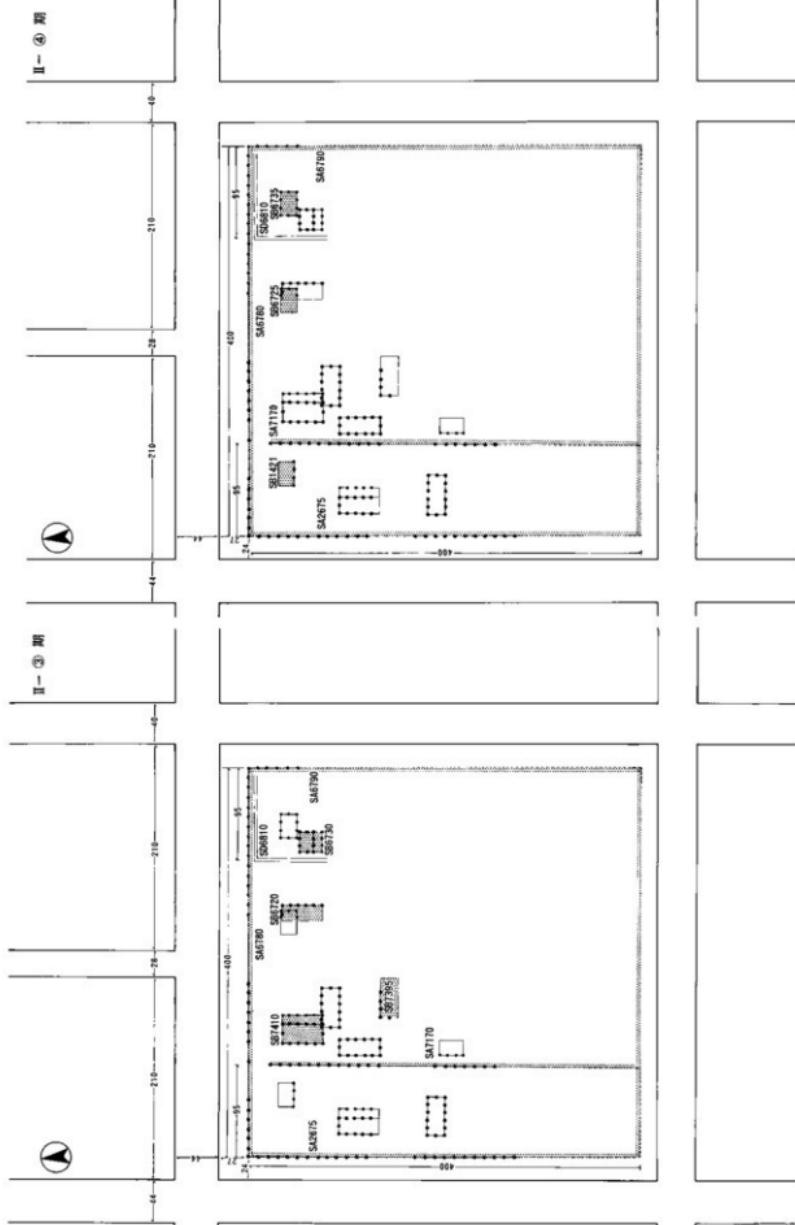
今後の調査

この構成以降、方形区画に規制される建物は散見されるが、牛葉東ブロックのように柵列区画に代わる区画施設は現れてこない。この平安時代中期以降の区画内の様子は比較的調査の進むこの鍛冶山西ブロックでも明確に見ておらず、この実態解明のために、また平安時代前半期のさらなる調査成果を区画南半に期待するものである。

（赤岩 操）

注1)『三重県斎宮跡調査事務所年報 1982 史跡斎宮跡発掘調査概報』(昭和58年3月)掲載の遺物報告書番号である。

注2)この西加座南ブロックでは S A 5840の囲み以降も建物の変遷がたどれるが、方格地割の方位と棟方向を違える建物も含まれるため、今回は特殊な存在である S A 5840の囲みのみ該当時期を柵列Ⅰ-②期として試案を示した。この他の区画の枠を越えた建物配置の対応には今後の検討を要するものである。



第12図 橋列II-③期および橋列II-④期の配置 (1 : 1,500)

III 第111次調査

6 ADM (内山地区), 6 ADK (上園地区), 6 ADL (宮ノ前地区)

1 はじめに

目的

平成7年度第2回目の計画調査は、平成8年度からの近鉄斎宮駅北側一帯約6.5haの地域に計画が進められている史跡整備のために、遺構の分布や密度といった状況を把握することを主たる目的として実施した。調査は広範囲で効果的に目的を達するために、今年度では幅4mの南北方向のトレンチを主体とすることとし、内山地区で3ヶ所、上園地区で3ヶ所、宮ノ前地区で4ヶ所を設定した。

経過

当該地は史跡斎宮跡の発掘調査の端緒となった地域のひとつであり、古くは昭和48年度からの史跡範囲確認のための第8次、第9次調査、昭和57年度の第47次調査などトレンチ調査を中心進められてきており、昭和63年度から宮ノ前地区の第78次調査、上園地区的第82次調査など面的な調査が実施されるようになり、近鉄線に北接した内山地区では平成3年度から継続して第93次、第95次、第99次調査が実施されている。またこの間にも小規模な試掘調査も行われてきており、こうしたこれまでの成果の蓄積から当該地域では昭和時代前半まで旧水田耕土下から瓦粘土を多量に採取しており、遺構の残存状況が極めて悪いことが知られている。しかしながら、上園地区的北半と内山地区、および宮ノ前地区的第9-10次・第78次調査区では部分的に後世の削平、攪乱を受けつつも遺構が残存しており、史跡を東西に貫く奈良時代の古道の他、奈良時代の堅穴住居、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物や井戸、溝などの他、「延喜通寶」を入れた土師器壺を埋納する平安時代中期の土坑が見つかっている。特に平安時代前半に史跡東部で展開した方格地割との関連において、平安時代初期から前期においても掘立柱建物に地割りの基軸に棟方向をあわせたものとそうでないものがあり、また、今回の調査対象地域の内側が一辺約120mを基調とした方形区画に分割されているのかどうかも判明しておらず、方格地割北西部の状況は不分明な点が多い。今回の調査では近鉄斎宮駅北側地域のこうした問題点の解明も期待されるものとなった。

地区設定

なお、今回は調査対象地が広大になり、従来の地区区分の方法では複数に及んで煩雑になるため、今回は従来に加えて国土座標第VI系を基準にして史跡全体を100m×100mの大地区に分け、さらにこれを4m×4mの小地区(グリッド)に分割して調査区名の表示に加えている。区画は東西をアルファベット、南北をアラビア数字で表示し、大地区は大文字で、小地区は小文字で区別した。

期間・面積

今次調査は調査区の位置や調査期間に応じて第111-1次から第111-3次の3次に分けたが、他の調査との日程的な調整や、旧水田地帯であることからの湧水の問題のため調査期間は平成7年7月14日から平成8年2月29日に及び、最終的な調査面積はトレンチ10か所の合計で1,740m²となった。

2 第111-1次調査の遺構

遺構については以下、各調査次ごとに記述する。第111-1次調査は内山地区的2か所で、近鉄斎宮駅北西に位置する南北28m、幅4mのAトレンチ(N-16、9トレンチ)と東西16m、南北24mの逆「L」字形を呈するBトレンチ(N-16、j～1トレンチ)である。現況はいずれも公有化された雑種地で、南から北へ緩やかに傾斜して



第13図 第111次調査 調査区位置図 (1:2,000)

		遺構の種別									
		S	B	S	K	S	D	S	A	S	E
奈良時代	中期	7440	7445								
	後期			0236	7443	7444					
平安時代	初期			7442							
	後Ⅰ期	7435	7437	7439	7446		7436				
	後Ⅱ期			7447							
不明				7438			7438	7441		0235	

第3表 第111-1次調査 時期別遺構分類表

いる。

(1) A トレンチの遺構

遺構検出面が地表面から南端で約25cm、北端で約75cmで、黄褐色の粘性の強い洪積世堆積土の地山面は北へ大きく傾斜している。検出遺構には掘立柱建物2棟、土坑2基、溝1条がある。

SB7435 S B7435は第8-8次調査Mトレンチで一部検出されている掘立柱建物で、N 0° Sの棟方向をとる3間×2間の南北棟である。柱間寸法2.1m、方形の柱掘形は一辺約60cm～70cm、柱痕跡直径約25cmである。出土遺物は極めて乏しいが、これまでの内山地区周辺の調査では正方位の建物は平安時代後半を中心認められることと、建物周辺の包含層遺物からみて平安時代後1期頃のものと考えられる。

SB7437 S B7437は柱間寸法2.4m、柱痕跡の直径約30cmでE 0° Wに棟方向を取る総柱建物で、南北2間、東西方向で1間分以上の規模である。これも後期頃のものとみられるが、重複関係からS B7435の方が古いことが分かる。なお、S B7437北2m弱にあるS D7436は時期不明だが、地表面から約70cmの深さで検出されており、今回の調査区で多数認められる耕作溝とは考え難く、S B7437に伴う溝である可能性がある。

SK7438 調査区の中央にある長さ約3.4m、深さ10cm程度の浅い不整椭円形土坑で出土遺物がなく、時期や性格は不明である。平安時代後半以降のものであろうか。

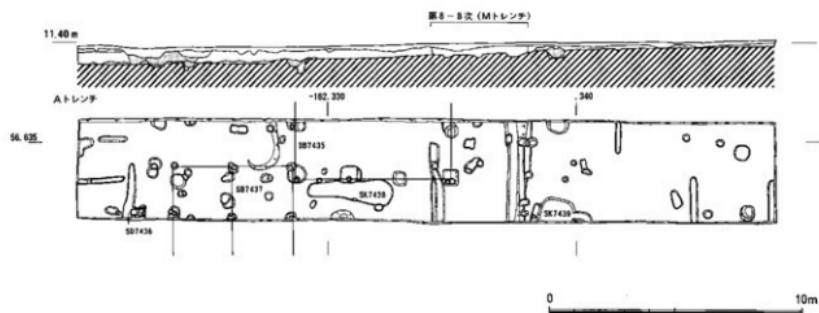
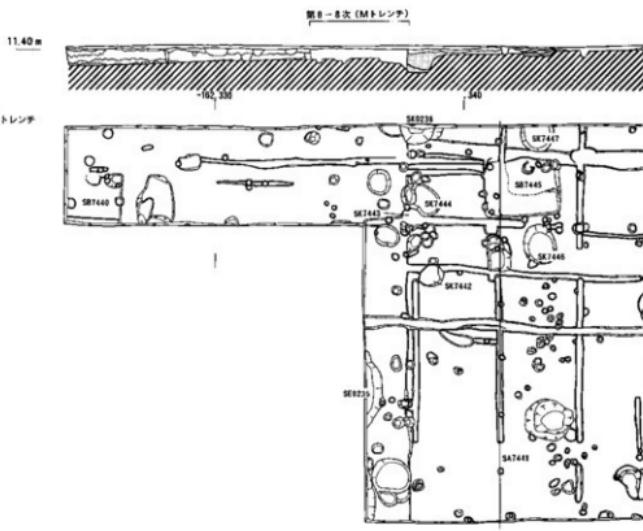
SK7439 調査区の西に接して検出され、検出長で約2.1m、深さ約15cmである。土師器杯・椀、ロクロ土師器杯、黒色土器椀、灰釉陶器壺片が出土しており、平安時代後期のものと考えられる。

(2) B トレンチの遺構

地表面から調査区南端で約20cm、北端で約80cmの深さで地山面に達する。堅穴住居2棟、土坑6基、欄列1条、井戸1基が検出された。

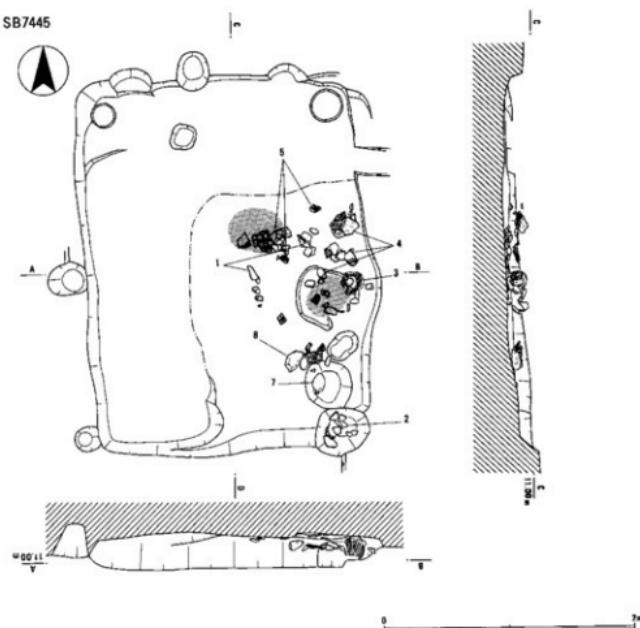
SB7440 トレンチ北端で検出された堅穴住居で、北辺と西辺が調査区外に延びているため全体は窺い知れないが、検出長で東西約2.0m、南北約2.2mである。東辺に直径約60cmの範囲に焼土が散布しているが、固結度が低いため明確にカマドとして判断できない。厚さ約5cmの粘土張床がカマド付近を中心に施されているが、主柱穴は検出できなかった。南東隅に直径約70cmの小土坑があり、土師器杯、壺片が出土している。奈良時代中期から後期にかけてのものとみられる。

SB7445 調査区の中央付近で検出した東西約2.3m、南北約3.0mの堅穴住居である。主柱穴は堅穴掘形の3か所の隅にみられる。東辺中央にカマドを持ち、そこを中心とした約東西1.4m、約南北2.0mの範囲に小ブロック粘土による張床が施されよく綺まっている。その外側には幅約80cmの幅で北から西にかけての張床されない部分が残り、カマドを中心とした使用状況が想定される。カマド周辺に焼土は散布していたがカマドの構築部分はほとんど残存していない。しかし高さ約15cmの支柱石が残り、上から土師器壺(3)が被せられている。その西側前面に径40cm程の焚き口の痕跡とみられる落ち込みがあり、埋土には若干の炭化物が混在していた。土師器壺は転落したものではなく、西側面のみ赤変していることからもカマド支柱として使用していたことが窺われる。カマド周辺にはこの土師器壺の他にも土器片が散布しており、住居の廃絶時に埋没したものとみられる。奈良時代中期のものであろう。

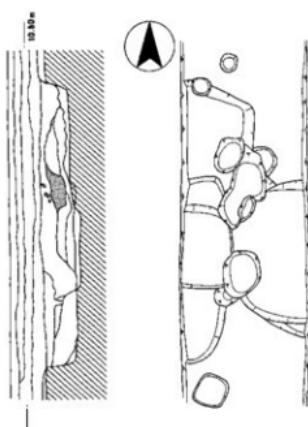


第14図 111-1次調査遺構実測図 (1 : 200)

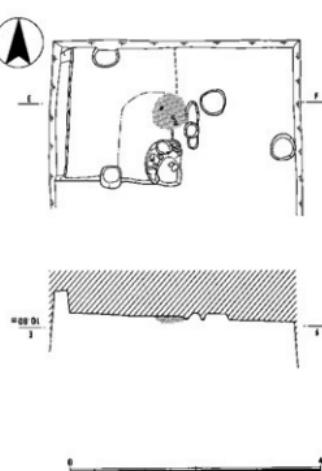
B トレンチ SB7445



D トレンチ SB7465



B トレンチ SB7440



第15図 SB 7440・7445・7465遺構実測図 (1:80 網目は焼土の分布範囲、一点鎖線は貼床の範囲を示す)

- SK0236・7443 調査区東半で確認された直径約0.9m～1.6m、深さ約10cm～40cmの浅い不整楕円形の小規模な土坑群で、SK0236からは土師器杯片が、SK7443・7444からは壺の小片が出土している。いずれも奈良時代後期に属するとみられる。
- SK7442 直径約1.0m、深さ約30cmの楕円形土坑で、土師器壺などが出土している。遺物は平安時代初期のものである。
- SK7446・7447 いずれも直径約1.6m、深さ20cm程度の楕円形土坑で、土師器片等が出土しているが、SK7447からは土師器皿の完形品が出土した。前者は平安時代後Ⅰ期、後者は平安時代後Ⅱ期に属するものとみられる。
- SA7441 調査区の中央をE 0° Nの方向に延びる東西柵列で、柱穴は直径30cm弱、柱間寸法は2.2mである。遺物が極めて乏しく時期不明である。Aトレンチまでは延長していないが、先述のSB7435・7437と方向を揃えており、同時期のものである可能性もある。
- SE0235 第8-8次調査の際に検出されており、遺構上端の直径約3.6mのものであることが判明しているが、どの時期に属するかは確認できなかった。
- ### 3 第111-2次調査の遺構
- 上園地区に3本の南北トレンチを設定した。西から南北63m、幅4mのCトレンチ(M-16、5トレンチ)、南北82m、幅2mのDトレンチ(M-16、11トレンチ)、南北22m、幅4mのEトレンチ(M-16、21トレンチ)である。Dトレンチのみが遺構検出面が約90cmと深く、排土の処理が困難なため、遺構の密度も勘案して幅2mに止めている。C・Eトレンチ部分は旧状が水田、Dトレンチは周囲より50cm前後標高が高く畑地であったが、現在は公有化されている。
- #### (1) Cトレンチの遺構
- 土坑3基、溝6条がある。現地表面から約30cm～40cm程度の掘削で遺構面に達するが、遺構は北半に集中し、南半にはほとんどみられない。遺構面は粘性の強いシルト質を基調とする明黄褐色土である。調査区の中央北寄りには昭和40年代なればまでの電柱とその支線基礎の跡が残る。
- SK7448・7450 トレンチ北端の方形を呈するとみられる土坑だが、全形は窓いしない。前者は深さ約20cm、後者は約40cmあり、あるいは堅穴住居である可能性もある。SK7448からは遺物はみられなかったが、SK7450からは土師器壺の他、やや底面から浮いた状態で須恵器壺(18)の破片が集積した状態で出土しており、両者とも埋土が漆黒色と共通することからいずれも奈良時代中期に属するものと考えられる。
- SD7449 SK7450に重複され、幅約90cmの連続する土坑状を呈し、断面U字状の溝である。深さは50cm～30cm程と一定せず機能は明らかではない。土師器杯・壺や須恵器壺の破片が出土しており、SK7450と同一個体を含むことからほぼ同時期のものとみられる。
- SD7451 長さ約7m、幅約40cmの北東から南西にやや弯曲する溝で、深さは5cm～10cmと浅く、北から南へと緩やかに傾斜している。溝の中程にあるいは鋤先痕と考えられる幅20cm前後の小ピットが連続する。土師器杯片が出土しておりSD7449と方向を揃えることから、性格は不明だが概ね同時期のものと考えられる。
- SK7455 トレンチ中程で東壁にかかる検出長約1.6m、深さ約40cmの断面逆台形状を呈する土坑である。中央に深さ50cmのピットが穿たれる。土師器片等が出土し、平安時代前

期頃のものとみられる。

SD7452・7453 前者は幅約1.0m、深さ20cm程の断面が弱い逆アーチ状を呈する溝で、後者はそこから南に派生する幅約80cmで南に向かって浅くなる溝である。土師器皿・鍋、常滑産陶器片などが出土し、14世紀前葉、室町時代のものとみられる。

SD7456 トレンチ南部で検出した幅約0.9m～1.0m、深さ30cm弱の断面逆台形状の溝である。出土遺物はないが、にぶい黒褐色土の埋土の固結度は高くなく、中世以降のものであろう。またトレンチ北半のSD7454も同様のものと考えられる。

(2) Dトレンチの遺構

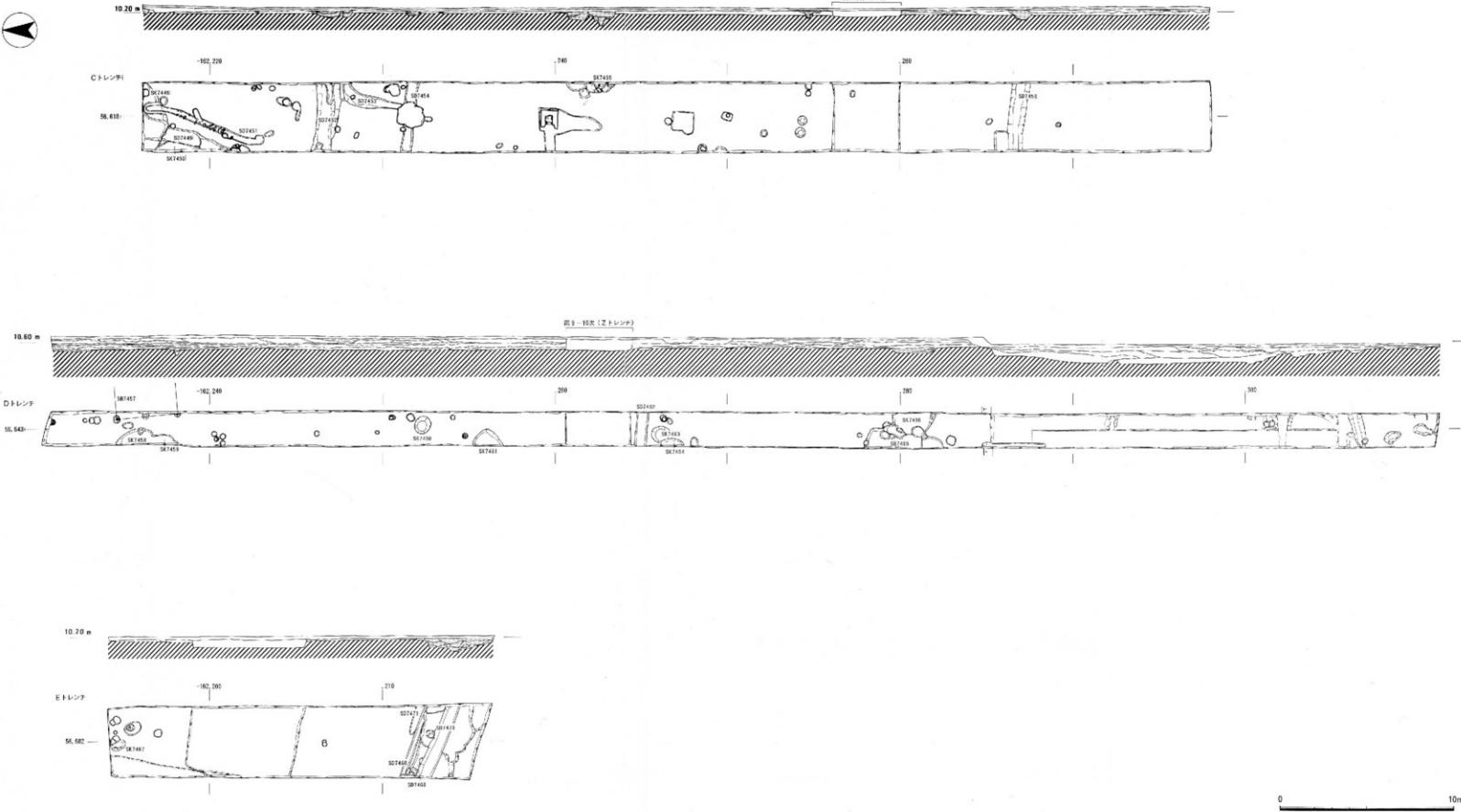
上園地区に島状に残る旧畠地から南の水田地まで延ばしたトレンチである。調査区南半の旧水田部分は予想どおり近世以降の瓦粘土採取により、遺構面まで完全に掘削・破壊されてしまっているが、調査区北半の旧畠地は現地表面から約45cmまで盛土の痕跡はあるものの、深さ約90cmで灰色シルト質を含む黒色～オリーブ黒色壤土いわゆる黒ボク質の遺構面に達した。またトレンチ南半から地山は褐色系の重粘土となる。検出遺構には竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、土坑7基、溝1条がある。

なお、調査区南半の水田部分についてはトレンチ東半の幅2mにつき底部まで掘削を試みたが、深さは最大で約1.2mにまで及び、攪乱部分の遺構は完全に破壊されているものとみられる。

SB7465 トレンチのほぼ中央で検出した竪穴住居で一辺約4.4mの方形を呈する。遺構面から約30cmの深さがあり、東半のみの検出である。埋土中に焼土を認めたがカマドは明確でなく主柱穴も発見できなかったが、埋土断面にはカマドの残骸とみられる焼土が床面上10cmのところでレンズ状に堆積している。また、竪穴住居掘削内側に直径約1.8mの落ち込み状の部分があり、貼床等の構造も明確ではない。遺物は土師器杯・皿や甕片、須恵器広口壺や長頸瓶の破片が出土しているが床面からは浮いた状態だった。

		遺構の種別				
		S B	S K	S D	S A	S E
奈良時代	前期	7458 7459				
	中期	7448 7450	7449 7451			
	後期	7465 7467				
平安時代	前期	7455 7460 7466				
	後期	7461				
	末期	7463 7464	7470			
鎌倉時代				7462 7468 7469 7471		
室町時代				7452 7453		
不明		7457		7454 7456		

第4表 第111-2次調査 時期別遺構分類表



第16図 第111-2次調査 遺構実測図（1:200）

- これらは奈良時代後期に属するとみられる。
- SB7457 調査区北端近くで2間分のみ検出された。柱間寸法は1.8mで、柱穴は直径が掘形約40cm、柱痕跡約15cmである。E3°Nの棟方向の東西棟とみられ、あるいは北側に庇部分を持つかもしれないが、時期等は不明である。
- SK7458・7459 いずれも調査区西側へ続くが、検出長2m前後、深さ約30cmの不整円形土坑で、前者から土師器杯・甕片、須恵器高杯片が、後者から土師器甕片が出土している。奈良時代前期のものとみられる。
- SK7460・7466 前者は長径約1.0m、深さ約20cmの梢円形土坑で、土師器甕片、須恵器小片が出土し、後者は直径2.3m、深さ約30cmの円形土坑で、土師器杯・甕・盤、須恵器甕・壺片が出土している。平安時代前期のものとみられる。
- SK7461 直径約1.8mの不整円形土坑で、遺構面から約65cm掘削した段階で滲水し、周囲の土壤も脆いため、作業の安全面から掘削を中断した。井戸である可能性がある。土師器片が出土しており、埋没時期は平安時代後期以降とみられる。
- SK7463・7464 トレンチ中央部の小規模土坑で、前者は直径約1.1m、深さ約20cm、後者は直径約1.3m、深さ約55cmである。いずれからも土師器片が出土しており、平安時代末期のものとみられるが、重複関係からはSK7464の方が古い。
- SD7462 調査区中央部で検出した幅約70cm、深さ10cm弱の東西方向の溝である。平安時代の土器片に混じって山茶椀片が出土しており、鎌倉時代前半の遺構と考えられる。なお、周辺では昭和50年度に実施した第9-10次調査Zトレンチで南北方向の弧状の溝が今回の東方約35mで多数検出されているが、東西方向のものはほとんどなく、SD7462との関連は不明である。
- (3) Eトレンチの遺構
- 上園地区の東部中央に芝生広場から南に向かって設定したトレンチである。地表面からは浅く30cm程度の掘削で明灰色シルト質壤土の地山面に達する。調査区内では一辺が約7mの瓦粘土採取土坑が2か所みられ、周辺の遺構はかなり破壊されているものと予想されたが、調査区内では土坑1基、溝4条が確認されている。
- SK7467 長径約80cm、深さ約20cmの梢円形土坑で、土師器杯・高杯・甕・長胴甕片、製塙土器片の他、直径約4cm×6cmの焼けた粘土塊が出土している。奈良時代後期に属するものとみられる。
- SD7470 調査区南端で検出された幅約2.0m、深さ約70cmの溝で、概ねE22°Sの方向を取る。埋土は黒褐色土の上層とそれに地山崩壊土ブロックが混入する下層に分離され、また、断面観察からも4～5回の掘削が認められるが、出土遺物の上では時期的に分離できなかった。土師器皿・甕片、灰釉陶器片、陶器壺・捏鉢片があり平安時代末期に埋没時期が求められるが、溝の規模や方向から史跡内を東西走る奈良時代古道の北側溝に関連するものとみられる。なお溝北肩部に直径約50cmの小ピットがおよそ2.4mの間隔を開けて検出されているが、性格は不明である。
- SD7468・7469 SD7470の北側に併走する幅30cm～40cm、深さ5cm～20cm程度の小規模な溝で、出土遺物もみられなかつたが、調査区東方の第78次調査の際にも奈良時代古道の南側溝と考えられる溝に沿って鎌倉時代の小規模な溝が検出されており、これらも当該期のものとみておきたい。

4 第111-3次調査の遺構

宮ノ前地区に4本、内山地区に1本の南北トレンチを設定した。これらはいずれも旧水田地で、現況は公有化された雑種地である。第78次調査で遺構面が確認されているものの周辺のトレンチ調査や試掘調査からの知見では、かなりの範囲にわたって遺構面が破壊・攪乱されていることが予想された。

調査区は北西から南北80m、幅4mのFトレンチ（L・M-17、10トレンチ）、南北36m、幅4mのGトレンチ（M-17、10トレンチ）、南北42m、幅4mのHトレンチ（M-18、5トレンチ）、南北46m、幅4mのIトレンチ（M-18、2トレンチ）、南北18m、幅4mのJトレンチ（N-18、2トレンチ）である。

(1) Fトレンチの遺構

延長は全体で約80mになるが、北から3分の2ほどの所を東西に管理用道路が通つており、ここから北区と南区に分けた。遺構検出面は浅く、地表面から30cm前後で達する亜円礫混じりで粘性シルト質黄褐色土を遺構面として捉えた。

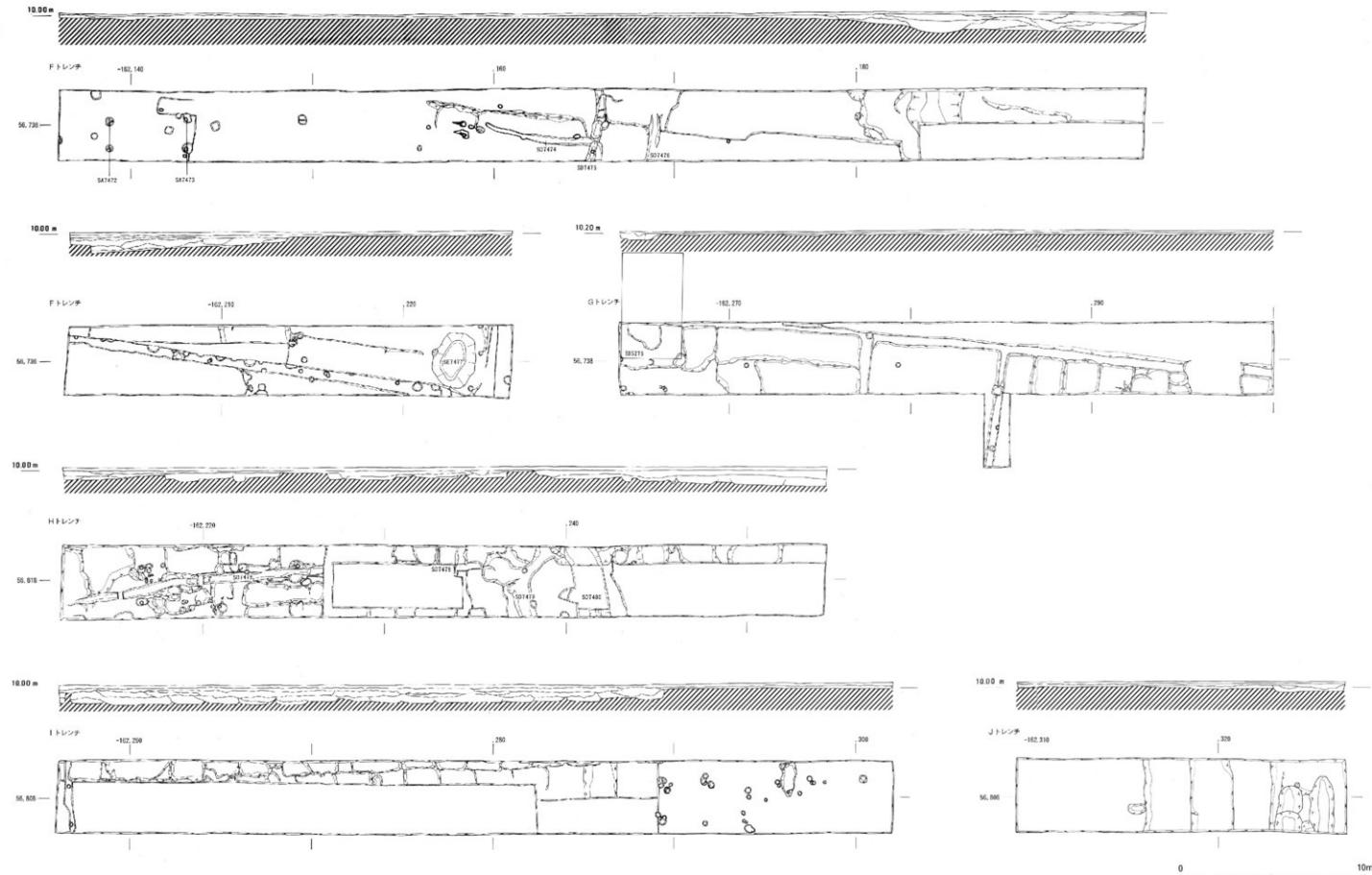
北区では調査区の中央から南端にかけて水田造成のための削平や瓦粘土採取の攪乱土坑が広がり、そのまま現在の道路を越えて南区北半にまで及んでいるため、遺構は極めて乏しく、柵列2条、溝3条の他、樹木根の痕跡とみられる小ピットの散在を確認したに止まり、出土遺物も南端の攪乱土坑から土器類が若干みられた他は極めて少ない。南区では井戸1基の他、北半の幅30cm～40cmほどの土手状に残って破壊を免れた地山面上に小ピットが多数みられたが、かつての遺構の分布が窺われるに止まる。Fトレンチでは攪乱土坑の東半を北区で2mと南区で1mの幅で底部まで掘削を試みたが、最大でおよそ1.2mの深さにまで及び、遺構は完全に破壊されていることが判明した。なお、Fトレンチの攪乱土坑は他の地点と異なってなだらかな法面を持っており、自然流水路に伴つて堆積する粘土が採取された痕跡ともみられる。

SA7472・7473

北区の北端でそれぞれ1間分検出された柵列で、いずれもE0°Wの方向を取つて西へ延びていくものとみられるが、東への延長は不明確である。前者は柱間寸法1.5mで直径40cm程の柱穴に、径5cm～10cmの礫が根石として置かれ、後者は柱間寸法1.6m、一辺約50cmの不整形の掘形に直径15cm～20cmの柱痕跡が認められる。出土遺物はそれぞれ土師器片が若干みられたのみだが、柵列の方向から平安時代後期のもの

		遺構の種別					
		S B	S K	S	D	S A	S E
平安時代	初期			7478			
	前期	2867		7479			
	中期	2872					
	後期	5276				7472 7473	
	末期						7477
不明				7474 7475 7476 7480			

第5表 第111-3次調査 時期別遺構分類表



第17図 第111-3次調査 連構実測図（1:200）

- とみておきたい。
- SD7474～7476 粘土採取及び水田造成のための削平から免れて僅かに底部が遺存した溝で、幅約40cm～50cmの溝である。S D7475のみ小土坑が連続する形で、最大40cm近くの深さがあるが他は10cm程度しか残っていない。S D7445・7446は幅約3.2mをおいて平行しており、あるいは道路側溝となるかもしれない。遺物は全く出土しておらず、包含層にも遺物がないことから時期は不明である。
- SE7477 南区の南端で検出した長径約3.0m、短径約2.2mの井戸で、遺構面からおよそ60cm～70cmのところで段を持って落ち込む。遺構面から約170cmまで掘削したが、深さ1mほどから側壁が内側に抉れ、崩落の危険性が出てきたため掘削を中止した。埋土からの遺物は比較的少なく、土師器杯・壺片、ロクロ土師器台付杯、灰釉陶器碗・壺片、綠釉陶器碗片などの小片が出土している。掘削年代は不明だが、最終的な埋没は平安時代末期に求められよう。
- (2) Gトレンチの遺構
- 第78次調査区を挟んでFトレンチの南に延長して設定した。地表面から約20cmの深さで旧水田の床土もほとんど伴わずに淡黄色で重粘土の地山面に達し、かつての水田地割りに沿った畦畔の跡がそのまま地山面に残っている。また、所々で短辺約1.5m～1.8m程度の方形を基調とした粘土採取土坑が連続している。これらの削平・掘削により遺構はほとんど壊滅的に破壊されているかあるいは分布していないものとみられる。しかし調査区北端では上部が掘削されているにも関わらず、第78次調査区から続く掘立柱建物3棟の柱穴がわずかに残存しており、特に今回、平安時代後期のものとみられるSB5276については3間×2間の東西棟であることが確定した。
- SB5276 なお、調査区の中央部の水田畦畔上で検出した一辺約60cmのピットの性格を確認するために一部西へ調査区を拡張したが、柱穴の連続は認められなかつたため、このピットはかつての水田の地割境界を示すために何かを埋設したものであったと考えられる。
- 出土遺物については包含層もほとんど形成されていない状況で皆無であった。
- (3) Hトレンチ
- 今回のトレンチで最も東端に位置し、平安時代前半の方格地割の南北道路を踏襲すると考えられている町道に接して設定されたトレンチである。遺構面の状況は複雑で、調査区の北部と中央部付近にのみ遺構面が残存するもののはば全面に瓦粘土採取による攪乱を受けており、調査区の東辺で幅1mにつき完掘したが深さおよそ1.2mまで破壊が及び、この部分の遺構の残存は無いものと考えられる。
- かろうじて遺構が遺存したか所も上面をかなり削平されており、初期の地層面を残している部分は無い。遺構は溝が3条検出されている。なおHトレンチの北半には直径50cm前後の掘形の柱穴もみられるが、建物としてのまとまりは明らかではない。
- SD7478 途中の攪乱部分を挟んで延長約16.5mが検出された。幅約50cm～60cmで、断面は弱い逆台形を呈する。溝底のレベルは所々凹凸があるもののおよそ9.5mで高低差は無い。黒褐色土の埋土からは遺構の規模に比して多量の平安時代初期の土器が出土しており、土師器杯・皿・高杯・壺・鍋、須恵器杯・壺・壺類と多彩である。溝は緩やかにややカーブしているものの、その時期から考えて先述の方格地割の南北道路に関連する遺構とみられ、道路側溝そのものである可能性もある。

SD7479・7480

いずれも S D7478に重複し、そこから直交するように延びるとみられる東西溝である。前者は幅約1.0m、深さ約40cmで、平安時代前半の土師器杯・皿等が出土している。後者は幅約1.8m、深さ約40cmでやや弯曲する溝で出土遺物は無く、S D7479とは埋土も若干異なるために時期は不明だが、溝心間で4m前後、溝肩間で約2.4mの間隔をおいて併走しており、方格地割の南北道路に直交する道路遺構の可能性もある。

なお、Hトレンチからの出土遺物として、S D7478の他に平安時代初期のほぼ完形の土師器杯2個体をはじめ、調査区南半の攪乱土坑埋土からの出土が多く、S D7478の推定延長部分をはじめ、かつては遺構が分布していたものとみられる。

(4) Iトレンチの遺構

調査区の北4分の3は瓦粘土採取のため攪乱されており、調査区の東辺で幅1mにつき攪乱土坑の底部まで調査したが、最大で約1.1mまで攪乱されているため、この部分の遺構は完全に破壊されている。粘土採取のための攪乱土坑は旧水田の地割に沿って幅1.8m前後を単位として連続して掘削された様子が窺われる。調査区南端から4分の1までの範囲では、地表面から30cmほどの深さで内山地区から続く小礫を含む黄褐色の地山があらわされるが、樹木根の痕跡とみられる小ピットや攪乱土坑が散在するものの遺構は確認できない。攪乱土坑埋土からは奈良時代と平安時代後半～鎌倉時代の完形品や大型破片を含む土器類が出土しているものの、Gトレンチ周辺とともに遺構の分布そのものが薄い地域であると考えられる。

(5) Jトレンチの遺構

最も南東に設定されたトレンチだが、このトレンチを設定した旧水田地は極めて多数の遺構が確認された第95次調査や第99次調査を実施した台地状微高地の北端から約1mの落差で急に落ち込んでおり、調査前から遺構面の削平が予想される地点であった。調査の結果、地表面から25cm～30cmの深さで赤褐色～黄橙色の粘質土の地山が現れ、遺構の痕跡、出土遺物は皆無であった。水田の開墾や粘土採取によりこの地点の遺構は完全に破壊されているものとみられる。

5 第111次調査出土の遺物

第111次調査では広域を対象としているものの、トレンチ中心の調査であるため遺構の性格が充分に把握できたとは言ひがたく、また、そのかなりの部分で後世の攪乱を受けており、遺構の分布自体も薄いため、調査面積に比して出土した遺物量は全体で整理箱で78箱分と少ない。そのため出土遺物については、第111次調査全てのトレンチを通して、各時代ごとに比較的良好な状況の遺構と特殊遺物とされるものを選んで概述したい。

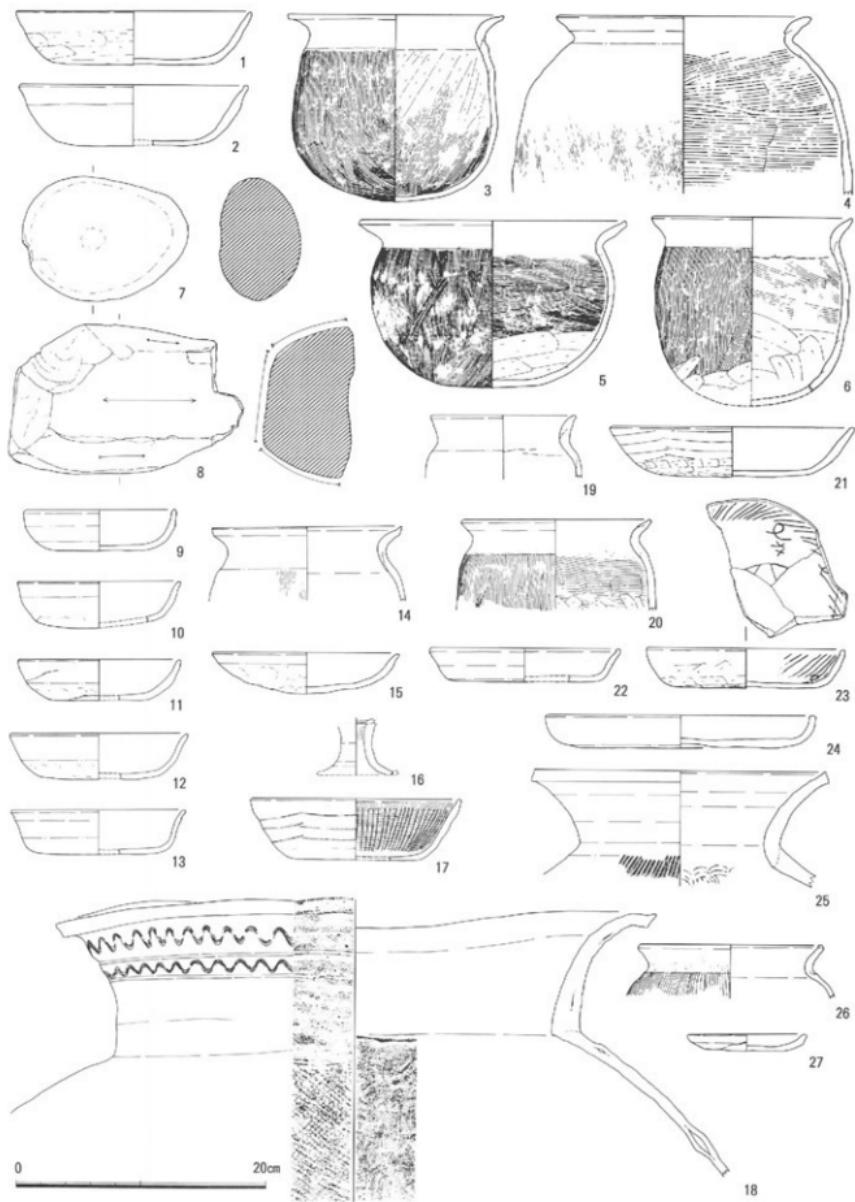
(1) 奈良時代前期の遺物

SK7458・7459

今回の調査ではこの時期に該当する遺構が乏しく、遺物量もまた少ない。僅かにDトレンチのS K7458・7459から土師器杯・甕、須恵器高杯の小片が出土しているが、調整等の詳細が窺われるものは少ない。土師器甕については口縁部を上方に引き上げて端部を僅かにつまみ上げ、外面はハケ調整、内面はハケ調整とヘラケズリ、あるいは内外面ナデ調整で仕上げる。

(2) 奈良時代中期の遺物

当該期については竪穴住居や土坑から比較的良好な資料がある。

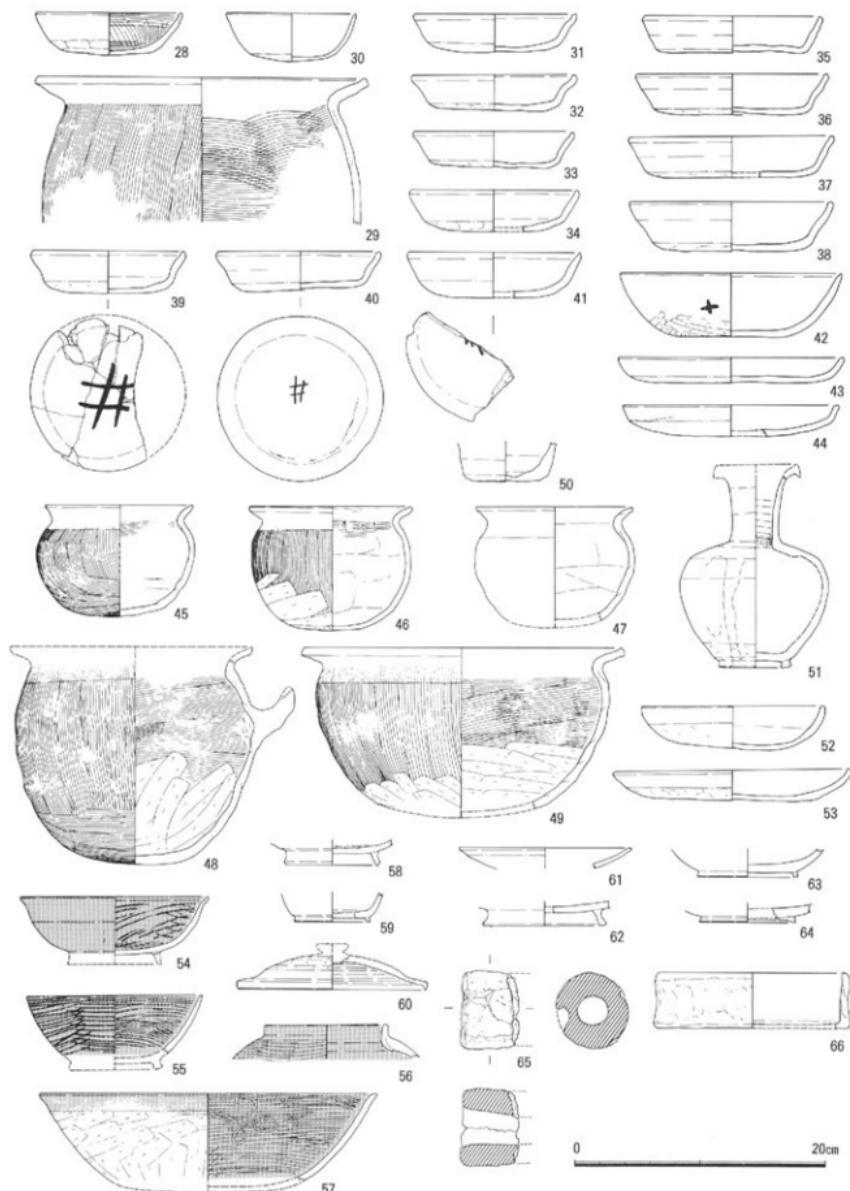


第18図 第111次調査 遺物実測図

S B7445 : 1~5, 7~8, S K7442 : 6, S B7440 : 9~14, S K7447 : 15, S K7450 : 16~18,
S K7458 : 19~20, S B7465 : 21~25, S K7466 : 26, S K7464 : 27

SB7445 土器	竪穴住居廃絶に伴ってカマドの周辺に廃棄されたものとみられる一括の資料である。土師器鍋・甕・長胴甕・瓶と鉄片、自然石を利用した据え付けの砥石、敲打痕のある円礫が出土しているが、須恵器は一片も出土していない点が注目される。土師器杯類は口縁付近をヨコナデし、体部から底部外面をヘラケズリするb手法によるもので、口径18cm前後の大型品が多く(1,2)、赤褐色で緻密な胎土を持つ良品が多い。土師器甕は口縁を緩やかに外反させながら端部を上方へ引き上げるもので、器高15cm前後の中型品が中心で、外面はハケ調整によるが、内面は下半がハケ、上半がケズリ調整のもの(3)、上半がヨコハケ、下半がケズリのもの(5)がある。
石製品	石製品の(7)は花崗岩系の長さ13.5cm、厚さ6.4cmの円礫で、鐘部と平坦面に1か所ずつ敲打痕を持つ。(8)はカマド口の脇の部分に据え付けてあったもので、砂岩質の長さ19.3cmの断面台形の礫である。上面と両側面の3面が磨耗しており、砥石として使用されたことは明らかだが、上面は被熱による赤変が認められる。鉄片も若干出土していることから両者の関連が窺われる。
SB7440	竪穴住居の南東端の長径約70cmの小土坑からの一括資料である。土師器供膳具を中心だが、SB7445とは異なり、(13)のように外反する口縁部を持つものがあるが、内弯する体部をもつ在地系の椀形のものが主体で、胎土はいずれも微細な砂質混じりの淡黄色系で共通する。この遺構でも須恵器は全く出土していない。
SK7450	土師器杯・甕片の他に須恵器では大型の甕、高杯、鏡模倣とみられる輪状つまみを持つ蓋片がある。(17)の杯は外面はヘラミガキで、内面はハケ状のカキ目を横方向に施した後から放射状の暗文を一段施す。胎土・焼成とともに精良だが、器壁は厚手で精良品の模倣であると考えられる。(18)は土坑上部で大破片が重ねられるようにして出土したもので、口径が48cm以上あるが焼成時のゆがみが大きく、欠失部分もあるため正確な法量は判明しない。胴部から底部にかけての破片も多数出土したが、これは焼きひずみのため図上でも復元できなかった。須恵器は猿投窯編年で第IV期の前半に属すると見られる。
(3) 奈良時代後期の遺物	当該期の遺物は少ないものの、竪穴住居や土坑出土の資料が若干ある。
SB7465	Dトレンチの竪穴住居廃絶後の埋土からの資料で、土師器杯・皿・甕片、須恵器広口壺・台付長頸瓶の底部片が出土している。土師器杯類はb手法によるものが多いがe手法のものもみられ、内面に暗文を施すものもあるが、器高が低くなり、底部から口縁部が鋭く屈曲し外へ直線的に延びるものが含まれる。これらは、遺構床面からかなり浮いた状態で出土しており、竪穴住居存続期より新しい様相を示す可能性がある。
SK7467	Eトレンチの小土坑の資料である。土師器杯・高杯・甕片・長胴甕片の他、製塩土器片と6cm×4cm程の焼けた粘土塊が出土しているが性格は不明である。(28)は内面に横方向と放射状方向のヘラミガキを施しており精良な胎土を用い、焼成も良いが、器壁は厚く、成形は洗練されていない。
(4) 平安時代初期の遺物	この時期に該当する遺構は少ないが、SD7478を中心に比較的多量の遺物が出土している。
SK7442	Bトレンチの小土坑の遺物である。土師器甕(6)半個体分の破片が出土している。

	口縁部の屈曲はあまいが底部外面をヘラケズリ調整する。
SD7478	遺構の検出長は16.5m程度であったが、整理箱で2箱分の遺物が出土しており、完形品やそれに近いものが多く、墨書き器もみられるなどの特色がある。土師器杯・皿・高杯・壺・把手付壺・鍋、須恵器杯片・長頸壺・壺片などがある。口縁部が外反する土師器杯Aは全てe手法によるが、内弯する杯Bの(42)にのみb手法がみられる。杯には墨書きされるものが多く、「#」と墨書きされる(39・40)や「+」の(42)の他にも(41)など判読不能なもの数片ある。土師器壺は口径12cm~13cm、器高10cmの小型品も目立つ。須恵器長頸壺の(51)は口縁部を欠失する他はほぼ無傷で、3段構成による成形である。頸部から胴部上半にかけて自然釉が流れる。(50)は焼成はあまり灰白色を呈する。長岡京跡で顕著にみられる壺Gの底部とみられる。
	(5) 平安時代前期の遺物
SK7460	当該期の遺構は少なく、出土遺物も少ない。EトレーナーのSK7460からは土師器杯片が出土しているが、時期的な詳細は不明である。CトレーナーSK7455やEトレーナーSK7466からは土師器杯・壺など前期とみられる土器が出土している。また、HトレーナーのSD7479からは奈良時代からの系譜を引く(52)のような器形の土師器杯もみられるが平安時代前期頃のものとみておきたい。
SK7455・7466	
SD7479	
	(6) 平安時代後期~末期の遺物
SK7447	ほとんど遺構の検出をみなかった平安時代中期に比べ、後期には遺構の数は増えるものの、良好な出土資料は極めて乏しい。BトレーナーのSK7447からは完形の土師器皿(15)が出土しており、ここでは後期のものとしたが、さらに若干下るものかもしれない。
SE7477	Fトレーナーでは平安時代末期を主体とする井戸SE7477を検出しているが、遺物は細片のみで、まとまった資料は得られなかった。この時期についても極めて多数の遺構を検出した内山地区の第95次・第99次調査区の近辺を調査しているにもかかわらず、遺物の出土は少ない。
	(7) 第111次調査出土の特殊遺物
縁釉陶器	斎宮跡の調査で現在特殊遺物として選別しているものは、第111次調査で12箱出土している。その中で主だったものを概述したい。まず縁釉陶器は39片出土しており、この中ではFトレーナーとDトレーナーでの出土が目立つ。近江系あるいは東濃系とみられるものが多く、10世紀頃の資料とみられるものが多い。フイゴの送風装置側の端部とみられる羽口(65)などの縦2片や、(58)などの漆付着の灰釉陶器片、朱の付着した須恵器片(59・60)など工房的性格を窺わせるものも出土しており、今後はその分布や遺構との関連を追跡していく必要を痛感する。黒色土器ではA・B類とともに出土しているが、(56)は斎宮跡では第44次調査のSK2650以来の短頸壺形のものである。この他特殊遺物とされるものでは貿易陶磁器の青磁11片、製塩土器が136片、管状土錐15個が出土している。
羽口・フイゴ 灰釉陶器	
黒色土器等	
貿易陶磁器	
その他	また鉄片が、40片あるが、用途・性格は現在不明である。



第19図 第111次調査 出土遺物実測図

6 調査のまとめ

以上のように第111次調査は10本のトレンチを設定して、近鉄斎宮駅北側の遺構の分布・残存状況を調査したが、内山地区のA, Bトレンチの2ヶ所と上園地区のCトレンチを除きいずれも後世の攪乱・削平をうけていることが確認された。検出された遺構も調査区が狭隘なため、溝や柱穴列など性格が十分把握できないものもあるが、今回の成果により判明あるいは予想される点について次に整理しておきたい。

(1) 方格地割の問題

近鉄斎宮駅北側の地区では第99次調査と第101次調査により平安時代前半の方格地割の道路交差点に相当するのではないかと思われる道路側溝が検出されており、現在想定される東西7列、南北4列の構成でいけば北西の4区画分があてはまることになる。しかし第93次調査でこの4区画分のエリアを東西に2分する南北道路の痕跡は明確ではなく、今回もまたC, Dトレンチにおいて東西道路の痕跡が明確にし得なかつた。こうした結果は、今次調査がトレンチ調査である点、遺構の残存度が悪いという点からみて依然確断できるものではないが、方格地割において、この北西4ブロック分が一辺約120mの方形区画を基調とする構造にならない可能性を高めるものとなろう。ただし、HトレンチでSD7478から西へ延びていく形のSD7479とSD7480が道路側溝であるとみられるならば、南北2分する東西道路の存在し得る可能性も完全に否定されるものではない。

なお、方格地割の問題からみるとHトレンチのSD7478は初期の出土遺物を多量に包含し、それらは完形品やそれに近いもの、また「丶」などの墨書きを含むなど興味深い点が多い。SD7478は、緩やかに弧線を描くように見えるものの、その時期と位置、方向からみて方格地割成立期の南北道路の西側溝であったとみられる。しかし検出面で幅50cm程度の規模では斎宮寮全体の外郭を形成していたとは考えにくく、やはり斎宮駅北側地域も方格地割の一部であり、外郭はその外側に求められるものと考えられる。しかし、平安時代前期においてすら第78次調査区では方格地割以前の奈良時代古道に方向を揃えた掘立柱建物が検出されており、地割りの規制がルーズであることも判明している。

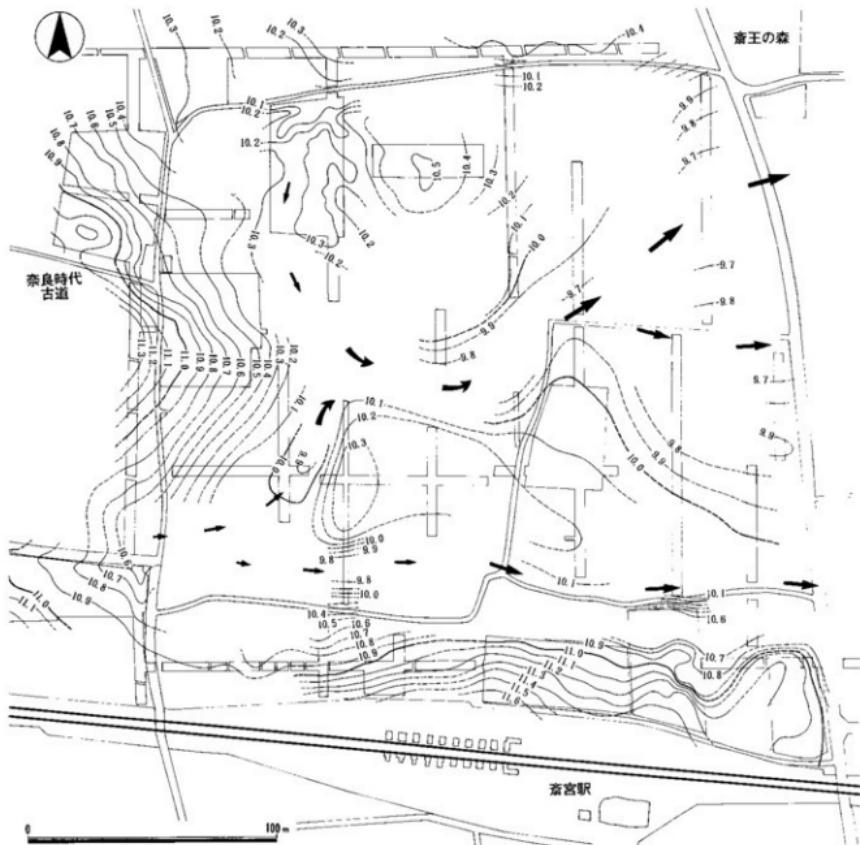
(2) 自然地形

次に遺構の状況や一帯の構造を考え、また、将来の史跡整備に資する基礎データとするためにこれまでの調査の地山面高をもとに周辺の微地形について試案を作成した(第20図)。等高線は10cm間隔で、粘土採取跡などの攪乱部分はある程度の地山高が残る地区以外はデータとしていない。これによる斎宮駅北側の微地形は、第111次調査でいえばEトレンチの南を通り、Fトレンチの北区と南区の間を抜け、Hトレンチの北側から「斎王の森」の南に続くとみられる谷筋と、それに準じる規模とみられるDトレンチの南半を通り、G, Iトレンチの南を抜ける谷筋が想定される。これに挟まれるようにしてDトレンチ北半から第78次調査区に向かって、比高にして最大30cm~40cm程度の微高地が残る。この部分は旧畠地で、現況では周囲より50cm~60cmは高くなっているが、Dトレンチの断面観察から地表面下約45cmまで盛土していることが判明しており、かつてはより高低差の少ない地形であった事が窺われる。なお第47次調査区のあるエリア西側や内山地区のあるエリア南側は約2%と先述の谷筋に向ってやや傾斜

があり、主に標高10.5m以上で遺構が比較的分布している地区である。黒ボク系の土壌は第47次調査区や第82次調査区といったエリア北西部から認められ、第111次調査Dトレーナなどのエリア中央部にかけて分布している。史跡東部の低位地にかなりの範囲で分布していることから考えると、斎宮駅北側でも本来はかなり広域に分布していたものが、低位のものは後世の削平あるいは流失により無くなっているのではないかと考えられる。実際谷筋と想定した付近では、ほぼ大過なく瓦粘土採取の破壊・擾乱を受けたり水田造成のための削平を受けており、地形本来の排水問題に加えて人工的な改変による遺構の破壊で、基本的には遺構が認められない部分となっている。

(3) 遺構の分布・残存状況

以上の成果により、斎宮駅北側では先述の微地形上の谷筋の東半では後世の破壊により、西半でもその地形的条件により遺構が全くないか、あるいは密度が極めて希薄

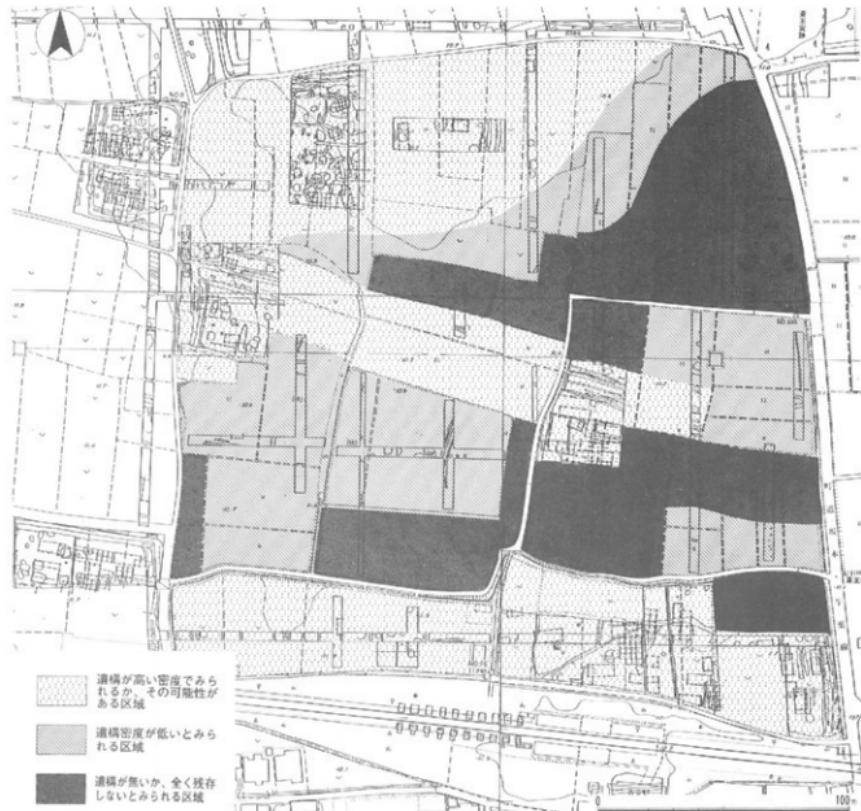


第20図 宮ノ前・上園地区周辺 微地形図(1:2,000)

であることが判明した。遺構密度が高いのは近鉄線に接する内山地区の微高地、第78次調査など奈良時代古道周辺、第49次調査区や第82次調査区など現在既に芝生広場となっている部分に限られる。こうした現在推定される状況を整理して第21図に示したが、今後の調査によっても補正されるべきものである。

また、遺構が良好に遺存する地域でも、内山地区では平安時代初期においては方格地割に棟方向を揃えた大型掘立柱建物が並び、平安時代中期～後期にかけてこの方向を踏襲した溝や生垣が見つかっており、史跡東部の方格地割中心部との関連を強く持ったエリアと言えるが、これより以北では平安時代前期からこの原則が崩れ、平安時代中・後期から鎌倉時代にかけても建物配置の規則性が窺われず、中世墓等が作られるようになるエリアであり、方格地割の縁辺地的な性格を持ち続けたのではないかと考えられる。こうした課題解決のために、今次調査の成果を受けて遺構の分布が想定される地点を中心に補足調査が行われることが期待される。

(大川勝宏)



第21図 宮ノ前・上園地区周辺 遺構分布状況図 (1:2,000)

IV 第112次調査

6 A C B-B(塚山地区)

1 はじめに

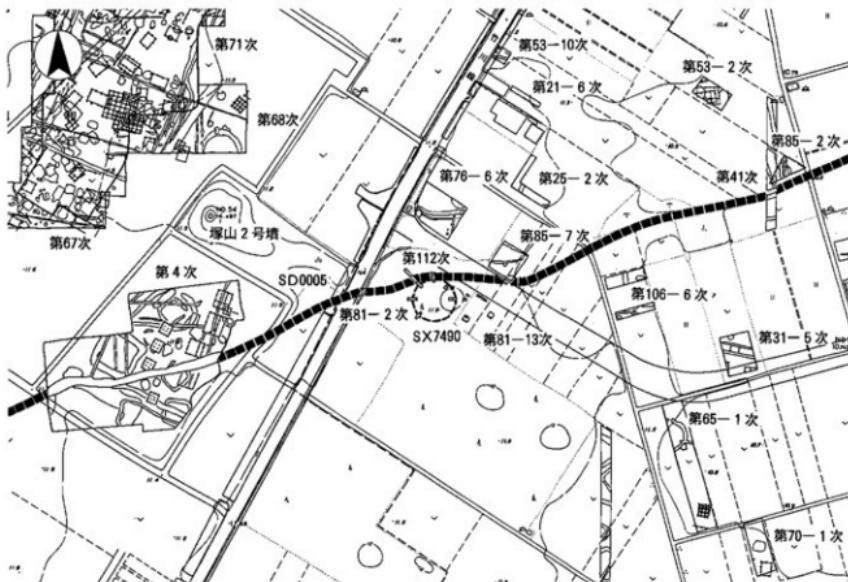
目的

第112次調査は、史跡環境整備に関わって、塚山3号墳及び鎌倉時代大溝の規模・形状・時期等を確認することを目的としたトレンチ調査である。今回の調査地は、史跡北西部、塚山地区で博物館入口付近の県道南藤原竹川線と町道塚山線(通称「歴史の道」)の交差点南東角に位置し、現況は山林で斎宮字塚山3276-15他にあたる。今回調査対象となる塚山3号墳も、分布調査及び発掘調査で確認されたこの地域に所在する古墳時代後期を中心とする塚山古墳群に属するものと考えられる。また、博物館南部の古里地区から史跡北辺を巡り、史跡東端のエンマ川まで続くとみられる所謂鎌倉時代大溝がこの地内を通過することも平成元年度第81-2次調査、平成2年度第85-7次調査等から予想された。

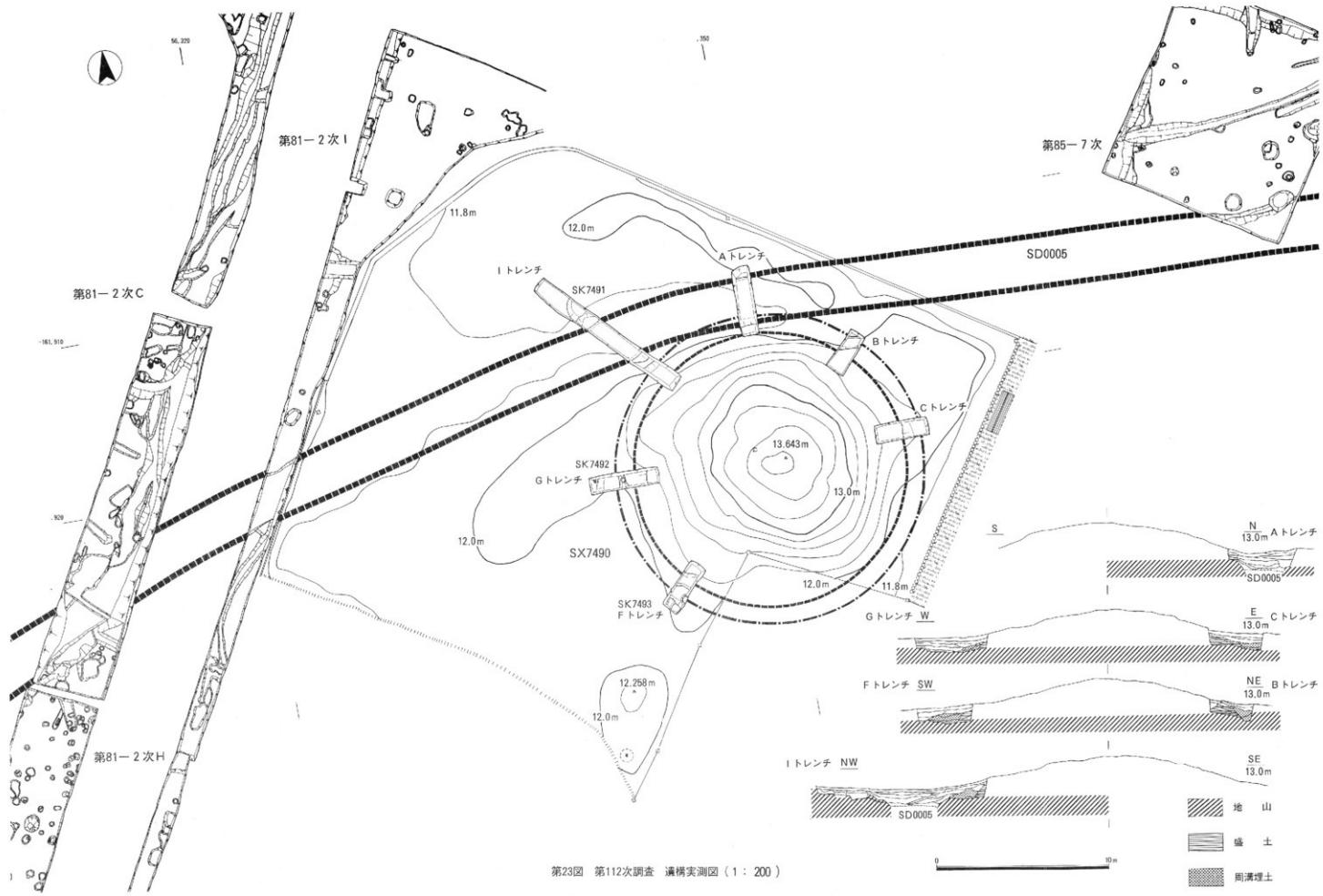
(1) 調査前の現況

塚丘

調査前の現状では、塚山3号墳は北西斜面でやや土砂が流出しているが、墳丘の裾周りとみられる標高12mの等高線付近では直径15m~16mであり、墳頂部とみられる標高13.2mの等高線付近では直径5m~6mの平坦面が認められる。墳丘最頂部の標高は13.6mで裾部までの比高差は約1.6mである。また、この古墳の北西裾部に接して幅3m~4mで溝状の浅い溝みが南西から北東に続くことから鎌倉時代大溝が想定される。なお、塚山3号墳の南西では径3m程度で高さ約30cmの墳丘状の高まりがみら



第22図 第112次調査 調査区位置図 (1:2,000)



第23図 第112次調査 漢構実測図 (1 : 200)

れたが、土地所者によるとこの場所には現在使用していない井戸が残っており、この掘削に際し排出された土砂によるものと考えられる。

(2) トレンチの設定

調査区設定

このような地形の特徴を考慮して、墳丘斜面から裾部の外方に向け国土座標にあわせ東西南北及びその中間方向へ放射状に幅約1mのトレンチを9箇所設定し、北方向をAトレンチとして時計回りにトレンチ番号を付けた。しかしながら、樹木等の伐採が困難となつたため、長短6箇所(A、B、C、F、G、Iトレンチ)のみの調査にとどまった。トレンチの長さはIトレンチの約10mを除いて3m~4mであり、地山面までの深さは0.6m~1mである。なお、最終的な調査面積としては、25m²である。

2 遺構

(1) 古墳時代の遺構

SX7490

(塚山3号墳)

各トレンチにおいて、地山(黄橙色土)まで掘り下げて土層断面を観察した結果、地山上層で墳丘盛土とみられる黒褐色土の堆積が認められ、Bトレンチでは盛土断面として厚さ10cm前後の土層が5層確認された。また、地山をさらに深く掘り込んだ部分は周溝と考えられるが、Aトレンチを除く各トレンチで、埋土として暗褐色土の堆積がみられた。周溝掘形の内肩を検出した箇所を平面図上で結ぶと墳丘裾部は直径16m前後の円形を呈するものと考えられる。

さらに、周溝掘形の外肩は他の遺構や擾乱によって切られ不明瞭であったが、C、F、Iトレンチ等で地山面がわずかにたちあがる部分が見られることから周溝幅は少なくとも1m以上あるものと思われる。したがって、塚山3号墳は周溝の外側まで含めて直径約18mの円墳が想定される。

(2) 鎌倉時代の遺構

SD0005

(大溝)

A、Iトレンチでは、遺構検出面で溝幅約3mの大溝が検出された。溝埋土はにぶい黄褐色土を呈するが、溝の深さはこれまでの調査結果から3m前後に及ぶものと予想されるため、20cm程度掘り下げたのみである。この大溝はSX7490の墳丘裾部の北辺をわずかに切っており、調査区外へさらに延びるものと考えられる。

(3) 時期不明の遺構

SK7491

Iトレンチ内でSD0005に切られる土坑と考えられ、全体規模は不明であるが、掘形の平面形がやや丸みを持つことから径2m程度で円形状を呈するものと思われる。埋土は黒褐色粘質土だが、遺物の出土はなかった。

SK7492

Gトレンチ内で掘形の一部を検出したが、SX7490の周溝部分と重複するため規模・形状等は不明である。埋土としては底部ににぶい黄褐色砂質土が堆積し、上層には墳丘盛土の流出土とみられる黒褐色土が混入し、遺物には円筒埴輪片が含まれる。

	遺構の種類			
	S	X	S	D
古墳時代	7	4	9	0
鎌倉時代			0	0
時期不明			7	4
			9	1
			7	4
			9	2
			7	4
			9	3

第6表 第112次調査 時期別遺構分類表

Fトレンチ内で掘形の一端をわずかに確認したものだが、土層断面ではこの土坑埋土がS X7490の周溝埋土を切っていることが判明した。埋土は暗褐色の粘質土で、出土遺物はまったくみられなかった。

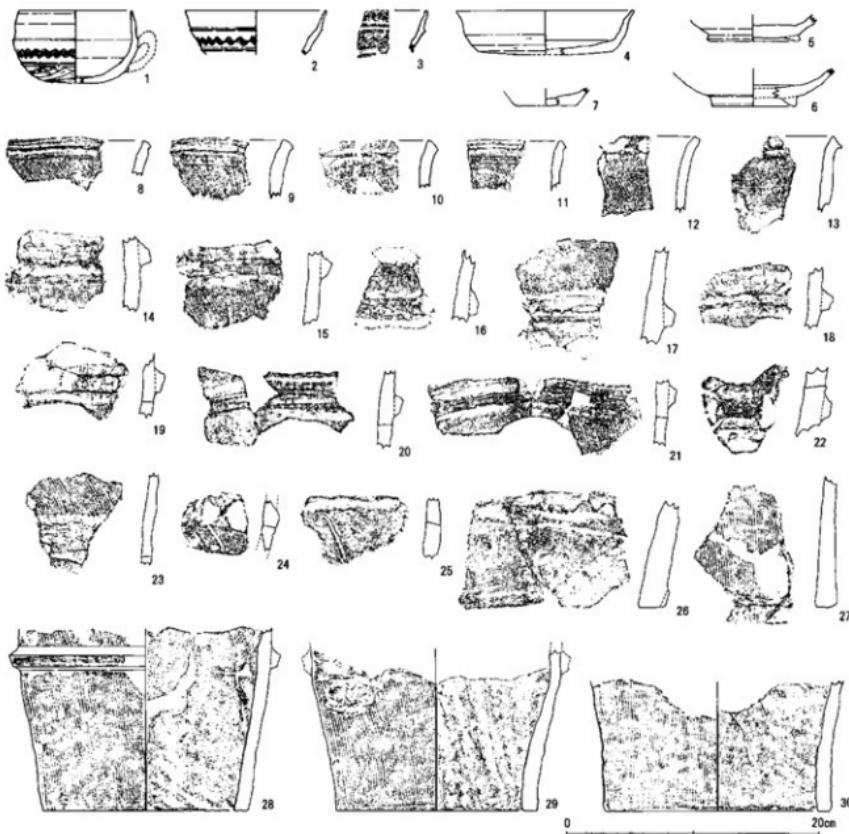
3 遺物

トレンチ内の出土遺物としては、墳丘の流出土とみられる黒褐色土を中心に遺物整理箱で2箱出土した。その大半は円筒埴輪片であるが、形象埴輪の一部とみられる破片も7点ある。それ以外では須恵器・土師器・山茶椀等の土器片がわずかにみられる。

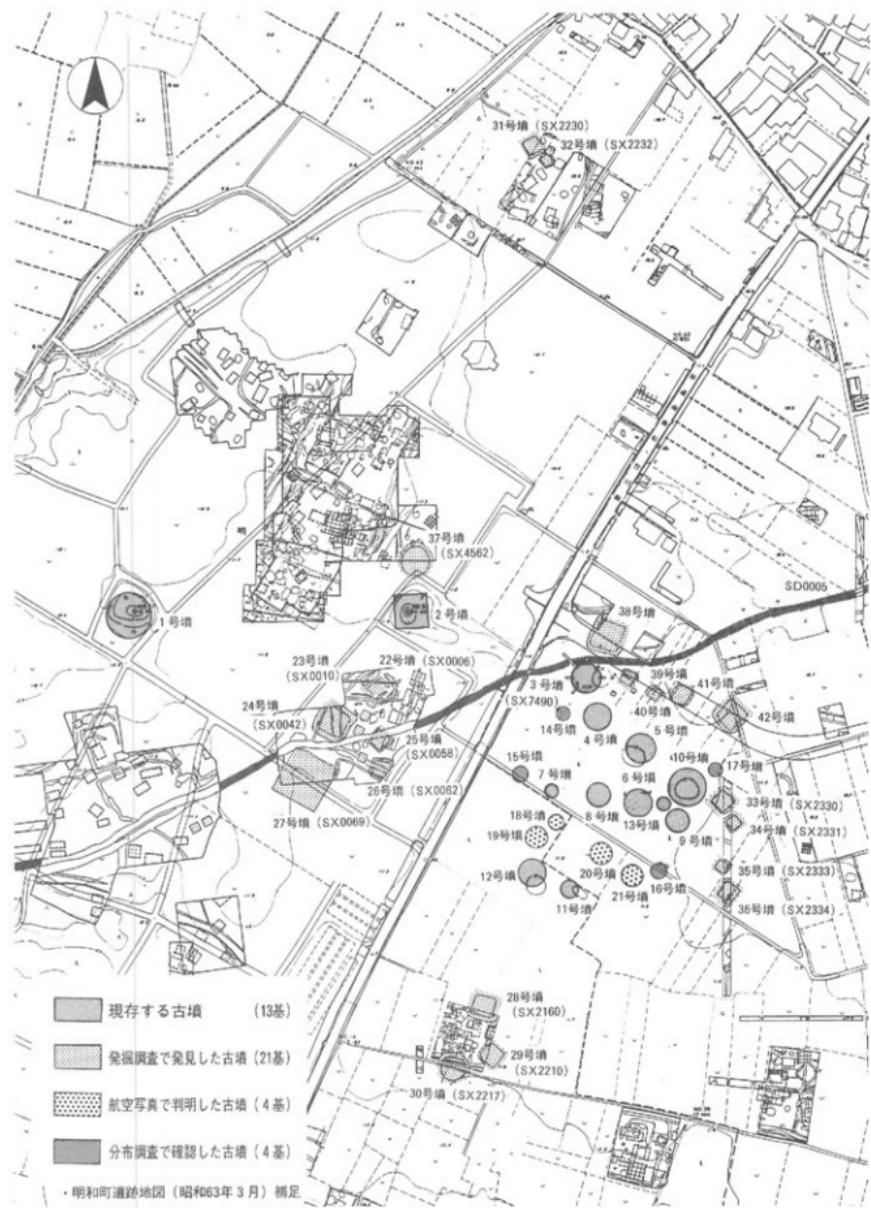
須恵器

(1)は須恵器把手付椀と考えられる破片で4点出土したが、実測図から復元すると推定口径9.0cm、器高5.8cm、体部には波状紋が施され、底部はヘラケズリによる調整である。(2・3)はいずれも須恵器直口壺の口縁部とみられる破片で、(2)は推定口径11.2cmを測る。これらは5世紀末葉～6世紀前葉のものと考えられる。

(4)は口径14.2cm、器高3.5cmの須恵器杯で、底部には丁寧なロクロケズリが施さ



第24図 第112次調査 遺物実測図



第25図 第112次調査 塚山古墳群分布図 (1 : 2,500)

れ7世紀後半のものと考えられる。(5・6)は山茶椀、(7)は山茶椀小皿で、いずれも底部の破片である。12世紀末葉～13世紀前葉に属するものと考えられる。

円筒埴輪

出土した円筒埴輪はいずれも破片で器面はかなり剥離・磨耗したが多く、その中で比較的残りの良いものを概述すると、色調は橙色～黄褐色で胎土には細かい石粒を含んでいるものが多い。焼成はやや硬質だが、黒斑が残るものはみられなかった。

(8～13)は口縁端部片で、端部をヨコナデし、外面はタテハケ、内面はヨコハケである。(14～25)はタガ部付近の破片で、タガ幅2cm前後、高さ0.7cm～1.0cm、断面形は偏平な「M」字状を呈するものが多い。(19～25)は透孔が残るものであり、推定5cm前後のものが多いが、(20)は径約11cmと大型である。また、(24・25)にはヘラ記号が見られる。(26～30)は基底部片で、(28)は基底部口径16.2cm、第1段のタガまでの器高11.3cm、器厚1.1cm前後である。タガの断面形は偏平な「M」字状を呈し、タガ幅1.8cm、高さ0.7cmである。器面の調整は外面タテハケ、内面指オサエ・ナデである。6世紀前葉のものと考えられる。

4まとめ

(1) 塚山3号墳

今回の調査は、古墳の規模・形状等の確認を主たる目的としたものであり、墳丘は裾部で直径16m前後を測り、墳丘は盛土による築造であった。墳丘の高さは築造当時の基盤になる地山高が標高11.2m～11.5mとなることから少なくとも2m以上はあったものと思われる。周溝は他の遺構との重複で明確ではないが、溝幅は少なくとも約1mはあり、この周溝部分を含めて直径約18m程度の円墳と考えられる。また、この古墳に伴うと考える遺物としては、円筒埴輪・須恵器片が出土しており、築造時期は5世紀末葉～6世紀前葉と考えられる。今回では主体部の調査は行なわなかったが、これまで発掘を実施した塚山古墳群に属する古墳の調査成果等から石室の可能性は極めて薄いものであり、主体部は木棺直葬と考えられる。

(2) 鎌倉時代大溝

大溝については、本調査地の隣接地において遺構の存在がある程度わかっており、この調査地内のどの辺りで確認できるかが最大の目的であった。調査の結果、溝幅は3m程度であり、塚山3号墳の墳丘裾北辺部をわずかに切りながら続くことが判明し、当初予想した大溝の規模・通過範囲はほぼ同じであったといえよう。鎌倉時代大溝は史跡西部の古里地区から北上し、今回の調査地を含む塚山地区辺りから東へ大きくカーブしながらさらに東側へ伸びている。これまでの調査成果から、塚山古墳群の範囲において各古墳が削平される時期は不明だが、塚山26・27号墳では墳丘をできるだけ避けるかのような状況がみうけられる。すなわちこの溝の掘削が行われる際には、墳丘がかなり残存していたものと考えられ、塚山3号墳を含め、これらの古墳は大溝を掘削するにあたって目標事物であった可能性も伺われる。また、今回の調査では溝底まで完掘することはできず、その時期については明確ではないものの、溝上面では山茶椀・土師器片がわずかにみられる。

（野原宏司）

掘立柱建物・柵列一覧表

遺構番号	規 模	棟方向	桁 行 (m)	梁 行 (m)	柱間寸法 (m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		

第109次調査 (6 A F L - D · E)

S B7375	(3)×3	N 4° W	(6.0)	5.4	2.0	1.8	平安 初期	
S B7385	(2)×-	E 4° N	(6.0)	—	3.0	—	タ	SAの可能性あり
S A2075	(8)	E 4° N	(23.7)		2.96		タ	44次SB7305～SA7150が接続、SB～SA
S B7380	5×2	N 4° W	12.0	4.8	2.4	2.4	平安前 I 期	
S B7381	5×2	N 4° W	12.0	4.8	2.4	2.4	タ	S B7380より古
S B7382	5×2	N 4° W	12.0	4.8	2.4	2.4	タ	S B7382より古、S B7390とは併存不可能
S B7390	5×2	E 4° N	12.0	5.4	2.4	2.7	タ	
S B1430	5×2	E 4° N	12.0	5.4	2.4	2.7	タ	西庇出3.0m、南庇出3.2m、南庇は29次で検出、南庇はSAの可能性あり
S A7370	5×2	E 4° N	12.0	5.4	2.4	2.7	タ	西庇出2.7m
S A7400	(11)	N 3° W	(33.0)		3.0		タ	
S A6780	(8)	E 4° N	(23.5)		2.94		平安前 I ~ II 期	98次(15間)から106-3次(6間)までの総長40間・117.6m
S B7410	5×2	N 4° W	12.0	4.8	2.4	2.4	平安前 II 期	東庇出2.7m
S B7411	5×2	N 4° W	12.0	5.4	2.4	2.7	タ	北庇出2.7m、S B7410より古
S B7412	5×2	N 4° W	12.0	6.0	2.4	3.0	タ	東庇出2.7m、S B7411より古
S B7395	(3)×(1)	E 4° N	(7.2)	(2.7)	2.4	2.7	タ	
S B7415	(1)×2	N 4° W	(1.8)	3.6	1.8	1.8	タ	
S B2700	5×2	N 4° W	10.5	4.6	2.1	2.3	タ	44次で検出
S B7405	5×2	N 4° W	15.0	4.6	2.1	2.3	タ	東庇出2.7m、S B2700より古
S B7170	(11)	N 4° W	(32.3)		2.94		タ	105次からの検出長23間・67.6m
S B7373	-×2	N 4° W	—	4.4	—	2.2	平安 前期	
S B7372	3×-	N 5° W	6.3	—	2.1	—	平安 中期	
S B7374	(1)×2	E 5° N	(1.6)	4.0	1.6	2.0	タ	
S B1431	4×2	N 2° W	7.2	3.8	1.85	1.9	平安後 I 期	29次で検出
S B7371	-×2	E 2° N	—	4.8	—	2.4	時 期 不 明	

第111次調査 (6 ADM · 6 ADK · 6 ADL)

S B7435	3×(1)	N 0° S	6.3	(2.1)	2.1	2.1	平安後 I 期	A.T S B7437より古
S B7437	(1)×2	E 0° W	—	2.4	2.4		タ	A.T 緩柱建物
S A7441	(6)	E 0° W	(13.2)		2.2		時 期 不 明	B.T
S B7457	-×2	E 5° N	—	3.6	—	1.8	タ	D.T 北面庇あり?
S A7472	(1)	E 0° W	(1.5)		1.5		平安 後 期	F.T
S A7473	(1)	E 0° W	(1.6)		1.6		タ	F.T
S B5276	3×2	E 1° S	5.7	3.4	1.9	1.7	平安 中 期	G.T

豊 穴 住 居 一 覧 表

遺構番号	規 模 (m)	長軸方向	深さ (m)	柱 穴	カマド	時 期	備 考
------	---------	------	--------	-----	-----	-----	-----

第111次調査 (6 ADM · 6 ADK · 6 ADL)

S B7440	2.0×2.2	N 4° E	8	—	東 迂	奈良中～後	B.T
S B7445	2.3×3.0	N 1° W	32	○	東 迂	奈良 中 期	B.T
S B7465	4.4×4.4	N 8° E	30	—		奈良 後 期	D.T

遺物（土器）観察表

第109次調査

No.	出土遺物	目 標	出 墓	調査・技術的特徴	地 士	焼 成	色 質	残存度	備 考	量産番号	
1	SK7430	土 瓶 置	(口径)13.0cm (底高) 3.0cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃	良好	内：櫻 外：西黄復	2.5YR 7/8 7.5YR 8/6	口縁一部欠損	R113	
2	SK7430	土 瓶 置	(口径)13.0cm (底高) 3.0cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃	良好	内：櫻 外：西黄復	5YR 7/8 5YR 7/6	ほぼ完形	R98	
3	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.2cm (底高) 3.0cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃	良好	内：櫻 外：西黄復	5YR 7/8 10YR 7/6	完形	R96	
4	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.5cm (底高) 3.0cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃	良好	内：櫻 外：#	2.5YR 6/8 #	底部一部に黒斑あり	R108	
5	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 3.1cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃	良好	内：実 外：実底	10YR 8/6 5YR 8/6-根 7.5YR 7/8	完形	R100	
6	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.3cm (底高) 3.1cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃、難燃砂わ ずかに含む	良好	内：櫻 外：#	SYR 7/8 7.5YR 6/8	完形	R101	
7	SK7430	土 瓶 置	(口径)13.0cm (底高) 3.0cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部一定方向のナギ	難燃、黑色粒子含む	良好	内：櫻 外：#	SYR 6/8 SYR 7/8	95% 内面にスミ付着	R95	
8	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.1cm (底高) 3.2cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃	良好	内：赤 外：# (一部外面部：黄復)	10R 6/8 # 7.5YR 7/8	ほぼ完形	口縁部2.7cmにわたり スミ付着	R107
9	SK7430	土 瓶 置	(口径)13.0cm (底高) 3.4cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃	やや不良	内：黄復 外：黄復	7.5YR 7/8 7.5YR 8/8	口縁一部欠損	R99	
10	SK7430	土 瓶 置	(口径)15.0cm (底高) 3.0cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部一定方向のナギ	難燃、ナリ織 難燃、ナリ織	良好	内：櫻 外：#	SYR 6/8 #	口縁一部欠損 内面スミ付着	R94	
11	SK7430	土 瓶 置	(口径)15.0cm (底高) 3.5cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部オサエナギ	難燃	良好	内：櫻 外：# (底部中央一部：櫻)	SYR 7/6 10YR 8/4	ほぼ完形	内外面とも一部スミ付着	R104
12	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 3.6cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃	良好	内：櫻 外：黄復	2.5YR 7/8 7.5YR 8/6	約65%	R109	
13	SK7430	土 瓶 置	(口径)16.0cm (底高) 3.5cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部オサエナギ	難燃	良好	内：櫻 外：#	SYR 6/6 #	完形	R105	
14	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 2.9cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃	良好	内：櫻 外：# (底端7.5cm)	2.5YR 7/8 10YR 8/6	完形	R110	
15	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 3.5cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃	良好	内：櫻 外：黄復	7.5YR 7/8 7.5YR 4/1	完形	R89	
16	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 3.1cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃	良好	内：櫻 外：# #	2.5YR 7/8 2.5YR 8/4	ほぼ完形	R111	
17	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 2.9cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃	良好	内：櫻 外：# #	2.5YR 6/8 7.5YR 8/6	約50%	R112	
18	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 3.2cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃、難燃な 部分含む	やや不良	内：実 外：櫻	7.5YR 7/8 7.5YR 7/6～10YR 7/3	約70% 奥表面の腐耗者しい	R93	
19	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 3.8cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部一定方向のナギ	難燃、難燃な 部分含む	良好	内：櫻 外：# #	SYR 7/8～櫻 SYR 6/8	一層厚みあ るが完形	R92	
20	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 3.0cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部オサエナギ	難燃	良好	内：櫻 外：# #	2.5YR 7/6 SYR 7/6～10YR 8/4	口縁部一部を欠くが 完形	R106	
21	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 3.3cm	口縁部ヨコナギ、外面部ナギ、内面部ナギ	難燃、難燃な 部分含む	やや不良	内：實 外：#	10YR 8/6 #	約95%	R87	
22	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 3.5cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃、金葉片自 然	良好	内：櫻 外：#	SYR 7/8～櫻 SYR 6/8～明黄復 10YR 7/6	完形 内外面一部にスミ付着 外側の隙間に隙孔あり (焼成歴か？)	R90	
23	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 3.7cm	口縁部ヨコナギ、外面部ナギ、内面部ナギ	難燃、ナリ織 ナリ織	やや不良	内：櫻 外：#	2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	約95% 口縁部に粘土巻上げ 痕、底面残る	R83	
24	SK7430	土 瓶 置	(口径)15.0cm (底高) 3.6cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部オサエナギ	難燃、ナリ織 ナリ織	良好	内：櫻 外：#	7.5YR 7/8 7.5YR 7/6	約90% 外面底部スミ付着	R79	
25	SK7430	土 瓶 置	(口径)15.4cm (底高) 3.3cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃、ナリ織 ナリ織	良好	内：櫻 外：#	2.5YR 6/8 SYR 6/8	約75% 外面底部スミ付着	R85	
26	SK7430	土 瓶 置	(口径)13.0cm (底高) 3.4cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部一定方向のナギ	難燃、ナリ織 ナリ織	やや不良	内：櫻 外：#	SYR 7/8 7.5YR 7/6	約90% 外面底部スミ付着	R86	
27	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.5cm (底高) 3.6cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃砂含む、内 面ややさらづく	良好	内：明黄復 外：櫻	10YR 6/6 7.5YR 6/8	完形	R103	
28	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 3.1cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃砂含む 灰石	良好	内：櫻 外：#	SYR 7/8 7.5YR 7/8	完形	R97	
29	SK7430	土 瓶 置	(口径)13.0cm (底高) 3.4cm	口縁部ヨコナギ、外面部ナギ、内面部ナギ	難燃、ナリ織 ナリ織	やや不良	内：明黄復 外：明黄復	10YR 7/6～ 10YR 8/6 7.5YR 7/8	約95% 外面スミ付着痕、粘土巻 上げ残る	R88	
30	SK7430	土 瓶 置	(口径)14.0cm (底高) 3.4cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサエ後ナギ、内面部ナギ	難燃	良好	内：櫻 外：#	7.5YR 7/6 10YR 8/6	内面に黑色粒子多量につ く	R80	

No	出土遺物	形 種	出 し 量	調査・洗生の特徴	粘 土	焼 成	色 調	残存度	備 考	登録番号
31	S K7430	土 備 釜	(口径)14.0cm (底高) 3.5cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ	微細砂含む	やや不良 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 7/8 SYR 3/8	真面・口縁部一部欠損		R102
32	S K7430	土 備 釜	(口径)14.0cm (底高) 3.8cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部オサニ後ナグ	焼結、クリア繊維・變態な粘土質	良好 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 7/8 SYR 3/8	約50%		R84
33	S K7430	土 備 釜	(口径)14.0cm (底高) 3.5cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部オサニ後ナグ	焼結、黒褐色粒子・黒褐色粘土質	良好 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 7/8 SYR 3/8	約97% 内外壁底部にスミ付着		R91
34	S K7430	土 備 釜	(口径)15.8cm (底高) 3.6cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部オサニ後ナグ	焼結、微細な黒褐色粒子含む	良好 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 7/8 SYR 4/1	約70%		R81
35	S K7430	土 備 釜	(口径)15.0cm (底高) 3.4cm	口縁部ヨコナギ、外面部ナグ	焼結、微細な黒褐色粒子含む	良好 内: 黄褐色 外: 黄	SYR 7/8	約50%		R82
36	S K7430	土 備 釜	(口径)17.0cm (底高) 3.5cm (台高) 1.0cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部オサニ後ナグ、内面部一定方向のナグ	焼結、クリア繊維・黃褐色粘土質	良好 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 7/8 SYR 6/8	約85% 内面部スミ付着		R44
37	S K7430	土 備 釜	(口径)16.0cm (底高) 3.4cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部ヨコナギ	焼結、クリア繊維・黑色粒子含む	良好 内: 黄褐色 外: 淡黄褐色	7-SYR 7/8 SYR 6/8	約70% 内面部部分的にスミ付着		R60
38	S K7430	土 備 釜	(口径)14.0cm (底高) 1.8cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部一定方向のナグ	焼結、クリア繊維・黑色粒子含む	良好 内: 黄褐色 外: 淡黄褐色	7-SYR 8/8 SYR 7/8	約80%病		R62
39	S K7430	土 備 釜	(口径)16.4cm (底高) 2.0cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部一定方向のナグ	焼結、クリア繊維・黑色粒子含む	不良 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 7/8 SYR 7/6	完形		R64
40	S K7430	土 備 釜	(口径)20.1cm (底高) 2.4cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部一定方向のナグ	焼結、0.2mmの大粒の砂粒・黒色粒子含む	良好 内: 黄褐色 外: 黄	SYR 7/8 SYR 7/6	約90%		R59
41	S K7430	土 備 釜	(口径)15.8cm (底高) 1.9cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部ナグ	焼結、クリア繊維・黑色粒子含む	良好 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 8/8 SYR 7/8	口縫完形・口縁部一部欠損		R66
42	S K7430	土 備 釜	(口径)16.0cm (底高) 2.6cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部ナグ	焼結、クリア繊維含む	不良 内: 黄褐色 外: 黄	SYR 7/8	約70% 内外面とも黒帯の剥離有り		R24
43	S K7430	土 備 釜	(口径)15.6cm (底高) 2.3cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部不定方向のナグ	焼結、黄褐色粘土質	良好 内: 黄褐色 外: 黄	SYR 7/8	約65%		R19
44	S K7430	土 備 釜	(口径)14.6cm (底高) 1.5cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部ナグ	焼結、微細な黒褐色粒子含む	良好 内: 黄褐色 外: 黄	SYR 7/8	約60%		R14
45	S K7430	土 備 釜	(口径)14.8cm (底高) 1.8cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部ナグ	焼結、5mmの大粒の小石含む	良好 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 8/8 SYR 7/8	ほぼ完形		R74
46	S K7430	土 備 釜	(口径)15.0cm (底高) 1.8cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部ナグ	焼結、クリア繊維含む	良好 内: 黄褐色 外: 黄	SYR 7/8 2-SYR 7/8	約90%		R42
47	S K7430	土 備 釜	(口径)14.8cm (底高) 1.7cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部ナグ	焼結、クリア繊維含む	良好 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 7/8 10SYR 8/6	約70%		R11
48	S K7430	土 備 釜	(口径)14.6cm (底高) 1.9cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部一定方向のナグ	焼結、クリア繊維・黑色粒子含む	良好 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 8/8 SYR 7/8	完形		R53
49	S K7430	土 備 釜	(口径)14.2cm (底高) 1.8cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ	粗粒、クリア繊維・黑色粒子含む	不良 内: 黄褐色 外: 黄	SYR 6/8 10SYR 7/4	約65%		R33
50	S K7430	土 備 釜	(口径)14.0cm (底高) 1.8cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後不定向のナグ、内面部ナグ	やや粗、0.1~1mmの大粒の砂粒・クリア繊維	良好 内: 黄褐色 外: 黄	SYR 7/8 SYR 7/6	約90%		R51
51	S K7430	土 備 釜	(口径)15.0cm (底高) 1.7cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部一定方向のナグ	焼結、クリア繊維・變態な粘土質	良好 内: 黄褐色 外: 淡黄褐色	7-SYR 7/8 7-SYR 7/6	約95%		R70
52	S K7430	土 備 釜	(口径)14.4cm (底高) 2.2cm	口縁部ヨコナギ、内面部一定方向のナグ	焼結、クリア繊維・黃褐色粘土質	良好 内: 黄褐色 外: 黄	SYR 7/8	完形 内外面にスミ付着あり		R23
53	S K7430	土 備 釜	(口径)14.4cm (底高) 1.8cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部ナグ	焼結、クリア繊維含む	やや不良 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 7/8	約55%		R32
54	S K7430	土 備 釜	(口径)14.4cm (底高) 1.8cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部ナグ	やや粗、クリア繊維・金属性の含む	良好 内: 黄褐色 外: 黄	SYR 7/8	約99% 内外面にスミ付着		R28
55	S K7430	土 備 釜	(口径)14.4cm (底高) 1.7cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部ナグ	焼結、クリア繊維・黃褐色粘土質	良好 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 7/6	約98%		R35
56	S K7430	土 備 釜	(口径)14.4cm (底高) 1.2cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ	焼結、クリア繊維・黑色粒子含む	良好 内: 黄褐色 外: 黄	2-SYR 6/6 7-SYR 8/8	約60%		R2
57	S K7430	土 備 釜	(口径)14.4cm (底高) 1.7cm	口縁部ヨコナギ、内面部一定方向のナグ	焼結、クリア繊維・黃褐色粘土質	良好 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 8/6	ほぼ完形 外側表面の剥離有り		R57
58	S K7430	土 備 釜	(口径)14.8cm (底高) 2.0cm	口縁部ヨコナギ、内面部一定方向のナグ	焼結、クリア繊維・黃褐色粘土質	良好 内: 黄褐色 外: 淡黄褐色	7-SYR 7/6 7-SYR 6/6	完形 内外底底部にスミ付着		R43
59	S K7430	土 備 釜	(口径)14.8cm (底高) 2.0cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部ナグ	焼結、黒褐色粒子含む	やや不良 内: 黄褐色 外: 黄	2-SYR 6/6 2-SYR 6/4	ほぼ完形 やや形がゆがむ		R76
60	S K7430	土 備 釜	(口径)14.9cm (底高) 1.7cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部ナグ	焼結、クリア繊維・黃褐色粘土質	良好 内: 黄褐色 外: 黄	7-SYR 7/8 SYR 7/6	完形 外側底部にスミ付着		R37
61	S K7430	土 備 釜	(口径)14.4cm (底高) 1.8cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ、内面部ナグ	焼結、クリア繊維・黃褐色粘土質	不良 内: 黄褐色 外: 黄	SYR 6/8	約95% 内部の剥離剝離有り		R26
62	S K7430	土 備 釜	(口径)15.6cm (底高) 2.0cm	口縁部ヨコナギ、外面部オサニ後ナグ	焼結、クリア繊維・黃褐色粘土質	良好 内: 黄褐色 外: 黄	SYR 7/8	約90% 内面部に爪痕多く残る		R38

No.	出土遺物	器種	法量	形状・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
63	SK7430	土器	(口径)15.0cm (底面)2.0cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ 二方向のナガテ、内腹一定 横幅、厚さ約2.0mm	良好 内: 棕 外: ベ	2.SYR 6/8 5TR 6/8	約90%	完形	R67	
64	SK7430	土器	(口径)14.0cm (底面)2.4cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ 二方向ナガテ、内腹ナゲ 横幅、細粒ナゲ苗台片 含む	良好 内: 棕 外: 棕	SYR 7/8 5TR 6/8	約70%		R46	
65	SK7430	土器	(口径)15.0cm (底面)2.3cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: 棕 外: ベ	2.SYR 6/8 5TR 6/8	ほぼ完形		R78	
66	SK7430	土器	(口径)14.8cm (底面)2.3cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	やや不良 内: 棕 外: 棕	SYR 6/8 5TR 6/8	約90%		R56	
67	SK7430	土器	(口径)15.2cm (底面)2.3cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	やや不良 内: 棕 外: 棕	SYR 7/8 5TR 6/8	約90%	内腹の器表剥落のため 調整不明	R17	
68	SK7430	土器	(口径)15.0cm (底面)2.3cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: 棕 外: ベ	2.SYR 7/8 内外底底: にぶい黄褐色 10YR 7/4	完形	外面にスミ付着	R40	
69	SK7430	土器	(口径)15.0cm (底面)2.3cm	口縁部ヨコナギ、内腹不定方向の ナゲ	良好 内: 棕 外: ベ	10YR 7/6 5TR 6/8	光形		R25	
70	SK7430	土器	(口径)16.0cm (底面)2.0cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹不定方向の ナゲ	良好 内: ベ 外: ベ	10YR 7/4～8 SYR 7/8	約85%		R27	
71	SK7430	土器	(口径)16.4cm (底面)2.0cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹不定方向の ナゲ	良好 内: 棕 外: ベ	SYR 7/8 5TR 6/8	約90%		R3	
72	SK7430	土器	(口径)15.6cm (底面)1.5cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹不定方向の ナゲ	良好 内: 棕 外: ベ	SYR 6/8 5TR 6/8	約97%	内面に焼きくくれあり	R21	
73	SK7430	土器	(口径)15.2cm (底面)2.2cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: 棕 外: ベ	SYR 6/8 5TR 6/8	完形		R58	
74	SK7430	土器	(口径)14.6cm (底面)2.2cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: 棕 外: ベ	内外～縦外壁: 棕 内外底底: 棕 5TR 7/6	約99%	内外面ともスミ付着	R45	
75	SK7430	土器	(口径)16.8cm (底面)6.8cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹調和不規 ナゲ	やや不良 内: 棕 外: 黄褐色	10YR 8/6 10YR 7/6	口縫のL/3		R115	
76	SK7430	土器	(口径)16.0cm (底面)20.7cm	口縁部ヨコナギ、外腹ハ ベケツ、内腹ケツリ	良好 内: 棕 外: ベ	10YR 8/4 5TR 6/4	約80%		R114	
77	SK7430	須恵器	(口径)12.6cm (底面)7.3cm (高さ)7.8cm	口縁部、側面ヨコナギ、 外腹底底ハラウタ(横縫合) 内腹底底ハラウタ(横縫合) 底部詰合時のナゲ	良好 内: 棕 外: ベ	7.5Y 6/1 5Y 6/1	約95%	やや口縫部やがむ	R116	
78	SK7430	灰陶器	(口径)12.6cm (底面)4.6cm (高さ)6.0cm	口縁部、底部ヨコナギ、 外腹底底ハラウタ(横縫合) 底部詰合時のナゲ	良好 内: オーライブ 外: 白灰	7.5Y 6/2 5Y 7/2	約70%	やや軽く剥離し、粘付ナゲ 有るが他の部分で無理、口縫 は詰合せあり	R117	
79	SK7430	灰陶器	(口径)15.7cm (底面)6.2cm	口縁部、底部ヨコナギ、 外腹下部ヨコタケリ	良好 内: 淡黄 外: 白灰	SY 7/3 SY 8/2	約30%	内腹底底ハケヌリ? 内腹 底底有り、高台に重ね敷 有り	R118	
80	SK7430	灰陶器	(口径)19.7cm (底面)3.9cm 外腹下部ヨコタケリ	口縁部、腰部ヨコナギ、 外腹下部ヨコタケリ	良好 内: 淡灰 外: 淡灰	SY 8/2 2.5Y 7/2	約40%	口縫部～内腹底底ハケヌ リ?、少々自然剥離かがむ	R120	
81	SK7430	灰陶器	(口径)17.8cm (底面)5.2cm (高さ)7.6cm	体部ヨコナギ、外腹下部 ヨコタケリ、腰部ヨコナ ギ、底部ヨコタケリ	良好 内: 黄褐色 外: 淡灰	SY 7/2 2.5Y 7/2	約30%のみ 残り	内腹底底、高台に重ね敷 有り	R119	
82	SK7425	土器	(口径)16.0cm (底面)3.5cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: にぶい棕 外: 棕	7.5YR 7/4 2.5YR 8/4	約80%		R123	
83	SK7425	土器	(口径)14.3cm (底面)2.0cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: 棕 外: 棕	7.5YR 7/6～8 2.5YR 6/8	約90%		R130	
84	SK7425	土器	(口径)14.0cm (底面)2.0cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	やや不良 内: 棕 外: 棕	7.5YR 8/8 2.5YR 6/8	口縫一部欠損 表面のゆがみあり		R135	
85	SK7425	土器	(口径)13.6cm (底面)2.7cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: 棕 外: 棕	7.5YR 7/6 2.5YR 7/6	約65%	表面の剥離多い、口縫 周辺のみ1.8mm程でスス 付着	R121	
86	SK7425	土器	(口径)12.6cm (底面)2.2cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: 棕 外: 淡黄褐色	7.5YR 7/6 2.5YR 8/6	約45%	底部ゆがみあり	R128	
87	SK7425	土器	(口径)13.4cm (底面)2.2cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: 淡黄褐色 外: 棕	7.5YR 8/6 5TR 8/4	約60%		R132	
88	SK7425	土器	(口径)13.0cm (底面)2.6cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: 棕 外: 棕	SYR 7/6 5TR 8/4	約70%		R127	
89	SK7425	土器	(口径)13.8cm (底面)2.6cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: 棕 外: 淡黄褐色	7.5YR 8/4 10YR 8/4	約65%		R129	
90	SK7425	土器	(口径)13.0cm (底面)2.7cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: にぶい棕 外: 淡灰	SYR 7/4 5TR 8/4	約90%		R126	
91	SK7425	土器	(口径)14.4cm (底面)3.5cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹オサ後ナ ゲ	良好 内: 棕 外: ベ	10YR 6/8 5TR 7/4	完形、口縫 一部欠損		R122	
92	SK7425	土器	(口径)15.1cm (底面)2.7cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: 淡灰 外: 淡灰	7.5YR 7/4 2.5YR 8/8	口縫一部一 次欠損		R134	
93	SK7425	土器	(口径)15.0cm (底面)3.6cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: 棕 外: 淡灰	2.5YR 6/8 SYR 6/8	底部の一部 欠損		R133	
94	SK7425	土器	(口径)14.0cm (底面)3.4cm	口縁部ヨコナギ、外腹オサ エ後ナゲ、内腹ナゲ	良好 内: 棕 外: ベ	2.5YR 6/8 5TR 6/8	内外面とも器壁の剥離 多い		R131	

No	出土地	形 性	法 量	調整・技術の特徴	地 土	純 底	色 調	残存度	質 考	社證号
95	S K7455	土 磁 等	(口徑)14.7cm (底高)3.4cm	口縫部ヨコナダ、内面オサエナダ 内面オサエナダ	粘板、砂粗粒合 石	良好	内: 線 外: タ 口縫部一部: 黒	SYR 7/6 N 2/	約95%	R124
96	S K7455	土 磁 等	(口徑)15.7cm (底高)3.7cm	口縫部ヨコナダ、内面オサエナダ 内面オサエナダ	粘板	良好	内: 線 外: タ 口縫部一部: 黑	SYR 7/6 N 2/	約95%	R125
97	S K7455	黑色土磁 等	(口徑)19.6cm (底高)4.9cm	口縫部ナダ後ミガキ、外側 ヘラケズリ	粘板、留母片含 む	良好	内: 鮎灰 外: ヒイイ黄橙	N 3/ 10YR 7/4	口縫の1/12	R159
98	S K7455	土 磁 等	(口徑)13.3cm (底高)2.4cm	口縫部・体部ヨコナダ?	粘板	不良	内: 明褐 外: ヒイイ黄 修:	7.5YR 5/6 N 1.5/ 1/16	口縫のみ	R177
99	S K7455	土 磁 等	(口徑)12.0cm (底高)3.8cm	口縫部・体部ヨコナダ?	粘板	不良	内: 黄褐 外: ヒイイ黄 修:	7.5YR 6/8 N 1.5/ 1/16	接付土器 内面に接付層	R176
100	S K7455	黑色土磁 風土 等	(底高)6.6cm (底高)4.8cm	全面ミガキ	粘板、留母片含 む	良好	内: 黑 外: タ	N 1.5/ 欠損	断面あり、44次SK745 50cmと同一個体	R185
101	S K7455	藤田陶器 等	(底高)1.9cm (台高)6.2cm	内面ヨコナダ、外側追加ナダ、高台貼付 ヘラ切り後ナダ、高台貼付	粘板、白色粒子・ 留母片含む	やや灰黃	粘土: 灰白 輪: ヒイイナガ(←A(1.5-5)-625)	2.5Y 7/1 1/499	底面のみ	R141
102	S K7455	藤田陶器 等	(口徑)15.2cm (底高)3.7cm	内外面ロクロナダ	やや板	缺質	粘土: 黑褐 輪: ヒイイナガ(←A(1.5-5)-625)	SY 7/2 5-625	口縫のみ1/6	R139
103	S K7455	藤田陶器 等	(口徑)17.8cm (底高)3.2cm	内外面ロクロナダ、外側下 部にヨコナダ	粘板	缺質	粘土: 黑褐 輪: ヒイイナガ(←A(1.5-5)-625)	2.5Y 7/2 5-625	口縫のみ1/6	R140
104	S K7455	藤田陶器 等	(口徑)21.4cm (底高)4.5cm	内外面ロクロナダ	粘板	良好	粘土: 灰白 輪: ヒイイナガ(←A(1.5-5)-625)	SY 8/2 5-625	口縫のみ1/6	R148
105	S K7455	藤田陶器 等	(口徑)17.1cm (底高)6.8cm	口縫部ヨコナダ後フリーバ 内面ヨコナダ、外側追加ナダ、高台貼付 ヘラ切り後ナダ	粘板	缺質・良好	粘土: にぶい黄 輪: ヒイイナガ(←A(1.5-5)-625)	10YR 7/3 1/499	約55%強 106次 S D7154・30と同 一強度と思われる	R137
106	S K7455	青 瓦	(口徑)15.1cm (底高)2.8cm	口縫部ヨコナダ	粘板	堅韌	粘土: ヒイイ黄 輪: 黄褐	2.5Y 6/3 2.5Y 5/3	断面黒帯からクリヤー がみらわる。輪に無強度 のものと判定。内面無強度 のものと判定。	R191
107	S K7455	重 慈 墓 等	(口徑)43.0cm (底高)26.5cm (底高)13.6cm	内面ロクロナダ、外側下 部にヨコナダ、高台貼付 ヘラ切り後ナダ	最大直径248mm との比較を含む か強度	良好	内: 黑 外: 黄白	2.5Y 7/2 SY 8/1	約60%	R136
108	S K7455	瓦 附 等	(口徑)17.1cm (底高)11.1cm	口縫部ヨコナダ、内面ヨコナダ、 内面ヨコナダ、輪ヨコナダ	堅密	堅密	内: 線 外: タ	SYR 6/8 1/16	底面に直径8mmの穿孔 (強度記号)あり	R190
109	S K7455	土 磁 等	(口徑)12.8cm (底高)2.2cm	口縫部ヨコナダ、内面オサエ ナダ、内面ヨコナダ	やや板、長石、 留母片を含む	不良	内: 残黄褐 外: タ	10YR 8/ 1/16	口縫のみ1/6 外面に墨跡「?	R170
110	S K7455	土 磁 等	(口徑)13.0cm (底高)2.9cm	口縫部～内面ヨコナダ、外 側ヨコナダ後不規方の ヨコナダ	粘板、黑色粒子・ 留母片含む	良好	内: にぶい黄 外: ヒイイ黄 修:	10YR 7/2- 10YR 5/1 10YR 7/6	口縫のみ1/6 かた墨跡(判読不可)、 堅密大良あり	R171
111	S K7455	土 磁 等	(口徑)13.6cm (底高)2.4cm	口縫部～内面ヨコナダ、外 側ヨコナダ後ナダ、内面ヨコナダ (強度記号)あり	粘板	やや不良	内: 残黄褐 外: タ	10YR 8/4 1/16	内面に墨跡記号あり	R169
112	S K7455	土 磁 等	(口徑)11.6cm (底高)2.3cm	口縫部ヨコナダ、内面オサエ ナダ、内面ヨコナダ (強度記号)あり	粘板、タサリ織 修:	良好	内: 黑褐 外: 四葉編	10YR 8/6 10YR 7/6	約65%強 かな墨跡があるが判読不可	R173
113	S K7455	土 磁 等	(口徑)11.4cm (底高)1.9cm	口縫部ヨコナダ、内面オサエ ナダ、内面ヨコナ (強度記号)あり	粘板、タサリ織 修: 黑色粒子含む	良好	内: にぶい黄 外: 線	10YR 7/4 2.5Y 7/6	約65%強 かな墨跡があるが判読不可	R172
114	S K7455	土 磁 等	(口徑)10.0cm (底高)3.0cm	口縫部ヨコナダ、内面オサ エナダ、内面ヨコナダ (強度記号)あり	粘板、タサリ織 修: 黑色粒子含む	良好	内: 黑褐 外: 線	7.5YR 8/8 7.5YR 8/4	内外面ともにかな墨跡 あり	R174
115	S K7455	土 磁 等	(口徑)10.0cm (底高)2.1cm	口縫部ヨコナダ、内面オサ エナダ、内面ヨコナ (強度記号)あり	粘板、留母片含 む	良好	内: にぶい黄 外: タ	10YR 7/4 1/16	口縫破片 かな墨跡あり(□口?)	R175
116	S K7455	重 慈 墓 等	(口徑)14.8cm (底高)6.6cm	外側ヨコナダ後ナダ 内面ヨコナダ後ナダ、 内面中面ヨコナダ、 ヨコナダ	粘板、黑色粒子 含む	良好	粘土: 灰白 輪: 10R 4/8	2.5Y 7/1 2.5YR 5/8	口縫部1/4 内面に朱付層、脚底残る	R182
117	S K7455	重 慈 墓 等	(口徑)1.6cm (台高)6.6cm	内面ロクロナダ、外面追 加後ナダ、高台貼付 ヘラ切り後ナダ	粘板、黑色粒子 含む	良好	粘土: 灰白 輪: 10R 5/8	2.5Y 7/2 10R 5/8	高台のみ 内面に朱付層、脚底残る	R179
118	S K7455	灰陶器 等	(口徑)1.5cm (台高)7.0cm	内面ロクロナダ	粘板、黑色粒子 含む	良好	粘土: 残灰 輪: 明赤	2.5Y 7/3 2.5YR 5/8	高台のみ 外側に墨そろいの墨跡 (強度記号)あり(用 意記号)、内面に朱付層	R183
119	S K7455	陶 瓦 山 壱 家 等	(底高)1.3cm (底高)5.0cm	外側ロクロナダ、底部未調 整	粘板、砂粒、石 多々含む	良好	粘土: にぶい黄 輪: 赤	10YR 7/4 10R 4/8	高台のみ 内面に朱付層、脚底残る	R181
120	S K7455	陶 瓦 山 壱 家 等	(底高)1.5cm (底高)8.6cm	外側ロクロナダ、底部へり 切り後未調整	粘板、砂粒、黄 石多く含む	良好	粘土: にぶい黄 輪: 赤 10R 5/8	10YR 6/4 10R 4/8	高台のみ 内面に朱付層、脚底残る	R180
121	S D7367	黑色土磁 等	(口徑)14.0cm (底高)2.6cm	内外面全面ミガキ	粘板、留母片含 む	良好	内: 黑 外: タ	N 2/ 1/16	約60%	R165
122	S D7369	黑色土磁 等	(口徑)17.8cm (底高)3.6cm	内面～外側～底部ミガキ、外 面下部ナダ	粘板	中や不良	内: 黑 外: 残黄褐	7.5Y 2/1 10YR 7/6	口縫のみ 1/12	R167
123	S D7369	黑色土磁 等	(底高)3.1cm (底高)12.6cm	内面上半分オサエ、下半 分ケズリ、内面ナダミガキ	粘板、タサリ織 修: 金屬物片含 む	やや不良	内: 黑 外: 残黄褐	10Y 2/1 10YR 8/4	底面のみ1/8	R164
124	S D7369	黑色土磁 等	(口徑)14.8cm (底高)4.2cm	内面ヨコナダ後ミガキ、外 面下部ナダ後ミガキ	粘板、タサリ織 修: 金屬物片含 む	良好	内: にぶい黄 外: タ 修: 10YR 6/4	10YR 6/4	口縫のみ 1/12	R163
125	S K7455	黑色土磁 等	(口徑)14.0cm (底高)2.8cm	内面ヨコナダ、底板、一切 なり不対称の方のナダ、内面 ナダ	粘板、砂粒、黑 色粒子含む	やや不良	内: 黑 外: 残黄褐	10Y 3/2 10YR 8/4	口縫のみ1/6	R161
126	S B1431	黑色土磁 等	(台高)7.2cm (底高)1.5cm	内面ヨコナダ後ミガキ、内面 ナダ	粘板、タサリ 織含む	やや不良	内: 残灰 外: 線	7.5YR 7/6	底部のみ1/2	R168

No	出土遺物	器種	法 量	調査・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残存度	備 考	登録番号	
127	S K7422	黑色土器 鍋	(口徑) 10.2cm (底周) 5.3cm	口縁部へ内面ナガ後にガヨ、外腹へラクジマリ有り	陶器、カツリ織 表面片多く含む	良好	内：黒 外：浅黄褐	N 2/ 7.5YR 8/6	約25%	外腹上面にスミ付有	R160
128	S K7422	黑色土器 鍋	(口徑) 13.6cm (底周) 3.8cm	口縁部へ内面ナガ後にガヨ、外腹側面不規正	陶器、表面片含む	やや不良	胎土：灰 外：灰	10YR 7/4 N 2/	口縁のみ 1/6	外腹上面にスミ付有	R162
129	S D7389	黑色土器 盆	(口徑) 8.8cm (底周) 3.6cm	口縁部へ内面ナガ後にガヨ、外腹側面不規正	陶器、表面片含む	やや不良	胎土：灰 外：灰	N 3/ 7.5YR 6/4	口縁のみ 1/8	外腹一部に網焼みられる	R166
130	S K7420	土 備 盆	(口徑) 7.4cm (底周) 5.5cm	口縁部ロコロ、外腹へラ 内面ナガ後不規正方向のナ	陶器、カツリ織 表面片含む	良好	内：褐色 外：灰	5YR 6/8 N 2/	口縁のみ 1/2		R186
131	S K7432	ミチアード 土器 鍋	(底周) 3.7cm	内外面ナガ	陶器、カツリ織 表面片含む	不良	内：浅黄褐 外：灰	10YR 8/3 N 2/	約25%		R187
132	S K7430	ミチアード 土器 鍋	(口徑) 6.2cm (底周) 4.8cm	口縁部へ内面西ヨコナギ、 内面下部ヨコナギ、外腹ハケ 等のナガ有り	陶器、砂粒、 表面片含む	不良	内：黄褐 外：灰	10YR 8/8 N 2/	約60%	舟形ハケ目歛城のため不 明確	R188
133	S K7423	ミチアード 土器 鍋	(口徑) 9.0cm (底周) 4.1cm	口縁部ロコロ、外腹ハケ 内、内面不規正方向のナ	陶器	不良	内：浅黄褐 外：灰	10YR 8/4 N 2/	口縁のみ 1/2		R189
134	S K7430	易輪転陶 器 鍋	(口徑) 9.0cm (底周) 5.9cm (高さ) 8.2cm	内面下部へ内面西ヨコナギ、 内面下部ヨコナギ、外腹ハケ 等のナガ有り	陶器、黑色粒子 表面片含む	良好	胎土：灰黒 胎土：灰 胎土：灰	2.5Y 7/2 2.5Y 7/2 2.5Y 7/2	約1/3	内面一整型、外腹底盤に 三又トランシスあり、外腹 底盤飾りの迹あり	R142
135	S K7430	易輪転陶 器 鍋	(口徑) 19.8cm (底周) 12.8cm (高さ) 9.2cm	内面下部ロコロ、内面ナ ヨコナギ、外腹ハケ等のナ	陶器	良好	胎土：灰 胎土：灰	2.5Y 6/1 2.5Y 6/1	1/3強	内面、外腹底盤に三又ト ランシスあり、無蓋	R143
136	S K7430	易輪転陶 器 花 蕉	(口徑) 20.8cm (底周) 13.6cm	内面上部へ内面ロコロナ ゲ後にガヨ、外腹下部ロコロ ナゲ後にガヨ、高台貼 付等のナガ有り	陶器	やや破損	胎土：灰 胎土：灰	2.5Y 6/3 2.5Y 6/3	口縁のみ 1/12	内面に火附、外腹に多 数の底盤あり、45度SKX 1424、80と同一器株か？	R144
137	S K7409	易輪転陶 器 鍋	(底周) 4.2cm (高さ) 4.2cm	内面ロコロナゲ、後ミガ ヨコナギ、外腹ロコロナゲ、 高台貼付等のナ	陶器	秋實	胎土：灰 胎土：灰	2.5Y 7/2 2.5Y 7/2	底盤のみ 1/4	内面に火附、外腹に多 数の底盤あり、45度SKX 1424、80と同一器株か？ 無蓋	R149
138	K-20 P1-1	易輪転陶 器 鍋	(口徑) 10.4cm (底周) 3.6cm	口縁部ロコロ、外腹ヨコ ナギ、外腹底盤に複数の 輪郭有り、外腹側面切 り込み有り	陶器	軟質・良好	胎土：灰 胎土：灰	5Y 6/1 5Y 6/1	口縁の1/3 弱	全表面黒、二次的な加熱 色化する	R136
139	包含層	易輪転陶 器 鍋	(口徑) 12.8cm (底周) 4.3cm (高さ) 5.8cm	内面下部ロコロナギ後 ヨコナギ、外腹側面切 り込み等のナガ有り	陶器	やや破損	胎土：灰 胎土：灰	2.5Y 7/2 2.5Y 7/2	底盤完全、 全体約50 %残存	丸形容器に幅3.5cmの 底盤有り、無蓋	R150
140	包含層	易輪転陶 器 鍋	(口徑) 13.0cm (底周) 4.2cm	口縁ロコロナゲ、高台貼 付等のナ	陶器	良好	胎土：灰 胎土：灰	N 6/ ~ 7.5Y 5/1 7.5Y 5/1	1/8弱	全面黒	R158
141	S K7432	易輪転陶 器 鍋	(口徑) 13.0cm (底周) 4.2cm	内面下部へ内面ロコロナ ゲ後ヨコナギ、外腹側面 切込み等のナガ有り	陶器、黑色粒子 表面片含む	良好	胎土：灰 胎土：灰	2.5Y 7/2 2.5Y 7/2	~ 5-6S 5-6S	見辺部に幅3.0cmの焼 跡が一本まる、全表面黒	R145
142	S K7432	易輪転陶 器 鍋	(口徑) 12.0cm (底周) 4.3cm (高さ) 6.0cm	口縁ロコロナゲ、高台貼 付等のナ	陶器	秋實	胎土：灰 胎土：灰	10YR 8/6 N 6/	約60%	内面トランシスあり、外 腹底盤へ側面の黒がくっ 付有り、東側偏か？	R147
143	S K7432	易輪転陶 器 鍋	(口徑) 10.4cm (底周) 6.1cm	内面下部ロコロナゲ？、 外腹上部へ内面ロコロナ ゲ	陶器、表面片含む	良好	胎土：灰 胎土：灰	7.5Y 5/1 7.5Y 5/1 7.5Y 5/1	口縁のみ 1/8	全面黒、東側偏か？	R146
144	包含層	易輪転陶 器 鍋	(底周) 1.2cm (高さ) 6.2cm	内面ロコロナゲ後ミガヨ、 外腹底盤に複数のナ ゲ、高 台貼付等のナ	陶器	良好	胎土：灰 胎土：灰	10YR 7/4 5-6S 5-6S	約30%	全面黒、内面に影跡	R156
145	S D7389	易輪転陶 器 鍋	(底周) 2.4cm (高さ) 5.2cm	内面下部ヨコナギ後 ヨコナギ、外腹側面切 り込み等のナガ有り	陶器	やや粗	胎土：灰 胎土：灰	10YR 7/4 5-6S 5-6S	約20%	全面黒、内面トランシ スあり、5-6Sの底盤が 一直に延びる	R152
146	S D7389	易輪転陶 器 鍋	(口徑) 1.0cm (底周) 2.3cm	口縁ロコロナゲ	陶器	秋實	胎土：灰 胎土：灰	7.5Y 7/2 7.5Y 7/2 7.5Y 7/2	口縁底盤 影跡花文		R151
147	包含層	易輪転陶 器 鍋	(底周) 2.3cm (高さ) 6.5cm	内面ロコロナゲ、高 台貼付等のナ	陶器	良好	胎土：灰 胎土：灰	N 5/ 5-6S 5-6S	口底盤のみ 1/3	全面黒、外腹底部へ高 度偏在	R156
148	包含層	易輪転陶 器 鍋	(底周) 6.5cm (高さ) 8.8cm	内面へ底盤ロコロナ ゲ、高台貼付等のナ	陶器	良好	胎土：灰 胎土：灰	2.5Y 6/2 5-6S	高台のみ 1/2	全面黒、内面・外腹底 部にトランシス残る	R157
149	S D7387	易輪転陶 器 鍋	(底周) 1.8cm (高さ) 9.4cm	内面へ底盤ロコロナ ゲ、内 底盤ロコロナ	陶器	やや粗	胎土：灰 胎土：灰	2.5Y 7/2 5-6S	底盤B/Sの 1/8	底盤花文、底盤座か？	R154
150	S D1429	易輪転陶 器 鍋	(口徑) 18.2cm (底周) 7.4cm	内外面ロコロナゲ	陶器、白雲母片 含む	やや破損	胎土：灰 胎土：灰	2.5Y 7/3 5-6S	口縁約1/8 のみ	底盤花文、調査座か？	R153
151	S K7423	須 瓦	(底周) 17.2cm 内 底 壁	内面ヨコナギ後ミガヨ、 内面底盤に複数のナ ゲ、高 台貼付等のナ	陶器、黑色粒子、 表面片含む	良好	胎土：灰 胎土：灰	5Y 7/2 N 2/	1/8弱のみ	表面に風化あり、外腹中 部に線隙あり	R184
152	S K7423	青 瓦 花 蕉	(口徑) 17.4cm (底周) 4.0cm	口縁ロコロナゲ	陶器	粗	胎土：灰 胎土：灰	2.5Y 6/2 5Y 5/3	口縁1/9	全面にうすい青緑、 口縁にわざわざにビソノ と細小な鉢脚あり	R192
153	S K7433	製陶土器	(口徑) 13.8cm (底周) 5.5cm		胎土、砂粒多く含 む	不良	胎土：灰 胎土：灰	5Y 6/8 N 2/	1/8弱のみ	底盤は欠損	R178

第111次調査

No	出土遺物	器種	法 盆	調整・技法の特徴	胎 土	燒 成	色 調	残存度	備 考	試験番号	
1	S B7445	土 磁 环	(口径)18.8cm (高さ)4.3cm	口縁部ヨコナデ、底部ケズリ、内面ナダ	緻密	良好	内: 暗 外: タ	5YR 6/6	約40%	R1	
2	S B7445	土 磁 环	(口径)18.2cm (高さ)4.9cm	口縁部ヨコナデ、底部ケズリカタ、内面ナダ	緻密含むが微密	良好	内: 暗 外: タ	7.5YR 6/8 a	約30%	器表面の磨耗著しい。	
3	S B7445	土 磁 环	(口径)17.3cm (高さ)5.0cm	口縁部ヨコナデ、底部ケズリカタ、内面ナダ、底部外側方角のハサミ、内面底部ケズリ、中位部底部ヨコナデ	1cm以下の砂粒含むが微密	良好	内: にい・赤褐 外: タ	10YR 6/4 a	約60%	外周部中央部少々赤、他部全体黒。骨灰層厚さ~中位部まで赤黒。	
4	S B7445	土 磁 环	(口径)20.0cm (高さ)14.3cm	口縁部ヨコナデ、外面部ハケのちナダ、内面ヨコナデ	緻密な砂粒含むが密	良好	内: 鮎灰 2.5Y 5/2~淡黄 2.5Y 8/3 外: タ	口縁の1/6	やや粗製	R5	
5	S B7445	土 磁 环	(口径)19.3cm (高さ)13.5cm	口縁部ヨコナデ、外面部ハケのちナダ、底部ケズリ、底部にケズリ	緻密な砂粒多量含むが密	ややあまい	内: にい・黄褐 外: タ	10YR 7/4 a	約60%		
6	S K7442	土 磁 环	(口径)15.9cm (高さ)13.5cm	口縁部ヨコナデ、外面部ハケのちナダ、内面ヨコナデ	密	良好	内: にい・黄褐 外: 淡黄褐	10YR 7/3 7.5YR 8/4	約40%	外周部えす付青、内面に褐色地付着、二次焼成の赤変あり。	
9	S B7440	土 磁 环	(口径)12.1cm (高さ)3.3cm	口縁部ヨコナデ、底部内外	緻密な砂粒含むが密	良好	内: にい・褐 外: 黒(表面 黒)	7.5YR 6/4 a	約40%弱		
10	S B7440	土 磁 环	(口径)13.0cm (高さ)3.4cm	口縁部外面部ヨコナデ、外面部オサニ・ナダ、内面ナダ	砂粒やや多量に含むが密	ややあまい	内: 明度黄 外: タ	2.5Y 8/3 a	口縁の1/2弱	粘土合板模あり	
11	S B7440	土 磁 环	(口径)12.1cm (高さ)3.5cm	口縁部ヨコナデ、外面部オサニ・ナダ、内面ナダ	緻密な砂粒多量含むが密	ややあまい	内: 淡黄褐 外: タ	10YR 8/3 a	約50%	二次焼成による赤変、器表面剥落、粘土合板模あり	
12	S B7440	土 磁 环	(口径)14.3cm (高さ)3.6cm	口縁部外面部ヨコナデ、外面部オサニ・ナダ、内面ナダ	緻密な砂粒多量含むが密	ややあまい	内: 淡黄 外: タ	2.5Y 8/3 a	約30%弱		
13	S B7440	土 磁 环	(口径)14.0cm (高さ)3.6cm	口縁部外面部ヨコナデ、内面 图ナダ	緻密な砂粒多量含むが密	ややあまい	内: 淡黄 外: タ	2.5Y 8/3 a	約30%		
14	S B7440	土 磁 环	(口径)15.2cm (高さ)6.0cm	口縁部ヨコナデ、外面部ハケのちナダ、内面ナダ	密	良好	内: 淡黄 外: にい・黄褐	2.5Y 8/3 10YR 7/2	口縁の約1/3	片側の一部に黑色物付着	
15	S K7447	土 磁 环	(口径)15.0cm (高さ)3.4cm	口縁部ヨコナデ、外面部オサニ・ナダ、内面ナダ	砂粒を多量に含み粗い	良好	内: にい・黄褐 外: タ	10YR 6/4 a	ほぼ完存	R29	
16	S K7450	土 磁 环	(口径)14.0cm (高さ)4.7cm	脚部外側部ロクナデ、内面 ナデ・シボナデ	最小な白色粒等 含むが密	良好	内: 淡白 外: N2/ ~ N2/ a	脚部のみ	内外面に火がかりによる 温度差あり	R20	
17	S K7450	土 磁 环	(口径)16.8cm (高さ)4.9cm	外底部外側部方角のミカタ、 内面脚部焼成度2級	密	良好	内: にい・黄褐 外: 明度褐	10YR 7/4 2.5YR 5/6	約40%		
18	S K7450	土 磁 环	(口径)17.8cm (高さ)10.8cm	口縁部ヨコナデ、底部外側部 ヨコナデ、内面ナダ、内面底部 ヨコナデ・タキシナダ	緻密な砂粒多量 含むが密	良好	内: 灰 外: タ	SY 4/1 a	口縁の約 1/3	器形のゆがみ著しい、大 小の塊ぶくれが多く数多く	R68
19	S K7458	土 磁 环	(口径)11.4cm (高さ)5.1cm	口縁部ヨコナデ、外面部ナダ、 内面ナダ	緻密な砂粒含む が密	良好	内: にい・黄褐 外: 暗	10YR 7/3 2.5YR 7/6	口縁の約 1/3	外側に二次焼成による赤 変、内面黒色物付着	R16
20	S K7458	土 磁 环	(口径)15.0cm (高さ)7.2cm	口縁部ヨコナデ、外面部ハケ、 内面ヨコナデ、ヨコナダ	緻密な砂粒含む が密	良好	内: 淡黄 外: タ	2.5Y 6/2 a	口縁の約 1/3	脚部外側と内面口頭部が 崩壊	R15
21	S B7465	土 磁 环	(口径)19.1cm (高さ)4.0cm	口縁部ヨコナデ、底部外 面ケズリ、内面ナダ	緻密	良好	内: 暗 外: タ	2.5YR 6/6	約30%		
22	S B7465	土 磁 环	(口径)15.0cm (高さ)2.7cm	口縁部ヨコナデ、底部内外 面ナダ	密	良好	内: 灰 外: タ	2.5YR 6/6 a	口縁の約 1/6		
23	S B7465	土 磁 环	(口径)15.7cm (高さ)3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面部ケ ズリ、内面放射・焼成度2級	密	良好	内: にい・赤褐 外: タ	SYR 5/4 a	約30%		
24	S B7465	土 磁 环	(口径)21.2cm (高さ)2.7cm	口縁部ヨコナデ、外面部ナ ダ、内面放射、底部崩壊、内面ナ ダ	緻密	良好	内: 暗 外: タ	7.5YR 7/8 a	約50%	器表面の磨耗著しい。	R18
25	S B7465	土 磁 环	(口径)23.2cm (高さ)9.3cm	口縁部ヨコナデ、外面部 ケズリ、内面放射・焼成度2級	状態不明	良好	内: 灰 外: 灰	N 4/ N 5/ a	口縁の約 1/3	口縁の約 1/4	R26
26	S K7466	土 磁 环	(口径)14.4cm (高さ)4.1cm	口縁部ヨコナデ、外面部ハ ケのちナダ	緻密な砂粒多量に 含む	良好	内: 淡黄 外: タ	2.5Y 8/4 a	口縁の約 1/4		R19
27	S K7466	土 磁 环	(口径)9.3cm (高さ)1.4cm	口縁部ヨコナデ、外面部ナ ダ、内面ナダ	緻密な砂粒含む が密	良好	内: 灰 外: タ	SYR 7/6 a	ほぼ完存		R24
28	S K7467	土 磁 环	(口径)11.6cm (高さ)3.4cm	口縁部ヨコナデ、内面ケズ リ・ナダ、内面ヘリ・カキ	緻密	良好	内: 灰 外: タ	SYR 6/6 a	約50%		R21
29	S K7467	土 磁 环	(口径)26.1cm (高さ)11.8cm	口縁部ヨコナデ、内面外ハ ケ	密	良好	内: 灰 外: タ	10YR 6/2 a	口縁の約 1/4		R22
30	S D7478	土 磁 环	(口径)10.3cm (高さ)3.9cm	口縁部ヨコナデ、底部内外 面ナダ	密	ややあまい	内: 暗 外: タ	SYR 6/6 a	約70%	器表面の磨耗著しい。	R43
31	S D7478	土 磁 环	(口径)13.1cm (高さ)3.0cm	口縁部ヨコナデ、底部外張 ナダ・オサニ、底部内張 ナダ	密	良好	内: 暗 外: タ	2.5YR 6/8 a	ほぼ完存	全体にやや厚手、ナダは 半薄	R35
32	S D7478	土 磁 环	(口径)13.0cm (高さ)3.0cm	口縁部ヨコナデ、底部外張 ナダ・オサニ、底部内張 ナダ	密	良好	内: 暗 外: タ	SYR 6/8 a	約80%		R36
33	S D7478	土 磁 环	(口径)12.9cm (高さ)3.0cm	口縁部ヨコナデ、底部外張 ナダ・オサニ、底部内張 ナダ	密	良好	内: 明赤褐 外: タ	2.5YR 5/8 a	約80%		R44

No	出土遺物	器種	基量	調査・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	圖考	登錄番号	
34	S D7478	土 茶器 杯	(口径)13.5cm (底面)3.3cm	D縫部ヨコナデ、外腹ナデ オサエ、内腹ナデ	タリ糊むかず 内含むが密	良好	内：橙 外：±	2.SYR 6/8 %	約50%	R34	
35	S D7478	土 茶器 杯	(口径)14.0cm (底面)3.8cm	D縫部ヨコナデ、底部外腹 ナデ・オサエ、底部内腹ナ デ	糊む	良好	内：橙 外：±	2.SYR 6/8 %	約70%	器表面の磨耗著しい	
36	S D7478	土 茶器 杯	(口径)15.3cm (底面)3.2cm	D縫部ヨコナデ、底部外腹 ナデ	糊む	良好	内：にぶい橙 外：暗赤褐色	SYR 6/4 2.SYR 5/6	約80%	R31	
37	S D7478	土 茶器 杯	(口径)16.1cm (底面)3.3cm	D縫部ヨコナデ、内腹ナア 密	糊む	良好	内：橙 外：±	2.SYR 6/8 %	約90%	R38	
38	S D7478	土 茶器 杯	(口径)16.0cm (底面)3.8cm	D縫部ヨコナデ、底部外腹 ナデ・オサエ、底部内腹ナ デ	糊む	良好	内：橙 外：±	SYR 6/6 %	約60%	器表面に「×」とみら れる経路あり	
39	S D7478	土 茶器 杯	(口径)12.0cm (底面)3.4cm	D縫部ヨコナデ、底部内外 腹ナデ	糊む	良好	内：橙 外：±	SYR 6/8 %	約70%	器表面「井」	
40	S D7478	土 茶器 杯	(口径)13.0cm (底面)3.4cm	D縫部ヨコナデ、底部外腹 ナデ等々ナゲ、底部内腹ナ デ	糊む	良好	内：赤褐 外：±	2.SYR 4/8 %	完存	器表面「井」と思われる	
41	S D7478	土 茶器 杯	(口径)14.0cm (底面)3.7cm	D縫部ヨコナデ、底部外腹 ナデ等々ナゲ、底部内腹ナ デ	糊む	良好	内：にぶい橙 外：±	7.SYR 6/4 SYR 6/6	約90%	「オ」か?	
42	S D7478	土 茶器 杯	(口径)17.4cm (底面)5.2cm	D縫部ヨコナデ、外腹ナケ リ、内腹ナデ	糊む	良好	内：浅黄 外：±	2.SYR 7/3 SYR 6/6	約50%	器表面「+」	
43	S D7478	土 茶器 杯	(口径)18.0cm (底面)2.8cm	D縫部ヨコナデ、外腹底部 ナデから、底部底部ナデ	糊む	良好	内：橙 外：±	SYR 6/8 %	約40%	R45	
44	S D7478	土 茶器 杯	(口径)17.0cm (底面)2.5cm	D縫部ヨコナデ、内外腹底 ナデ	糊む	良好	内：橙 外：±	SYR 6/6 %	約90%	粘土接合痕あり	
45	S D7478	土 茶器 杯	(口径)11.8cm (底面)9.0cm	D縫部ヨコナデ、外腹ハケ 内腹ハケナゲ	砂粒多いが密	良好	内：浅黄 外：±	2.SYR 7/3 %	約70%	内腹黒色物付着、二次燒 成の赤化	
46	S D7478	土 茶器 杯	(口径)13.0cm (底面)10.0cm	D縫部ヨコナデ、外腹ハケ 内腹ナデ	砂粒多いが密	良好	内：にぶい黄褐色 外：±	10SYR 7/2 %	約80%	R39	
47	S D7478	土 茶器 杯	(口径)12.5cm (底面)10.0cm	D縫部ヨコナデ、外腹底部 ナデから、内腹ナデ	底1~2mmの砂粒 多くやや粗	良好	内：にぶい黄褐色 外：灰褐色	10SYR 7/4 SYR 4/2	約80%	外腹二次燒成による赤化 剥落著しい	
48	S D7478	土 茶器 茶筒付	(直径)16.5cm (底面)19.4cm	D縫部ヨコナデ、外腹ハケ 内腹ハケナゲ	糊む	良好	内：にぶい黄褐色 外：±	10SYR 7/3 %	約70%	R46	
49	S D7478	土 茶器 茶筒付	(口径)25.6cm (底面)23.6cm	D縫部ヨコナデ、外腹ハケ 内腹ハケナゲ	砂粒多いが密	良好	内：橙 外：±	7.SYR 6/6 %	約95%	R65	
50	S D7478	須彌壺 灰張	(残高)3.2cm (底面)6.8cm	内外面クロナガ、底部ロ クロヘリコナガ	糊む	あまり	内：灰白 外：±	2.SYR 7/1 %	底部のみ	ロクロ右回り	
51	S D7478	須彌壺 灰張	(残高)10.6cm (底面)11.8cm	外面ヨコナデ、体部下方 ロクロヘリナゲ、貼付高台、 底部ロクロナガ	糊む	良好	内：灰 外：±	N 6/ % 糊む	手平に次がかり灰、底部 に物置痕あり、自然剥離	R30	
52	S D7478	土 茶器 杯	(口径)18.0cm (底面)3.9cm	D縫部ヨコナデ、外腹ナデ オサエ、内腹ナデ	複数の砂粒多量 に含むが密	良好	内：にぶい橙 外：±	7.SYR 6/4 %	約90%	R67	
53	S D7478	土 茶器 杯	(口径)18.0cm (底面)2.8cm	D縫部ヨコナデ、外腹ナデ オサエ、内腹ナデ	糊む	良好	内：橙 外：±	SYR 6/8 %	ほぼ完存	R66	
54	A. T. 包合用	黑色土器 陶	(口径)15.0cm (底面)4.7cm	D縫部ヨコナデ、外腹ナデ、 内腹ヘリガキ	糊む	良好	内：黑 外：にぶい赤褐色	N 1.5/ % SYR 5/4	約50%	R54	
55	S K7459	黑色土器 陶	(口径)13.9cm (底面)4.7cm	内外面ヘリガキ	糊む	良好	内：黑 外：±	N 1.5/ % 1/4	口縁的 内外面黒化	R52	
56	H. T. カガラ上	毛目茶器 茶筒	(口径)9.0cm (底面)2.7cm	D縫部ヨコナデ、外腹ナ ケリ、内腹ナデ	糊む	良好	内：墨 外：±	SY 2/ % 2.SYR 8/2	口縁的約 1/4	全面黒化	R55
57	B. T. 1-p2	黑色土器 陶	(口径)16.8cm (底面)7.2cm	D縫部ヨコナデ、片側ヘリ ガキ、内腹ヘリガキ	糊む	良好	内：墨 外：±	N 1.5/ % SYR 6/5	口縁的約 1/5	内面に螺旋状文(花文 模様)	R53
58	E. T. カガラ上	灰地黒茶 茶筒	(残高)2.1cm (底面)7.3cm	体部下方ヨコナガ、貼付 高台、底部ロクロナガ	糊む	良好	内：灰 外：±	2.SY 6/1 %	高台の約 1/4	内面に漆付痕	R56
59	F. T. カガラ上	須彌壺 茶筒	(残高)2.3cm (底面)6.0cm	内外面ヨコナガ、貼付高 台、底部ロクロナガ	糊む	良好	内：灰 外：±	SY 6/1 %	高台の約 1/5	未付土器	R57
60	A. T. 包合用	須彌壺 茶筒	(口径)15.2cm (底面)2.8cm	D縫部ヨコナデ、底部ロ クロケツ、内腹ヨコナガ	細妙含むが密	良好	内：灰白 外：灰オリーブ	N 7/ % SY 6/2	約40%	底部に自然剥離有り、内部 に朱付痕	R58
61	F. T. カガラ上	最終期 茶筒	(口径)13.5cm (底面)1.7cm	D縫部ヨコナデ、外腹ケツ リ、内腹ナデ	糊む	豊原 (豊原)	鈍・紫褐色 生地：灰	SY 4/1	口縁的 1/8	口縁的約 1/8	R63
62	S E7477	最終期 茶筒	(合口)9.6cm (底面)2.0cm	内外面ヘリガキ、貼付高 台	糊む	良好 (豊原)	鈍・深紺茶(フリンツ・チップ 等で合む) 生地：灰	2.SY 6/1	約90%	三又トナ痕あり	R61
63	H. T. カガラ上	最終期 茶筒	(合口)8.0cm (底面)2.3cm	内外面ヘリガキ、貼付高 台	糊む	良好 (豊原)	鈍・ねこななぎ(サロー) 生地：灰	SY 6/1	約90%	底部のみ	R60
64	F. T. カガラ上	最終期 茶筒	(合口)7.6cm (底面)2.0cm	D縫部ヨコナデ、底部ロ クロケツ、内腹ヨコナガ	細妙含むが密	良好	鈍・薄いわながな(サロー) 生地：灰白	SY 8/1	口縁的約 1/4	口縁的約 1/4	R62
65	A. T. 包合用	斐伊口 茶筒	(外径)6.2cm (底面)4.8cm	全周ナデ、堆積面取り	砂物細胞の他、 砂物細胞と多量に合 む	良好	先端・基部：機SYR 6/6 中盤：機SYR 7/1 内盤：機SYR 4/1	機SYR 5/6 %	底部のみ	底部による優化	R64
66	I. T. カガラ上	製塗土器	(口径)14.7cm (底面)4.5cm (高さ)15.5cm	内外面ナデ・オサエ	砂粒多量に含む	ややあまい	鈍・赤褐色 生地：±	2.SYK 5/6 1/5	底部の約 1/5	内面二次燒成でもろくな る	R59

第112次調査

No	出土遺構	器種	法 盆	病害・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残存度	備 考	登録番号
1	Fトレンチ	灰 壺	口(底)9.0cm (高さ)5.8cm	口唇部・外腹ロクロナデ、底部不规则向内ケズリ	繊維な砂粒を含む粘土	良好	内:灰白 外:灰 10Y 7/2 10Y 6/1	約25%	同一破片4点 全体に被状化	R 2
2	Iトレンチ	灰 壺	口(底)11.2cm (高さ)3.5cm	口唇部・体部ロクロナデ、底部状模	繊維な砂粒を含む粘土	良好	内:オーリーブ灰 外:灰 10Y 6/2 10Y 6/1	口唇の一部 のみ残存	同一破片2点	R 3
3	Iトレンチ	灰 壺	口(底)一 (高さ)3.5cm	口唇部・体部ロクロナデ、底部状模	砂	良好	内:灰 外:灰 7.5Y 6/2 7.5Y 6/1	口唇の一部 のみ残存		R 4
4	Iトレンチ	灰 壺	口(底)14.2cm (高さ)3.5cm	口唇部・外腹ロクロナデ、底部不规则向内ケズリ	繊維な石粒を含む粘土	良好	内:灰 外:灰 7.5Y 5/1	約30%	ロクロ若回転	R 1
5	Bトレンチ	陶 壺	口(底)7.4cm (高さ)2.1cm (山形窓)	体部ロクロナデ、底部あわせ り袋、點付高台	石粒をやや含む 粘土	良好	内:灰 外:灰 7.5Y 6/1 *	基台の2/3 残存		R 5
6	Iトレンチ	陶 壺	口(底)6.8cm (高さ)3.0cm (山形窓)	体部ロクロナデ、點付高台	砂	良好	内:灰 外:灰白 7.5Y 8/3 7.5Y 8/1	高台の1/4 残存		R 6
7	Cトレンチ	陶 壺	口(底)5.0cm (高さ)1.4cm (山形窓)	体部ロクロナデ、底部糸切 き木施加	砂	良好	内:オーリーブ灰 外:灰 2.5CY 6/1 *	茎部の1/2 残存		R 7
8	Cトレンチ	円筒埴輪	-	口縁部ヨコナデ、外腹タ グ、内腹ヨコハケ、ナデ	繊維な石粒を含む粘土	良好	内:にぶい黄 外:にぶい黄褐 SVR 6/4 7.5YR 6/4	口縁部	外・内腹ハケ 6本/cm	R 8
9	Gトレンチ	円筒埴輪	-	口縁部ヨコナデ、外腹タ グハケ、内腹ヨコハケ	石粒を含む粘土	良好	内:明黄褐 外:灰 10YR 6/6 *	口縁部	外腹ハケ 8~9本/cm 内腹ハケ 5~6本/cm	R 15
10	Gトレンチ	円筒埴輪	-	口縁部ヨコナデ、外腹タ グハケ、内腹ヨコハケ	石粒を含む粘土	良好	内:にぶい黄 外:にぶい赤褐 SVR 6/4 SVR 5/3	口縁部	外腹ハケ 7~8本/cm 内腹ハケ 5~6本/cm	R 17
11	Cトレンチ	円筒埴輪	-	口縁部ヨコナデ、外腹タ グハケ、内腹ヨコハケ	石粒をやや多く 含む	良好	内:にぶい黄褐 外:にぶい黄褐 10YR 6/3 10YR 6/4	口縁部	外腹ハケ 7~8本/cm 内腹ハケ 6本/cm	R 9
12	Cトレンチ	円筒埴輪	-	口縁部ヨコナデ、外腹タ グハケ、内腹ヨコハケ	わずかに石粒を含む粘土	良好	内:灰 外:灰 7.5YR 6/6 *	口縁部	外・内腹ハケ 7本/cm	R 16
13	Bトレンチ	円筒埴輪	-	口縁部ヨコナデ、外腹タ グハケ、内腹ヨコハケ	繊維な石粒をや や多く含む	良好	内:浅黄褐 外:灰 7.5YR 6/6 7.5YR 6/8	口縁部	外・内腹ハケ 8本/cm	R 10
14	Bトレンチ	円筒埴輪	タガ幅 2.2cm 高 0.8cm	外腹タグハケ、内腹オサエ ナデ、ナタ付貼	石粒をやや含む	良好	内:橙 外:橙 SYR 6/6 SYR 6/6	タガ部	外腹ハケ 5本/cm	R 12
15	Bトレンチ	円筒埴輪	タガ幅 2.2cm 高 0.8cm	外腹タグハケ、内腹オサエ ナデ、ナタ付貼	石粒をやや含む	良好	内:橙 外:橙 SYR 6/6 SYR 6/6	タガ部	外腹ハケ 7本/cm	R 13
16	Gトレンチ	円筒埴輪	タガ幅 2.4cm 高 0.7cm	外腹タグハケ、内腹オサエ ナデ、ナタ付貼	石粒をやや多く 含む	良好	内:明黄褐 外:にぶい赤褐 SYR 5/8 2.5YR 5/4	タガ部	外腹ハケ 8~9本/cm	R 29
17	Gトレンチ	円筒埴輪	タガ幅 2.1cm 高 1.0cm	内腹ヨコハケ、一部タグハ ケ、内腹ナデ、ナタ付貼	石粒を多く含み やや粗	良好	内:橙 外:橙 7.5YR 7/6 7.5YR 6/6	タガ部	外腹ハケ 8~9本/cm	R 14
18	Gトレンチ	円筒埴輪	タガ幅 2.1cm 高 0.9cm	内腹ヨコハケ、内腹ナデ、 ナタ付貼	石粒をやや含む	良好	内:橙 外:灰 SYR 6/6 *	タガ部	外腹ハケ 7本/cm	R 31
19	Fトレンチ	円筒埴輪	タガ幅 2.1cm 高 0.8cm 透孔径 9.0cm	内腹ヨコハケ、内腹ナデ、 ナタ付貼	石粒をやや多く 含む	やや青い	内:橙 外:灰 SYR 6/6 SYR 7/6	タガ部	外腹ハケ 5本/cm	R 30
20	Fトレンチ	円筒埴輪	タガ幅 1.9cm 高 1.1cm 透孔径 11.0cm	内腹ヨコハケ、内腹ナデ、 ナタ付貼	石粒を多く含み やや粗	並	内:橙 外:橙 7.5YR 5/6 7.5YR 6/6	タガ部	外腹ハケ 7~8本/cm	R 23
21	Cトレンチ	円筒埴輪	タガ幅 2.2cm 高 0.7cm 透孔径 7.0cm	内腹ヨコハケ、内腹ナデ、 ナタ付貼	繊維な石粒を含む	並	内:橙 外:橙 SYR 6/6 10YR 5/8	タガ部	外腹ハケ 6~7本/cm	R 22
22	Fトレンチ	円筒埴輪	タガ幅 2.4cm 高 0.7cm 透孔径 5.2cm	内腹ヨコハケ、内腹ナデ、 ナタ付貼	石粒をやや含む	並	内:浅黄褐 外:にぶい黄褐 10YR 5/4 10YR 7/4	タガ部	外腹ハケ 7~8本/cm	R 20
23	Cトレンチ	円筒埴輪	タガ幅 2.2cm 高 0.7cm 透孔径 6.0cm	内腹ヨコハケ、内腹オサエ ナデ	石粒をやや含む	良好	内:橙 外:浅黄褐 7.5YR 6/6 10YR 7/4	タガ部	外腹ハケ 5~6本/cm タガ部	R 25
24	Bトレンチ	円筒埴輪	透孔径 4.6cm	外腹タグハケ、内腹ナデ	砂	並	内:橙 外:灰 7.5YR 6/6 *	タガ部	外腹ハケ 8~9本/cm ヘア状有り、器表面の 剥離有り	R 18
25	Fトレンチ	円筒埴輪	透孔径 4.2cm	外腹タグハケ、内腹ナデ	砂	並	内:橙 外:灰 7.5YR 6/6 *	タガ部	外腹ハケ 8~9本/cm ヘア状有り、タガ剥離、 器表面の剥離有り	R 28
26	Bトレンチ	円筒埴輪	(底径)一 (高さ)8.5cm ナデ	外腹タグハケ、内腹オサエ ナデ	繊維な石粒を含む粘土	やや青い	内:浅黄 外:灰 2.5Y 8/3 *	基底部	外腹ハケ 7~8本/cm 剥離有り、器表面の 剥離有り	R 32
27	Bトレンチ	円筒埴輪	(底径)10.4cm ナデ	内腹タグハケ、内腹オサエ ナデ	繊維な石粒を含む粘土	並	内:橙 外:灰 SYR 6/6	基底部	外腹ハケ 7~8本/cm 剥離有り、器表面の 剥離有り	R 24
28	Cトレンチ	円筒埴輪	(底径)14.2cm ナデ	内腹タグハケ、内腹オサエ ナデ	繊維な石粒を含む粘土	並	内:橙 外:灰 SYR 6/6 *	正径の1/4 残存	外腹ハケ 5~6本/cm タガ部	R 33
29	Cトレンチ	円筒埴輪	(底径)16.2cm (高さ)13.0cm ナデ	内腹ヨコハケ、一部タグハ ケ、内腹オサエ、ナデ	石粒をやや多く 含む	並	内:橙 外:灰 SYR 6/6 *	正径の1/4 残存	外腹ハケ 5~6本/cm タガ部	R 27
30	Cトレンチ	円筒埴輪	(底径)18.2cm (高さ)10.5cm ナデ	内腹ヨコハケ、一部タグハ ケ、内腹オサエ、ナデ	石粒をやや多く 含む	並	内:にぶい橙 外:初黄褐 7.5YR 6/6 10YR 7/6	正径の1/6	外腹ハケ 5~6本/cm	R 26

斎宮跡発掘調査次数一覧表

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
1	S 45	試掘	13- 6	51	中垣内375-1(南)
2	46	古里A地区	13- 7		東裏328(小川)
3		△ B地区	13- 8		西加座2771-1(縄井)
4	47	△ C地区	13- 9		△ 2773(縄井)
5	48	△ D地区	13-10		東裏362-1(見島)
6-1		Aトレンチ	13-11		西加座2681-1(浮田)
6-2		Bトレンチ	13-12		△ 2721-3, 2724-2(森川)
6-3		Cトレンチ	13-13		東前沖2506-2(宮下)
6-4		Dトレンチ	14- 1	52	2Eトレンチ
6-5		Eトレンチ	14- 2		2Fトレンチ
7	49	古里E地区	14- 3		2Gトレンチ
8-1		Fトレンチ	14- 4		2Hトレンチ
8-2		Gトレンチ	14- 5		2Iトレンチ
8-3		Hトレンチ	15		斎宮小学校
8-4		Iトレンチ	16- 1		竹川町道A
8-5		Jトレンチ	16- 2		△ B
8-6		Kトレンチ	16- 3		△ C
8-7		Lトレンチ	16- 4		△ D
8-8		Mトレンチ	16- 5		△ E
8-9		Nトレンチ	16- 6		△ F
8-10		Oトレンチ	17- 1		竹神社社務所
8-11		Pトレンチ	17- 2		竹神社防火用水
9-1	50	Qトレンチ	17- 3		西加座2721-6(西沢)
9-2		Rトレンチ	17- 4		楽殿2894-1(中川)
9-3		Sトレンチ	17- 5		△ 2895-1(西口)
9-4		Tトレンチ	17- 6		出在家3237-3(吉川)
9-5		Uトレンチ	17- 7		△ 3237-1(里中)
9-6		Vトレンチ	17- 8		楽殿2894-1(西村)
9-7		Wトレンチ	17- 9		東海造機
9-8		Xトレンチ	18	53	6AE-L-E-I(下園)
9-9		Yトレンチ	19		6AE-N-M-N-O(御館)
9-10		Zトレンチ	20		6AE-O-I-J(柳原)
10		広城園道路	21- 1		6AGN-B(鐵治山、北山)
11-1		西加座2661-1(山中)	21- 2		6AE I-D(西加座2711-2, 2717-4他、山路)
11-2		△ 2681-1(山名)	21- 3		6AFD-D(西前沖2649-1、大西)
11-3		東前沖2483-2(前田)	21- 4		6AFH-F(西加座2678, 2679-3、森下)
11-4		下園2926-9(吉木)	21- 5		6AGD-K(東前沖、渡部)
12-1	51	2Aトレンチ	21- 6		6ACA-T(古里3269-2、中西)
12-2		2Bトレンチ	21- 7		6AFE-F(東前沖2631-1、鈴木)
12-3		2Cトレンチ	21- 8		6AEG-A(楽殿2909-3、大西)
12-4		2Dトレンチ	21- 9		6AED-R(森林3218-3、宇田)
13-1		東加座2436-7(浜口)	22- 1		6AGU
13-2		△ 2436-4(中村)	22- 2		6AGU
13-3		古里3283(村上)	22- 3		6AGW
13-4		楽殿2916-2917(松井)	23	54	6AEL-B(下園)
13-5		御館2974-1(川本)	24		6AGF-D(西加座)

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
25-1	54	6ADP-K (牛葉3029-1、三重土地ホーク)	37-12	56	6AFH-J (西加座2681-1・3・4、渋谷)
25-2		6ACA-Y (古里3270、鰐田)	37-13		6AGK-F (西加座2385-3、2386-3、竹内)
25-3		6ADD-F (篠林3139-3、池田)	38		6ACD-S (塚山)
25-4		6AER-H (牛葉3014、牛葉公民館)	39		6ABD-R・S・T (古里)
25-5		6AGN-H (鐵治山2392、丸山)	40		6AGH-L・M (東加座)
25-6		6AFH-A (西加座2675-5、谷口)	41		6AGJ-J 他 (斎宮地内)
25-7		6AEK-V (下園2926-10、奥田)	42-1	57	6AEI-D・F (楽殿)
25-8		6AFC-D (西前沖2064-5、山本)	42-2		6AEK-A・B (楽殿)
25-9		6ACN-C (広頭3387-1、北出)	43-1		6ADC-C (出在家3235-2、水田)
25-10		6AEV-A (鉢池339-1、永島)	43-2		6ADT-B (木葉山308-1、山本)
25-11		6ACF-B (東裏364-1、沢)	43-3		6ACP-T (南裏241-1、辻)
25-12		6AEE-Y (樂殿2892-3、山本)	43-4		6ADS-D (牛葉123-3、西山)
25-13		6AEJ-E (西加座2766-1、山内)	43-5		6ADE-D (篠林3220-3、澄野)
26-1		6AFR (中西)	43-6		6AGE (東前沖、町道側溝)
26-2		6AEX~6ACQ (鉢池、木葉山、南裏)	43-7		6ABD-F (古里588-6、今西)
26-3		6AEV-W・X (鉢池)	43-8		6ADQ-H (牛葉3025-2、大西)
26-4		6ACR (木葉山、南裏)	44		6 AFL-A・B (鐵治山2759-1、他)
27		6ACG-S・T (東裏)	45		6AEG-P・Q (樂殿2904-2、他)
28		6AEO-D (柳原)	46		6AGN-C・D (鐵治山2737-1、他)
29		6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ	47		6ADJ-D・G 他 (西加座、鶴見、宮前、上園)
30	55	6ABJ-M・X・W (中垣内)	48-1	58	6AGM-M (広頭3385、斎宮小)
31-1		6ADO-M (内山3043-13、岩見)	48-2		6ADP-Q (牛葉3033-1・2、吉田)
31-2		6ACP-I (南裏27-2、鈴木)	48-3		6ABL-M (中垣内34-6、西川)
31-3		6ABD-A (古里588-4、北戸)	48-4		6AGL-B (東前沖2480、倉田)
31-4		6ADQ-T (牛葉3018-2、百五銀行)	48-5		6AGD~6AFE (東前沖、町道側溝)
31-5		6ACC-G (塙山3388-3、水谷)	48-6		6AGC-A (西前沖3550-1、今西)
31-6		6ABO-X (古里76-1、池田)	48-7		6ADT-H (木葉山307、森西)
31-7		6AGI-L (東加座427-1、竹内)	48-8		6ACL-E・F・G (東裏334-15、他)
31-8		6ACN-G (広頭3388-1・5・8・9、森)	48-9		6AEV-J (鉢池341-1、乾)
31-8		6AGD-L (北野2487-1、中川)	48-10		6AGT (牛葉、町道側溝)
31-10		6ADM-O (内山3043-3、斎宮駅)	48-11		6ADP-E (鐵治山2351-1、2352-1、柳原)
31-11		6ADT-I (木葉山304-2、澄野)	48-12		6AFC-H (西前沖2604-8・9、清水)
31-12		6ADT-J (木葉山304-7、宇田)	48-13		6ACM-O (東裏、斎宮小)
32		6ACE-D・E・F (塙山)	48-14		6AET (牛葉、町道側溝)
33		6ADE-C・D 他 (篠林)	49		6ADI-D・U・V・W・X (上園3083、他)
34		6ADE-F・G・H (西加座)	50		6ACH-H (東裏294,297、山本)
35		6APE 他 (西前沖)	51		6AFF-F-D (西加座2663-1・4、2664、轟下)
36	56	6AB1-F (中垣内)	52		6AGF-D (西加座2703、他)
37-1		6AFC-M (西前沖2064、日本経木)	53-1	59	6ACM-P (東裏284、体育館)
37-2		6ADQ-R (牛葉3021-2、野田)	53-2		6ACA-M (古里3280-2、中西)
37-3		6AFC-F (西前沖2064-6、神田)	53-3		6ABE (古里573-2、永納)
37-4		6AFC-M (西前沖2064、日本経木)	53-4		6ACL-S (東裏271-1、田所)
37-5		6AFC-G (西前沖2064-7、中村)	53-5		6ACR (木葉山97-5、田中)
37-6		6ABD-A (古里588-2、北戸)	53-6		6AGO (鐵治山、町道側溝)
37-7		6AEC-M (鷄子2861-2、斎王公民館)	53-7		6ADD-U (篠林3147-3、野呂)
37-8		6ADR-P (木葉山128-8・13・14、富山)	53-8		6AGE-O (東前沖2470-2、上田)
37-8		6AGK-E (東加座2355-1、竹内)	53-9		6ACS-O (木葉山95-2、浅尾)
37-10		6AED-O (樂殿3217-1、渡部)	53-10		6ACA-R (古里3267-1、西川)
37-11		6ADN-O (内山3043-3、斎宮駅)	53-11		6ADR-W (木葉山131-7、西村)

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
53-12	59	6 ABL-K (中垣内464-2、沢)	70-10	62	6 AFD-B・D (西前沖2649-4、大西)
53-13		6 ADQ-L (牛葉3022、辻)	70-11		6 AGO-H (鍛冶山2363-2、川合)
53-14		6 ACM-O (東裏287-3、体育庫)	70-12		6 ADD-F・G (篠林3158、長谷川)
53-15		6 AFK-C・D (西加座2721-1、鉢木)	70-13		6 AEC-N・G (刈干、佐藤)
54		6 AFE-N (西前沖2630、他)	70-14		6ABL-R (中垣内459、北岡)
55		6 AEN-P (柳原、御船2785-1、他)	70-15		6 AFD-A (西前沖2644-1、山本)
56		6 ACH-S (東裏289-1、他)	70-16		6 ACB-A (町道塚山線抜幅)
57		6 AGF-H・I (東加座2441、他)	71		6 ABE (古里501、他)
58-1	60	6 AFK-C・D (西加座2721-1、鉢木)	72-1		6 ABE (古里500、他)
58-2		6 AFH-N (西加座2681-8、三村)	72-2		6 ABF (古里523、他)
58-3		6 ACM-N (東裏3385-2、斎宮小)	72-3		6 ABF (古里551-2、他)
58-4		6 ABL-A (中垣内4731-1、小家)	72-4		6 ABF (古里528-1、他)
58-5		6 ADQ-Q (牛葉、町道側溝)	73		6 AFF-B・C・E・G (西加座2663-5、他)
58-6		6 ADR-V (木葉山131-3、西山)	74-1		6 ABF (古里523、他)
58-7		6 AGS-G (中西611、山路)	74-2		6 ABF (古里522、他)
58-8		6 ABM-A (中垣内430-3他、近鉄)	74-3		6 ABE・F (古里524、他)
59		6 ACJ-I (広頭3379-1、他)	74-4		6 ABE (古里548-1、他)
60		6 AGJ-B・D・G (東加座2450-1、他)	74-5		6 ABE (古里543、他)
61		6 AFF-H・I・D (西加座2663-1、他)	75		6 AGF-C (西加座2702、他)
62		6 AGI-J・K (東加座2425、他)	76-1	63	6 ADB-A~D (町道塚山線抜幅)
63		6 AGF-M・N (西加座2659-1、他)	76-2		6 ADE-F・G (篠林3158、長谷川)
64-1	61	6 ACO-H (牛葉3395-1、トカイ)	76-3		6 ABE (古里554、明和町)
64-2		6 AGL-F (東加座2435-1、大和谷)	76-4		6 ACK (東裏354-13、山際)
64-3		6 ADD-A (篠林3136-1、山路)	76-5		6 AEE-W (楽殿577、岡田)
64-4		6AGR-N (笛川2340、丸山)	76-6		6 ACB-A (塚山3276-1、今西)
64-5		6 ACM-R・Q・P (東裏3385-2、斎宮小)	76-7		6 ACM-M (広頭3385-2、斎宮小)
64-6		6 ACK (東裏361-2、竹川自治会)	76-8		6 AFM-G (鍛冶山2736-3、近鉄)
64-7		6 AGI-G (東加座2435-2、大和谷)	76-9		6 ACQ (南裏144-1、所野)
64-8		6AGR-J (笛川2341-6、山下)	76-10		6ABD-U (古里579、池田建設)
64-9		6ADQ-M (牛葉、町道側溝)	76-11		6 ABE (古里554、明和町)
64-10		6ACF-A (東裏365-1、種口)	76-12		6 AEE (樂殿、町道下水管)
64-11		6 ACM-O (東裏3385-2、斎宮小)	76-13		6 ADD-K (篠林3143、中西)
64-12		6 ADR-B (篠林3162-3、江崎)	76-14		6 AEE-S (楽殿2878-3、山路)
65-1		6 ACC-M (塚山3331-1)	76-15		6 ABF~6ABH (中垣内、県道抜幅)
65-2		6AEG-S (樂殿2908-2、他)	76-16		6 AEK-B (下園2936-2、明和町)
65-3		6AEI-L・M (樂殿2917-4、他)	76-17		6AEV-A (鉢池339-5、永烏)
66		6AGG-C (東加座2437-1、他)	77		6AGJ-D (東加座2453、他)
67		6ABF (古里523、他)	78		6ADL (宮ノ前3054、他)
68		6ABF (古里502、他)	79		6AGG-A・B (東加座2440、他)
69		6AGM-E~H (東加座2373、他)	80		6AFG-F~I (西加座2696、他)
70-1	62	6ACC-X (塚山3325-1、江崎)	81-1	H 1	6 AEC~F (町道塚山線抜幅)
70-2		6AEE-W (樂殿2875-2、岡田)	81-2		6ABJ、6ABK (古里、県道抜幅)
70-3		6ADR-I (木葉山129-5、大西)	81-3		6ADS-M (木葉山137、中川)
70-4		6ACN-A・B・E・L (広頭3389-8、林)	81-4		6AED-L (樂殿2881-2、山本)
70-5		6AEW-A (鉢池333-1、八田)	81-5		6AFQ-C (中西597-2、木戸口)
70-6		6ABL-S (中垣内430-6、奥山)	81-6		6ADD-F (篠林313、池田)
70-7		6AEE-T (樂殿577、浅尾)	81-7		6ABL-U (中垣内430-7、川本)
70-8		6AEU・6AEX-A (牛葉、鉢池、三重翠)	81-8		6ABJ (古里、明和町)
70-9		6AEP-C・D (御館、柳原、近鉄)	81-9		6ACF (中垣内、三重翠)

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
81-10	1	6 A D R - V (木葉山297、明和町)	96-4	4	6 A F N (中西2749-1 本山)
81-11		6 A C M - N (広瀬3385-2、明和町)	96-5		6 A D R - T (木葉山28-3 加藤)
81-12		6 A E D - A (篠林3225、中川)	96-6		6 A D D - D (篠林3138-1 藤井)
81-13		6 A C B (塙山3276-19他、明和町)	97		6 A E M (中垣内482、他)
81-14		6 A E D - F (楽殿2844-2、澄野)	98		6 A F M - C · E (鍛冶山2745、他)
81-15		6 A E D - U (楽殿2885-2、西山)	99	5	6 A D N (内山3046-11、他)
81-16		6 A G (北野3655-1、他)	100		6 A B I - T (中垣内423)
82-1		6 A D I - F ~ J (上園3095、他)	101		6 A D G (篠林3194)
82-2		6 A D I - K · L (上園3100、他)	102-1		6 A D S (木葉山119-5 澄野)
83		6 A F J - C ~ F (西加座2770-3、他)	102-2		6 A E D - J (楽殿2882-5 杉本)
84-1		6 A F J - G (西加座2764-3)	102-3		6 A A Q (花園663-1 中川)
84-2		6 A F H - G · H (西加座2679-1、他)	102-4		6 A C F - A (東裏365-1 穏口)
85-1	2	6 A B D - 6 A C D (古里、三重県)	102-5		6 A B J - D (中垣内493-6 川口)
85-2		6 A C A - P (古里3279、松本)	102-6		6 A G (鍛冶山地内 明和町)
85-3		6 A C J - B · D (東裏、明和町)	102-7		6 A C G - E (東裏318-1 川本)
85-4		6 A B E (竹川573-1、水納)	102-8		6 A E (楽殿地内 明和町)
85-5		6 A E D - U (楽殿2885-2、西山)	103		6 A E Q - A (柳原2779-3)
85-6		6 A F H - B (西加座、明和町)	104		6 A G T (笛川1048-1、他)
85-7		6 A C B - C (塙山3276-3他、加藤)	105	6	6 A F N (鍛冶山2758-1、他)
85-8		6 A B I - N (中垣内427-1、小林)	106-1		6 A E W - J (鈴池338-1 森西)
86		6 A F H - F · G · H (西加座2679-1他)	106-2		6 A E E - W (楽殿2891-3 向井)
87		6 A C E - N · Q · R (塙山3356他)	106-3		6 A F L 他 (鍛冶山地内 明和町)
88		6 A G N - C · D (鍛冶山2411-1他)	106-4		6 A E C - L (刈干2861 坂本)
89-1	3	6 A D M - O (内山3043-5、近鉄斎宮駅)	106-5		6 A G O (鍛冶山2362 青山)
89-2		6 A G I - M (東加座2432-2他、北村)	106-6		6 A C C - B (塙山3340-4 田畑)
89-3		6 A D M - N · O (内山3060-4、近鉄斎宮駅)	107		6 A B I - O (中垣内414-1、他)
90		6 A F H - A · B (西加座2680他)	108		6 A E Q - C (柳原2779-2、他)
91		6 A B H - F (中垣内393、他)	109	7	6 A F L - D · E (鍛冶山2763-1、他)
92		6 A G N - A (鍛冶山2734-3)	110-1		6 A C M - J (東裏262-3 斎宮土地改良区)
93		6 A D N (内山3045-12、他)	110-2		6 A G R - O (笛川2345-3 竹内)
94		6 A E M (御館2942)	111-1		6 A D M (内山地内)
95	4	6 A D N (内山3046-17、他)	111-2		6 A D K (上園地内)
96-1		6 A G M (東加座2374 丸山)	111-3		6 A D L 他 (宮ノ前地内)
96-2		6 A D O (内山3068-3、他 明和町)	112		6 A C B - B (塙山3276-15、他)
96-3		6 A C A - D (古里3260 清水)			



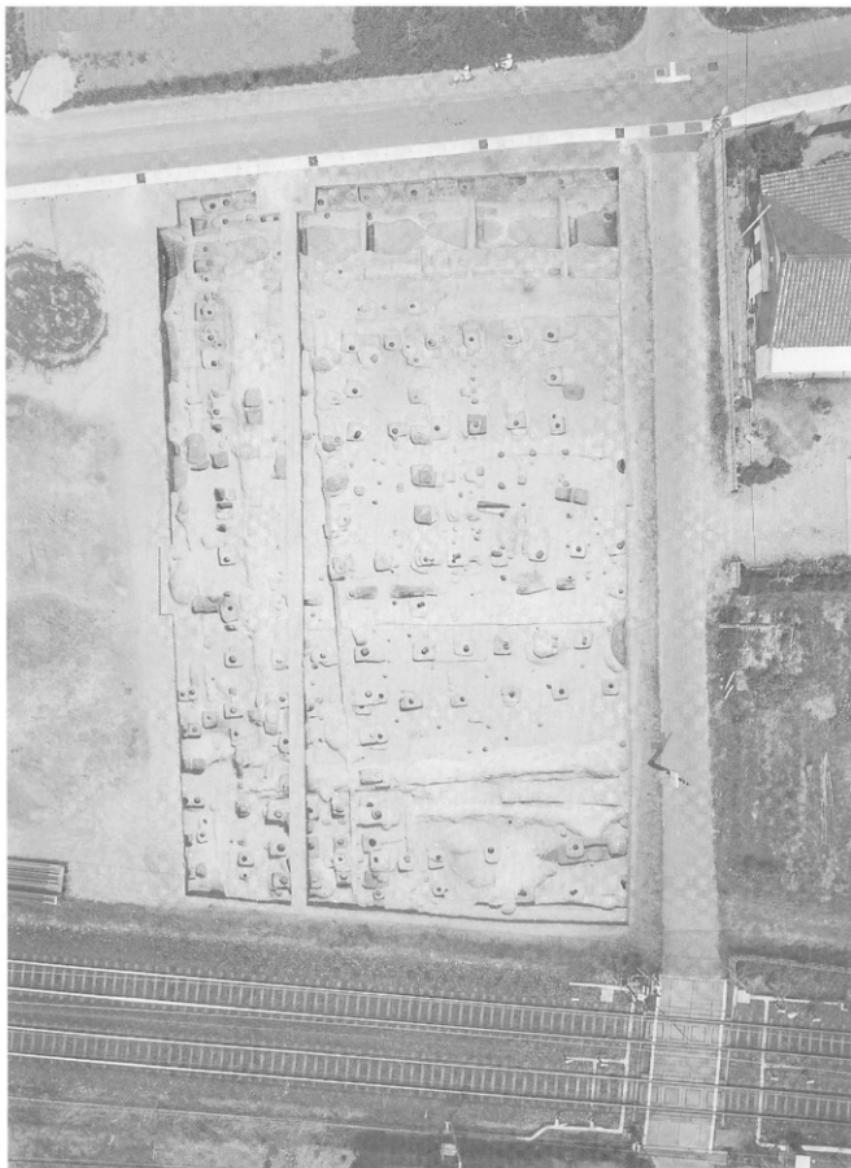
第26図 斎宮跡地区表示



第27図 査宮跡方格地割区画名称

ふりがな	しせきさいくうあと へいせい?ねんどはくつちょうさかいほう						
書名	史跡斎宮跡 平成7年度発掘調査概報						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	吉水康夫・野原宏司・大川勝宏・赤岩操						
編集機関	斎宮歴史博物館						
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965-2-3800						
発行年月日	1996年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
斎宮跡 第109次調査	多気郡明和町斎宮他 斎宮字鍛冶山	24442	210	34° 31' 55" / 34° 32' 30"	136° 36' 16" / 136° 37' 37"	19950406 / 19950925	1,070 計画調査
第111次調査	斎宮字上園他					19950707 / 19960227	1,735 夕
第112次調査	斎宮字塚山					19951212 / 19960131	25 夕
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
斎宮跡 第109次調査	宮跡		掘立柱建物・横列・土坑	土師器・須恵器・墨書き土器・灰釉陶器・綠釉陶器	平安時代初期の斎宮跡における中枢部の一画		
第111次調査			竪穴住居・掘立柱建物 土坑・道路側溝・井戸	土師器・須恵器 灰釉陶器・綠釉陶器	方格地割北西部の遺構確認		
第112次調査			古墳周溝・大溝	須恵器・円筒埴輪・山茶碗	塚山3号墳周溝と大溝		

図 版



調査区全景（真上から）



調査区全景（南から）



調査区全景（東から）



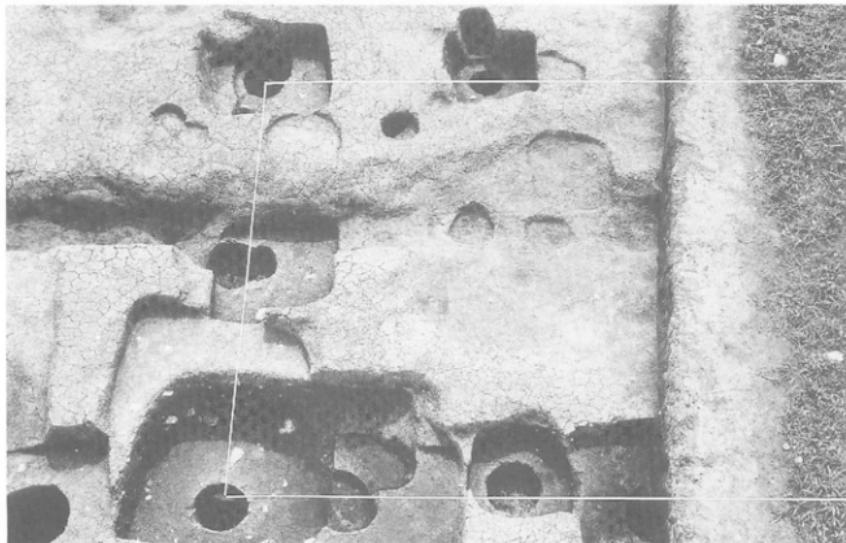
S A 2705・S B 7375・7385 (西から)



S B 7385 (北から)



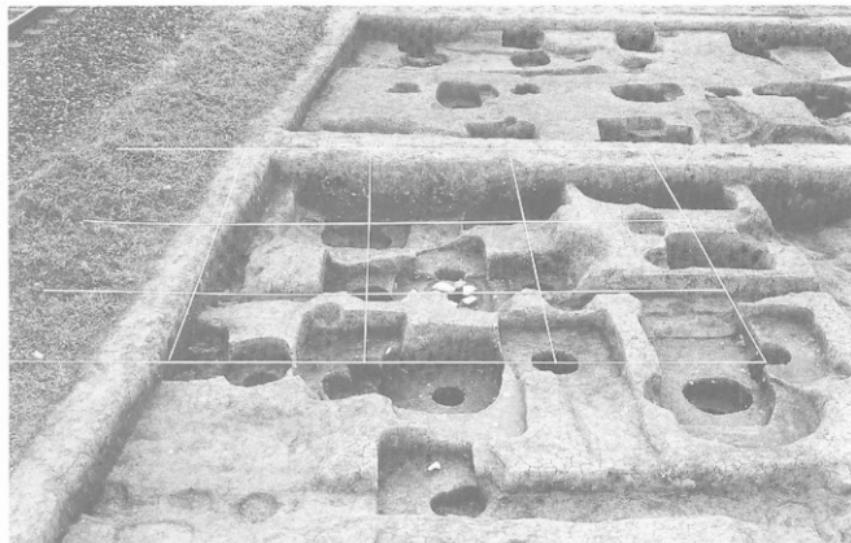
S B 7385・7395 (西から)



S B 7415 (西から)



S B 7375 (北から)



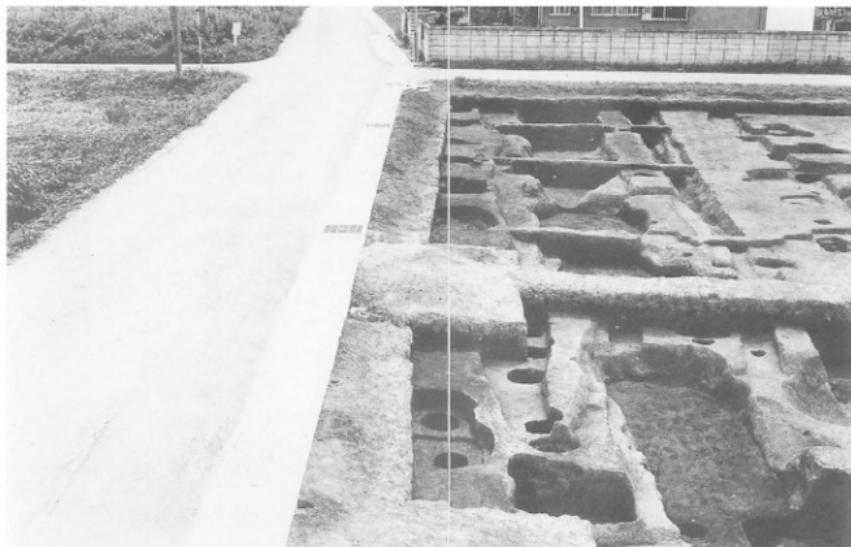
S B 7375 (東から)



S B 1430 (南から)



S B 1430 (西から)



S A 6780 (西から)



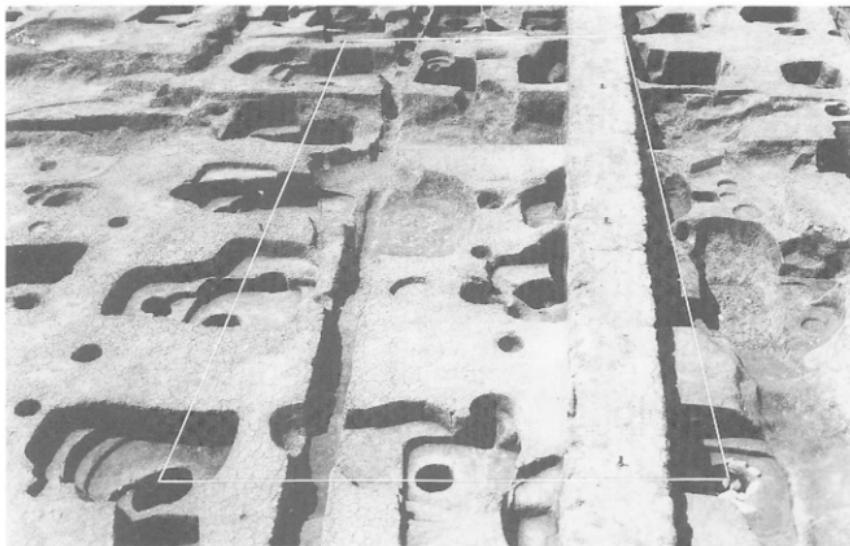
S A 7400・7170 (北から)



S B 7390 (南から)



S B 7390 (西から)



S B 7380 (北から)



S B 7380 (東から)



S B 7410 (北から)



S B 7410 (東から)



S B 7405 (東から)



S B 2700 (東から)



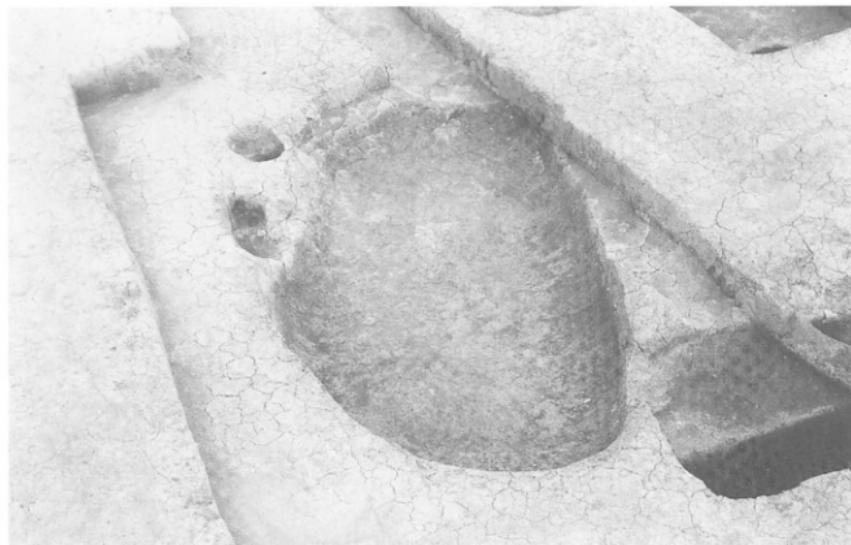
S B 1431 (南から)



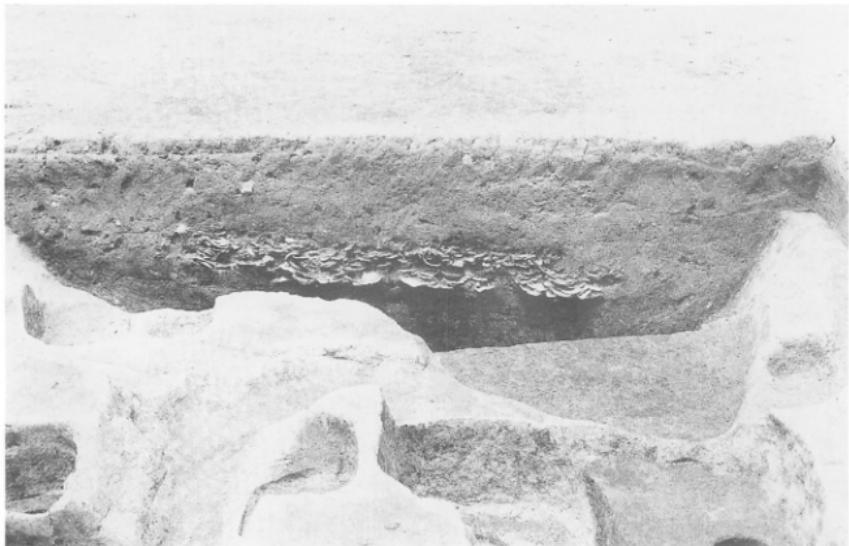
S B 1431 (西から)



S K 7430 (東から)



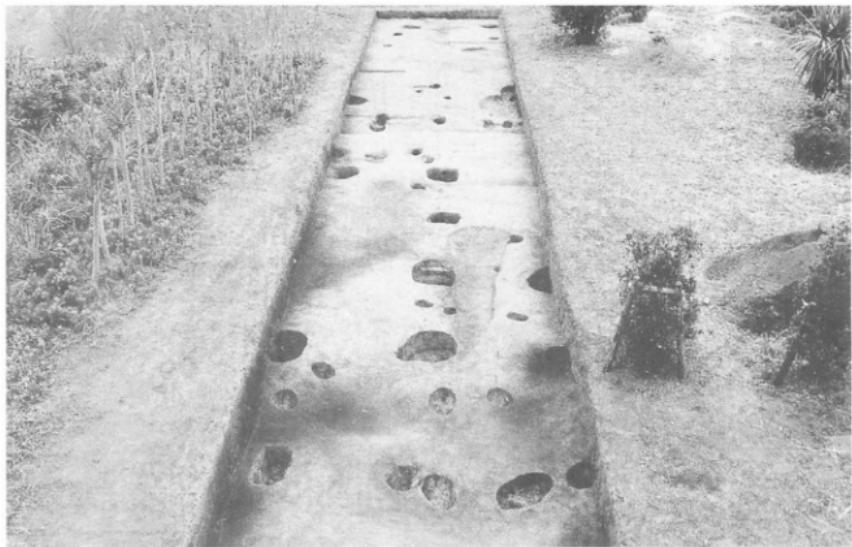
S K 7430 (南から)



S K 7420 (東から)



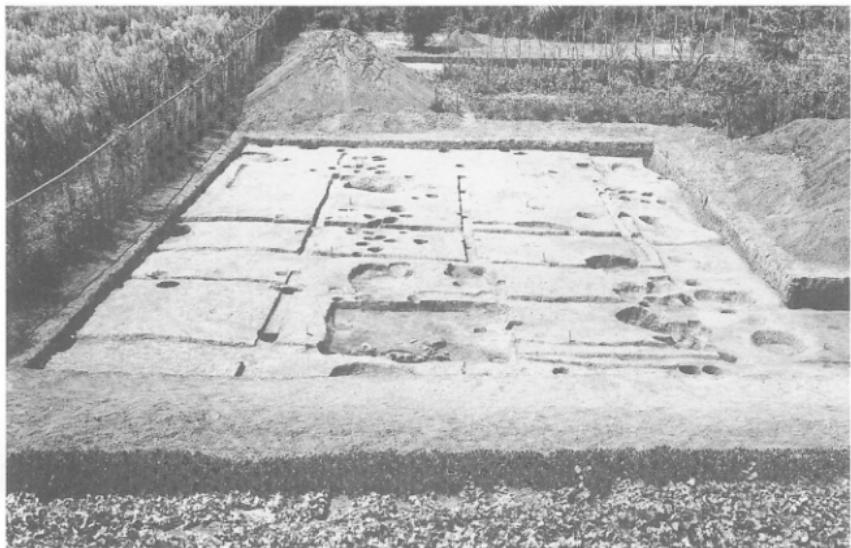
S K 7432 (南から)



111-1次 Aトレンチ全景（北から）



Aトレンチ S B 7435・7437（南から）



111-1次 Bトレンチ全景（東から）



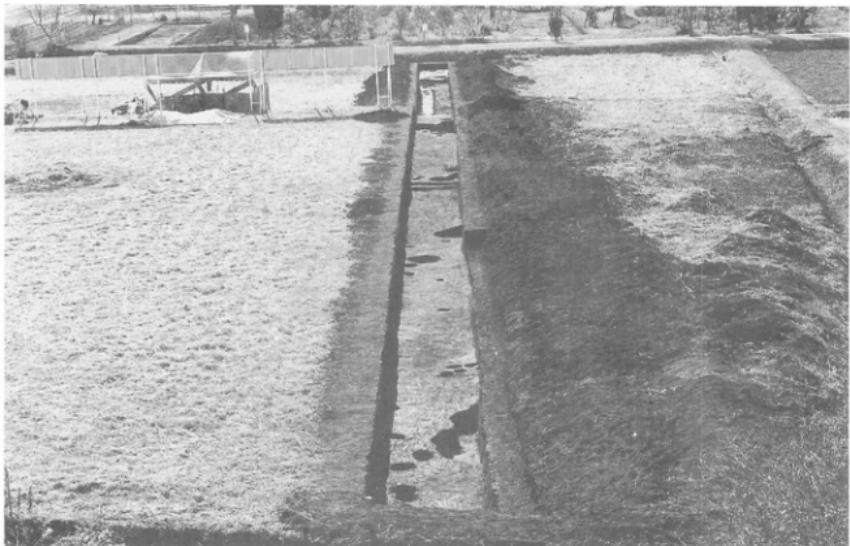
Bトレンチ SB 7445（北から）



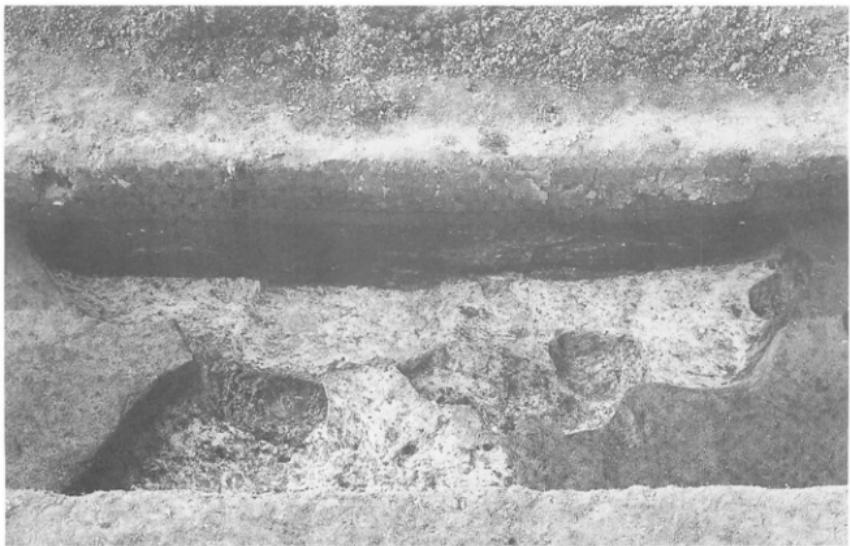
B トレンチ SB 7440 (北から)



111-2次 C トレンチ 全景 (北から)



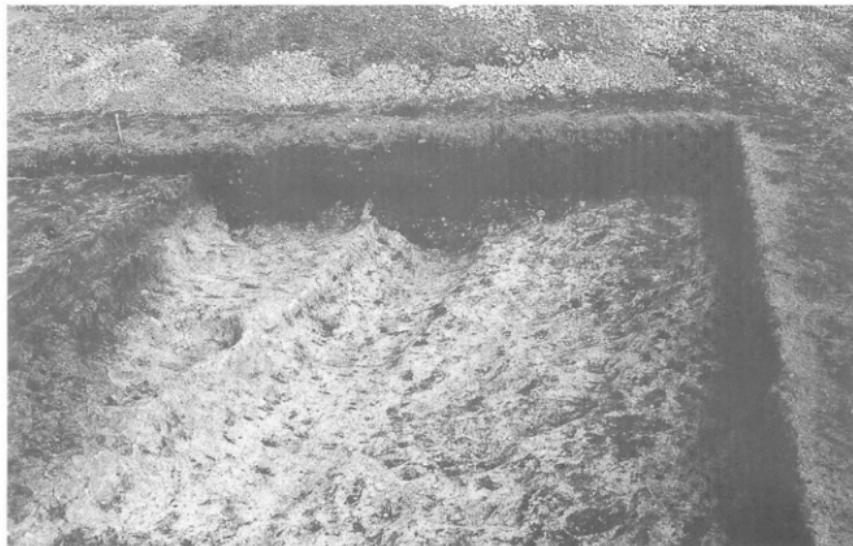
111-2次 Dトレーニチ 全景（北から）



S B 7465 (東から)



111-2次 E トレンチ 全景（北から）



S D 7470 (西から)



111-3次 F トレンチ 北半（北から）



F トレンチ 南半（南から）



111-3次 Gトレーンチ 全景（北から）



111-3次 Hトレーンチ 全景（北から）



111-3次 H トレンチ SD 7478 (南から)



111-3次 H トレンチ SD 7479・7480 (東から)



111-3次　I トレンチ　全景（南から）



111-3次　J トレンチ　全景（北から）



調査区全景（北から）



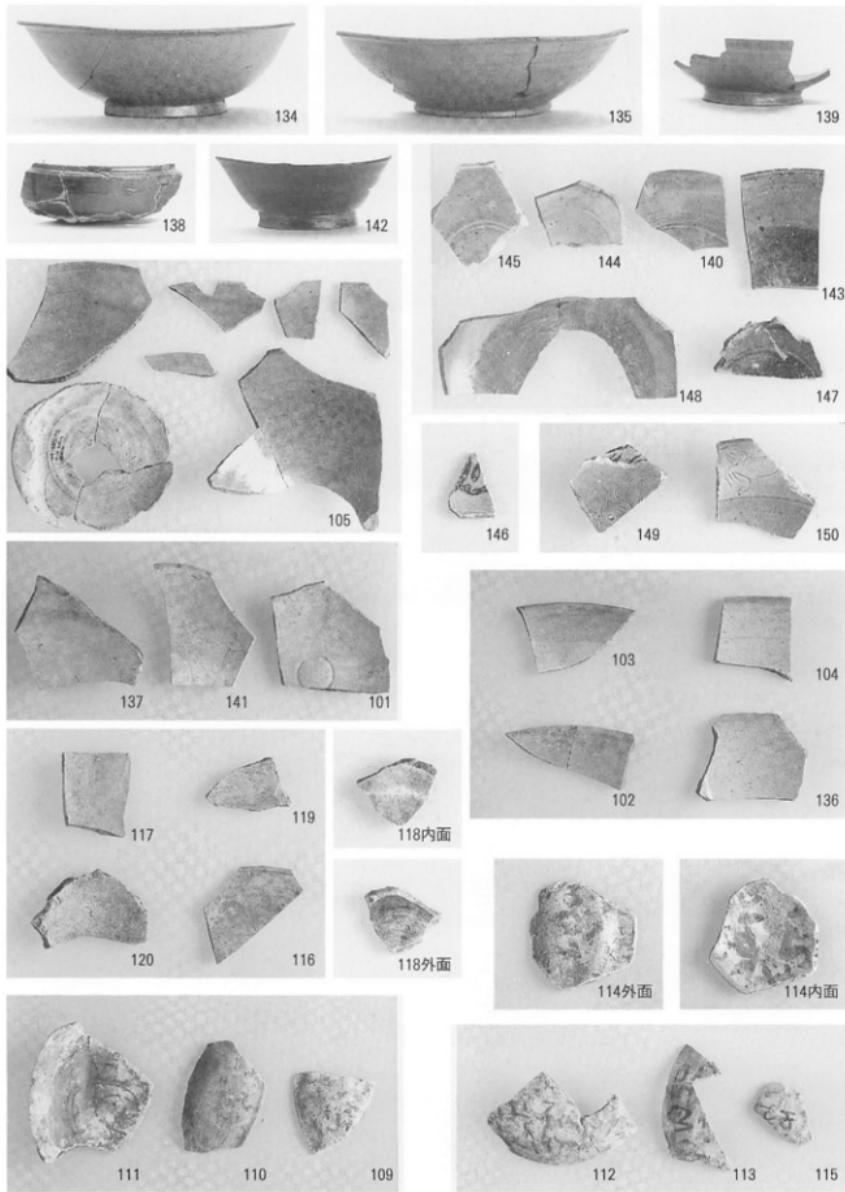
112次 Bトレーニチ（北東から）



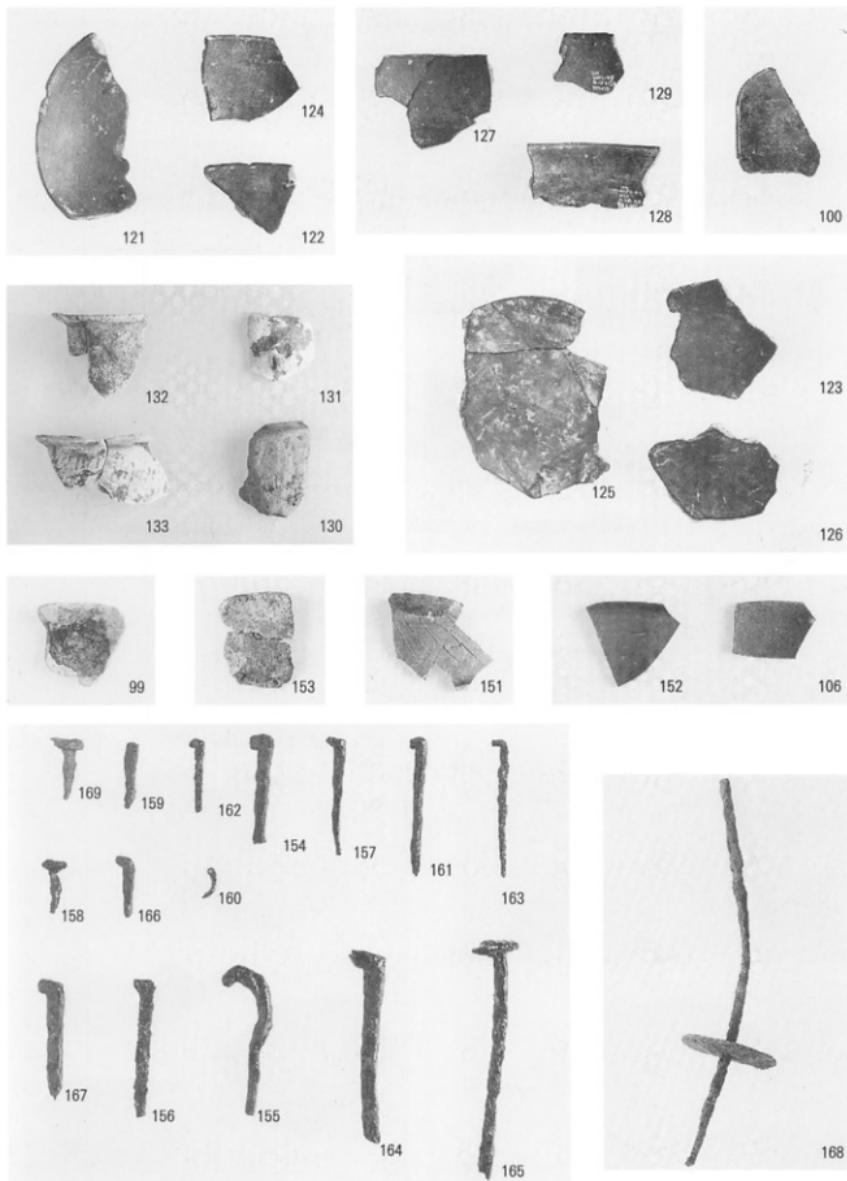
112次 Iトレーニチ（南東から）



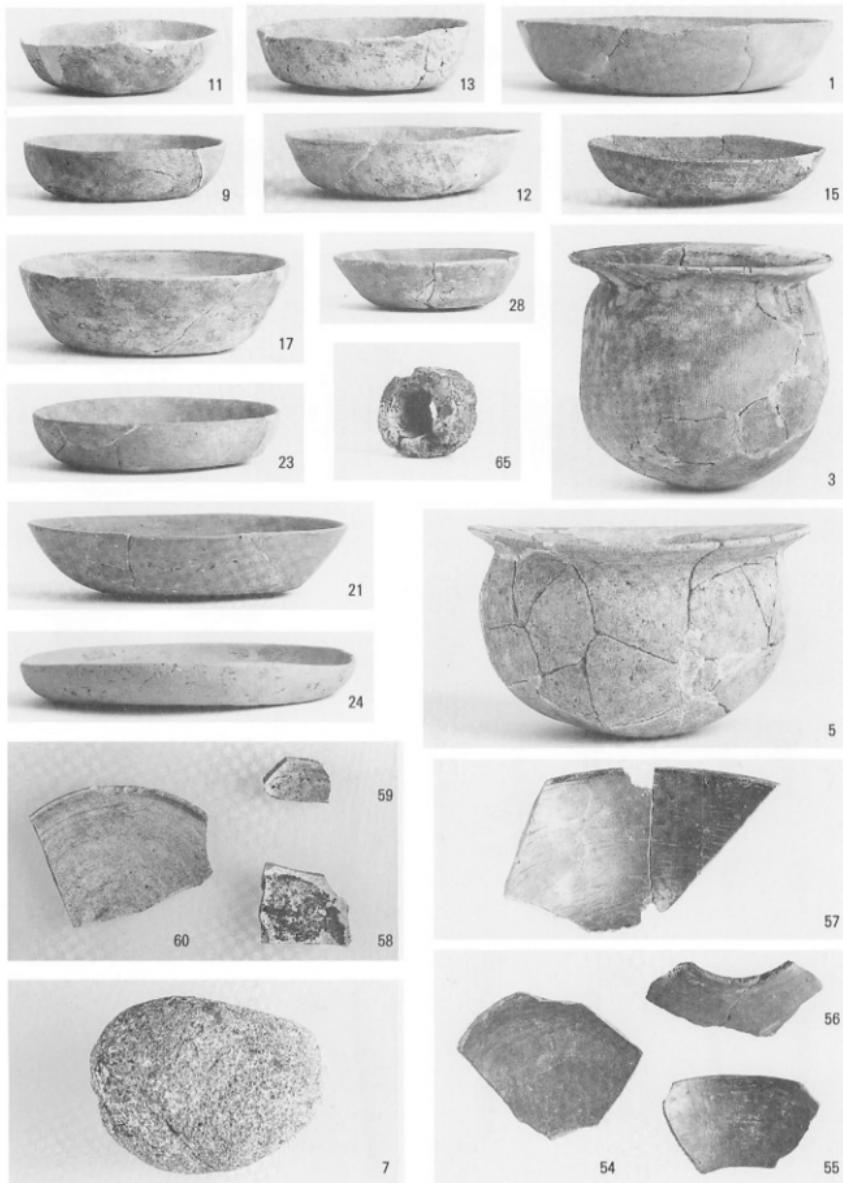
出土遺物 (76のみ 1:6)



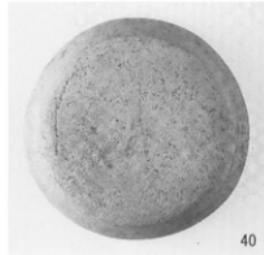
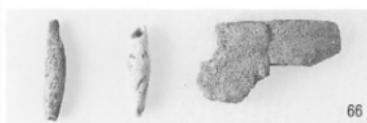
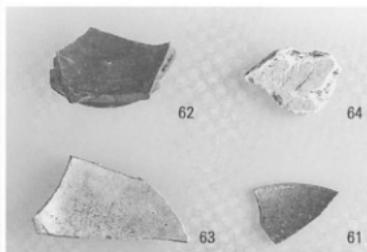
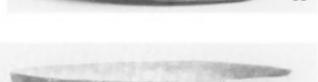
出土遺物 (114のみ 1:2)



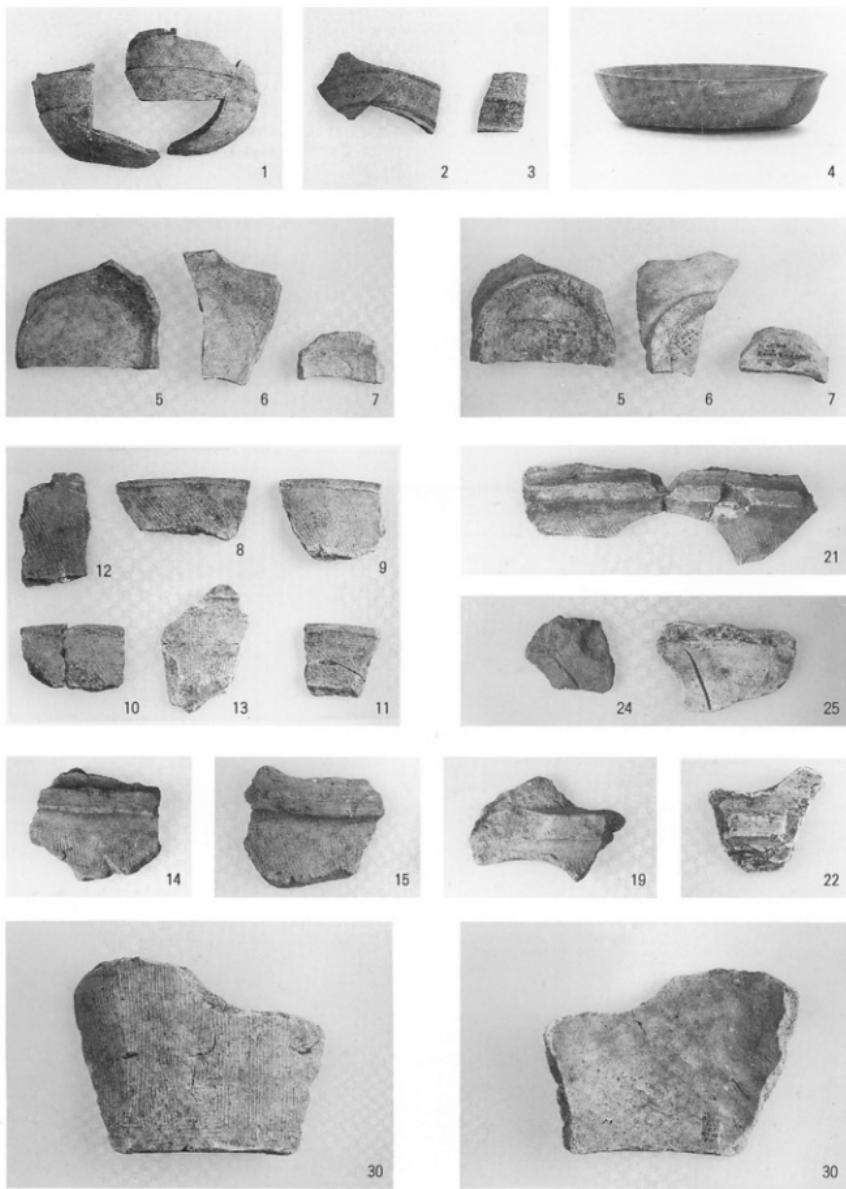
出土遺物



出土遺物



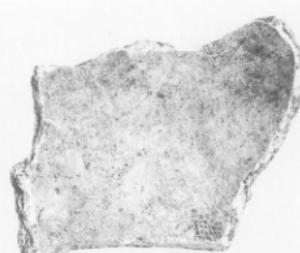
出土遺物



出土遺物



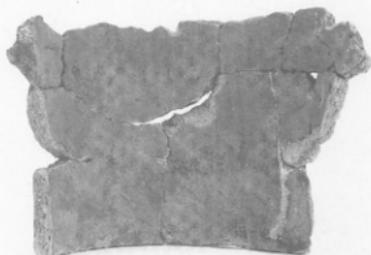
29



29



28



28



形象埴輪片

出土遺物

史跡 斎宮跡
平成 7 年度
発掘調査概報

平成 8 年 3 月 31 日

編集発行 斎宮歴史博物館
印 刷 光出版印刷株式会社
